

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

鳥取県鳥取市

本高弓ノ木遺跡(4区)

2014

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

鳥取県鳥取市

本高弓ノ木遺跡(4区)

2014

鳥取県教育委員会

序

国土交通省が整備を進めている山陰自動車道は、鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする延長約 380km の高規格道路です。現在、鳥取県東部では、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長 19.3km の区間で、一般国道 9 号（鳥取西道路）改築工事が行われています。

さて、その一環として、鳥取県教育委員会では、この工事計画地内に所在する遺跡の発掘調査を平成 20 年度から実施しており、平成 21 年度からは財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査、出土遺物等の整理作業、報告書の作成を委託しています。

このうち平成 21・22 年度に発掘調査を実施した本高弓ノ木遺跡では、膨大な遺物が出土し、古墳時代前期や、弥生時代の遺構がみつかりました。本書はその調査の記録と成果をまとめたものです。ここに記録された調査成果が今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

さらに、発掘調査および本書の作成に当たっては、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、地元関係者の方々から一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

鳥取県教育委員会

教育長 横 濱 純 一

例 言

もとだかゆみのき

- 1 一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ『本高弓ノ木遺跡(4区)』は、一般国道9号(鳥取西道路)改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成22年度に実施した本高弓ノ木遺跡4区の発掘調査報告書である。
- 2 本高遺跡は鳥取市本高97、109、110-2、112-2、113-2、218-1、218-2、219-1～3、220-1・2、221-1・2、222-1～5、224-1・2、225-1～3に所在する。4区の調査面積は474㎡、発掘調査の期間は平成22年4月26日～平成23年2月24日である。なお、平成21年度に4区内において、小規模なトレンチを設定して遺跡の内容確認を行った。
- 3 出土品などの注記に使用した略号は「本ユミ09」「本ユミ10」である。
- 4 発掘調査の監理は財団法人鳥取県教育文化財団に委託し、同財団調査室美和調査事務所調査第1担当の濱田竜彦、岸本浩忠、中尾智行、下江健太、山梨千晶が発掘調査を監理した。
- 5 発掘調査に際し、国際文化財株式会社の支援を受けた。平成21年度の現場代理人は竹内眞哉、飯田英樹、支援調査員は片山博道、鈴木恵介、石松直、栗木寧、日柴喜勝重、大山裕喜、平成22年度の現場代理人は飯田秀樹、支援調査員は安村健、脇本博康、江藤敦、青島邦夫である。
- 6 遺跡での掘削作業、記録作成は、財団法人鳥取県教育文化財団の指示のもと国際文化財株式会社が行った。
- 7 遺跡で出土した遺物の整理作業や記録作成は、財団法人鳥取県教育文化財団の文化財主事と整理作業員が行った。
- 8 本書の第Ⅰ～Ⅲ章は濱田、第Ⅳ・Ⅴ章は中尾が執筆した。
また、編集は濱田が担当し、そのさい第Ⅳ・Ⅴ章の一部に加筆を行った。
- 9 現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々、機関から、様々な御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます。
中原計(鳥取大学)、鳥取市教育委員会、鳥取大学地域学部、公益財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター、公益財団法人大阪府文化財センター

凡 例

- 1 本遺跡及び本書では国土座標第V系に基づき地区割りを設定した。
平面図の方位は座標北を示し、図中にX・Y座標軸をm単位で表記した。
- 2 標高は海拔標高で示した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000、1/200,000 地形図）、鳥取市作成の都市計画図（1/5,000）を縮小、加筆したものである。
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相・明度・彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面は湿った状態を保つように留意し、色相・明度・彩度を判断するようにした。
- 6 遺構平面図の縮尺は統一していない。

目 次

序・例言・凡例

第 I 章 発掘調査の経緯	濱田竜彦	1
第 1 節 発掘調査にいたる経緯		1
第 1 項 原因		1
第 2 項 経緯		1
第 2 節 発掘調査の経過		2
第 1 項 平成 21 年度の発掘調査		2
第 2 項 平成 22 年度の発掘調査		4
第 3 節 調査体制		5
第 II 章 本高弓ノ木遺跡の位置と環境	濱田	9
第 1 節 本高弓ノ木遺跡の位置と地理的環境		9
第 1 項 遺跡の位置		9
第 2 項 本高弓ノ木遺跡周辺の地形・地質		10
第 2 節 有富川周辺の遺跡と歴史的環境		10
第 III 章 発掘調査の方法	濱田	15
第 1 節 試掘調査の成果と本調査の方針		15
第 1 項 試掘調査成果の概要		15
第 2 項 本調査の方針		15
第 2 節 調査地の地区割りとグリッド名		16
第 1 項 調査地の地区割り		16
第 2 項 調査区とグリッド名		18
第 3 節 調査の記録と対象		18
第 1 項 記録の対象		18
第 2 項 遺構名と番号		18
第 3 項 遺物の取り上げと遺物カードの記載		18
第 4 節 調査と記録作成の方法		19
第 1 項 掘削		19
第 2 項 土層区分と土層名		19
第 3 項 遺構面		20
第 4 項 図面による記録		20
第 5 項 写真による記録		20
第 5 節 出土遺物の整理		21

第IV章 調査成果	中尾智行	23
第1節 調査区と基本土層		23
(1) 調査区の位置と地形		23
(2) 調査区の形と地区割り		23
(3) 内容確認調査を行った位置		23
(4) 基本層序と遺構面		23
第2節 遺構と遺物		31
第1項 第1a層下面の遺構と遺物		31
第2項 第2a層下面の遺構と遺物		31
第3項 第3-1-1a層下面の遺構と遺物		34
第4項 第3-1-2a層下面の遺構と遺物		37
(1) 上部の遺構と遺物		38
(2) 下部の遺構と遺物		53
第5項 第3-2a層下面の遺構と遺物		59
第6項 第4a層下面の遺構と遺物		63
第7項 第5a'層下面の遺構と遺物		63
第V章 総括	中尾	77

図版・抄録・奥付

挿図一覧

第 I 章		第 IV -20 図	4-1 区 第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面図
第 I -1 図	鳥取西道路の路線図と調査地の関係		
第 I -2 図	調査地の位置	第 IV -21 図	4-3 区 第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面図
第 II 章		第 IV -22 図	4-3 区 34 溝 断面図
第 II -1 図	鳥取県と遺跡の所在地	第 IV -23 図	4-4 区 第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面図
第 II -2 図	本高弓ノ木遺跡周辺の遺跡		
第 III 章		第 IV -24 図	4-4 区 8 溝北側 遺物出土状況
第 III -1 図	地区割り模式図（鳥取県）	第 IV -25 図	4-4 区 8 溝南側 遺物出土状況
第 III -2 図	調査地の地区割り（第 I・II・III・ IV 区画）	第 IV -26 図	4-4 区 35 盛土 平・断面図
第 III -3 図	a 層下面検出遺構面の概念図	第 IV -27 図	4-4 区 9 溝 木製構造物 平・断面図
第 IV 章		第 IV -28 図	第 3-1-2a 層出土の土器
第 IV -1 図	4 区 調査区およびグリッド配置図	第 IV -29 図	8 溝出土の土器
第 IV -2 図	4 区 基本層序模式図	第 IV -30 図	第 3-1-2a 層および 8 溝出土の木製品
第 IV -3 図	4-1 区 南側断面図	第 IV -31 図	8 溝および 9 溝出土の木製品
第 IV -4 図	4-2 区 北側断面図	第 IV -32 図	第 3-1-2a 層下面 下部の遺構群 平面 図
第 IV -5 図	4-3 区 北側断面図	第 IV -33 図	4-3 区 第 3-1-2a 層下面 下部の遺構群 平面図
第 IV -6 図	4-4 区 北側断面図	第 IV -34 図	4-3 区 ピット群 断面図
第 IV -7 図	第 2a 層下面 平面図	第 IV -35 図	4-3 区 26 土坑 平・断面図
第 IV -8 図	4-3 区 第 2a 層下面 平面図	第 IV -36 図	4-4 区 第 3-1-2a 層下面 下部の遺構群 平面図
第 IV -9 図	4-3 区 2～4 暗渠 断面図	第 IV -37 図	4-4 区 第 3-1-2a 層下面 南壁断面図
第 IV -10 図	4-2 区 第 2a 層下面 平面図	第 IV -38 図	4-4 区 40 溝 平面図・遺物出土状況
第 IV -11 図	4-2 区 1 土坑 平・断面図	第 IV -39 図	4-4 区 40 溝 木材（ムクノキ）出土状 況 平面図
第 IV -12 図	第 2a 層出土遺物	第 IV -40 図	4-4 区 40 溝 被覆材の検出範囲
第 IV -13 図	第 3-1-1-a 層下面 平面図	第 IV -41 図	40 溝出土の土器
第 IV -14 図	4-1 区 第 3-1-1-a 層下面 平面図	第 IV -42 図	4-4 区 40・50 溝 断面図
第 IV -15 図	4-3 区 第 3-1-1-a 層下面 平面図	第 IV -43 図	40 溝出土の石器
第 IV -16 図	4-4 区 第 3-1-1-a 層下面 平面図	第 IV -44 図	40 溝出土の木製品
第 IV -17 図	第 3-1-1a 層出土遺物	第 IV -45 図	40 溝出土の木材
第 IV -18 図	第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面 図	第 IV -46 図	第 3-2a 層下面 平面図
第 IV -19 図	4-1 区 第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面図	第 IV -47 図	4-1 区 第 3-2a 層下面 平面図
		第 IV -48 図	4-1 区 中央土層 断面図

- 第IV -49 図 4-2 区 第 3-2a 層下面 平面図
 第IV -50 図 4-2 区 5 土坑、6 ピット、7 溝、13
 ピット 平面図
 第IV -51 図 4-4 区 第 3-2a 層下面 平面図
 第IV -52 図 4-1 区 11 溝出土遺物
 第IV -53 図 4-1 区 12 溝出土遺物
 第IV -54 図 4-1 区 第 3-2a 層出土遺物
 第IV -55 図 4-4 区 55 土坑 平・断面図
 第IV -56 図 第 4a 層下面 平面図
 第IV -57 図 4-3 区 第 4a 層下面 平面図
 第IV -58 図 4-3 区 52 溝 断面図
 第IV -59 図 第 5a' 層下面 平面図
 第IV -60 図 4-1 区 第 5a' 層下面 平面図
 第IV -61 図 4-3 区 第 5a' 層下面 平面図
 第IV -62 図 4-3 区 第 5a' 層出土の石器
 第V 章
 第V 図 本高弓ノ木遺跡における古墳時代前期の
 溝（想定図）

図版一覧

- 図版 1
 1 4-1 区 南壁土層 断面（北から）
 2 4-3 区 北壁土層 断面（南から）
 3 4-4 区 断ち割り 断面 5a' 層以下（南から）
 図版 2
 1 4-2 区 第 2a 層下面 検出状況（南東から）
 2 4-3 区 第 2a 層下面 暗渠土層断面（北西から）
 3 4-2 区 1 土坑 完掘状況（東から）
 図版 3
 1 4-1 区 第 3-1-1a 層下面 擬似畦畔検出状況（北
 西から）
 2 4-4 区 第 3-1-1a 層下部下面 擬似畦畔検出状
 況（南西から）
 3 4-4 区 第 3-1-1a 層下部下面 擬似畦畔土層断
 面（南から）
 図版 4
 1 4-1 区 第 3-1-2a 層下面 足跡痕検出状況（北
 西から）
 2 4-1 区 第 3-1-2a 層下面 足跡痕検出状況 2（北
 東から）
 3 4-1 区 第 3-1-2a 層下面 足跡痕検出状況（近接）
 図版 5
 1 4-1 区 第 3-1-2a 層 遺物出土状況（南西から）
 2 4-1 区 第 3-1-2a 層下面 杭 1～4 土層断面（南
 西から）
 3 4-3 区 34 溝 完掘状況（南から）
 図版 6
 1 4-3 区 34 溝 土層断面（南から）
 2 4-4 区 北壁 土層断面（南東から）
 3 4-4 区 8 溝・40 溝 土層断面（南西から）
 図版 7
 1 4-4 区 9 溝・41 溝 土層断面（南西から）
 2 4-4 区 8 溝中層 木製品出土状況（西から）
 3 4-4 区 8 溝 木製品出土状況 1
 図版 8
 1 4-4 区 8 溝 木製品出土状況 2
 2 4-4 区 8 溝 木製品出土状況 3（西から俯瞰）
 3 4-4 区 8 溝 木製品出土状況 4（南から）
 図版 9
 1 4-4 区 9 溝中層 完掘状況（南から）
 2 4-4 区 9 溝上層 上面 35 盛土状遺構 検出状況
 （西から）
 3 4-4 区 9 溝上層 上面 35 盛土状遺構 土層断面
 （北西から）
 図版 10
 1 4-4 区 9 溝 東肩の木製構造物 土層断面（西
 から）
 2 4-4 区 9 溝 東肩の木製構造物（南西から）
 3 4-3 区 第 3-1 層下面 遺構完掘状況（南東から）

図版 11

- 1 43区 43ピット 土層断面（北から）
- 2 43区 24ピット 土層断面（南から）
- 3 43区 16・17ピット 土層断面（南から）

図版 12

- 1 43区 20ピット 土層断面（南から）
- 2 42区 6ピット 土層断面（北東から）
- 3 43区 26土坑 遺物出土状況（東から）

図版 13

- 1 44区 8溝・41溝 完掘状況（南西から）
- 2 44区 8溝（底面）・40溝（肩部）完掘状況（北東から）

図版 14

- 1 44区 8溝底面 南側遺物出土状況および40溝東壁保存植物の分布（南から）
- 2 44区 54溝 遺物出土状況（北から）
- 3 44区 40溝底面 遺物出土状況（北西から）

図版 15

- 1 44区 40溝 完掘状況（南から）
- 2 44区 40溝 木材出土状況（南東から）

図版 16

- 1 44区 40溝 木材出土状況（西から俯瞰）
- 2 41区 10～12溝 完掘状況（北東から）

図版 17

- 1 41区 中央ベルト 土層断面（北西から）
- 2 42区 13ピット 完掘状況（東から）
- 3 42区 第3-2a層下面 遺構完掘状況（南東から）

図版 18

- 1 44区 55土坑 土層断面（西から）
- 2 44区 断ち割り内 遺物出土状況（南東から）
- 3 44区 断ち割り内 遺物出土状況（東から）

図版 19

- 1 第2a層、第3-1-1a層、第3-1-2a層 出土遺物（土器）
- 2 8溝、40溝 出土遺物（土器）

図版 20

- 1 40溝、11溝、12溝 出土遺物（土器）
- 2 8溝 出土遺物（土器）
- 3 40溝、第5a層 出土遺物（石器）
- 4 8溝 出土遺物（木製品）

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査にいたる経緯

第 1 項 原因

本高弓ノ木遺跡は千代川の支流、有富川の西方にある丘陵裾部に所在する〔第 I -1・ I -2 図〕。発掘調査の原因となったのは、国土交通省（以下、国交省）が鳥取市本高から鳥取市青谷町青谷間に計画した一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築工事である〔第 I -1 図〕。現在、鳥取県内では山陰自動車道等の高規格自動車専用道路の整備が推進されており、このうち、一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築は山陰自動車道の一部をなす。

第 2 項 経緯

鳥取西道路の計画地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く存在している。そのため、道路の建設に先立って、計画地内に所在する遺跡の取扱いに関する協議が国交省、鳥取県教育委員会（以下、県教委）、鳥取市教育委員会（以下、市教委）によって行われた。その結果、埋蔵文化財包蔵地の有無、内容、範囲などの概要を確認するために県教委と市教委が計画地内を踏査し、平成 17 年度からは、市教委が遺跡の内容を把握するために試掘調査を実施することになった。

本高弓ノ木遺跡は、平成 20（2008）年 9 月 24 から 10 月 1 日にかけて鳥取市本高字弓ノ木、飛井田ノ一、毛勝地内で行われた試掘調査によって、新たに確認された埋蔵文化財包蔵地である^{註1}。当



第 I -1 図 鳥取西道路の路線図と調査地の関係

該地には、橋脚および盛土による道路の建設が計画されており、国交省、県教委及び市教委による協議と、文化財保護法第 94 条に関わる手続きを経て、国交省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受けた県教委が発掘調査を実施することが決まり、平成 20 年度から本調査が開始された。

なお、本高弓ノ木遺跡のうち、橋脚が建設される 1 区、2 区、そして、トレンチャーによって工事が行われる 3 区は平成 20 年度に鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した^{註2}。一方、本書で報告を行う 4 区と平成 25 年に報告書が刊行された 5 区は、県教委が財団法人鳥取県教育文化財団（以下、県教育文化財団）に発掘調査を再委託し、県教育文化財団調査室美和調査事務所第 1 担当の監理のもと、国際文化財株式会社西日本支店（以下、国際文化財）の調査支援を受けて発掘調査を実施した〔第 I-2 図〕。

ただし、再委託当初は、4 区と 5 区を併せて全面調査する計画であったが、平成 21 年度に実施した 5 区の調査成果が、当初設計の内容と大幅に異なっており、調査の方針についての検討が必要となった。その結果、4 区における道路の建設工法が盛土から橋脚に変更され、4 区では、橋脚が建設される 4 地点のみを発掘調査することとなった。橋脚の建設に伴う発掘調査地点は、北側から 4-1 区、4-2 区、4-3 区、4-4 区である。〔第 I-2 図〕

そして、当初は 1 年の計画であった 4 区と 5 区の発掘調査期間についても見直しが必要となり、平成 21 年 5 月 1 日～平成 22 年 3 月 5 日、平成 22 年 4 月 26 日～平成 23 年 2 月 24 日にかけて、対象となる範囲を発掘調査し、膨大な出土品を県教育文化財団調査室美和調査事務所に持ち帰り、整理作業および発掘調査報告書の作成を行った。なお、整理作業および発掘調査報告書の作成は県教育文化財団が行った。

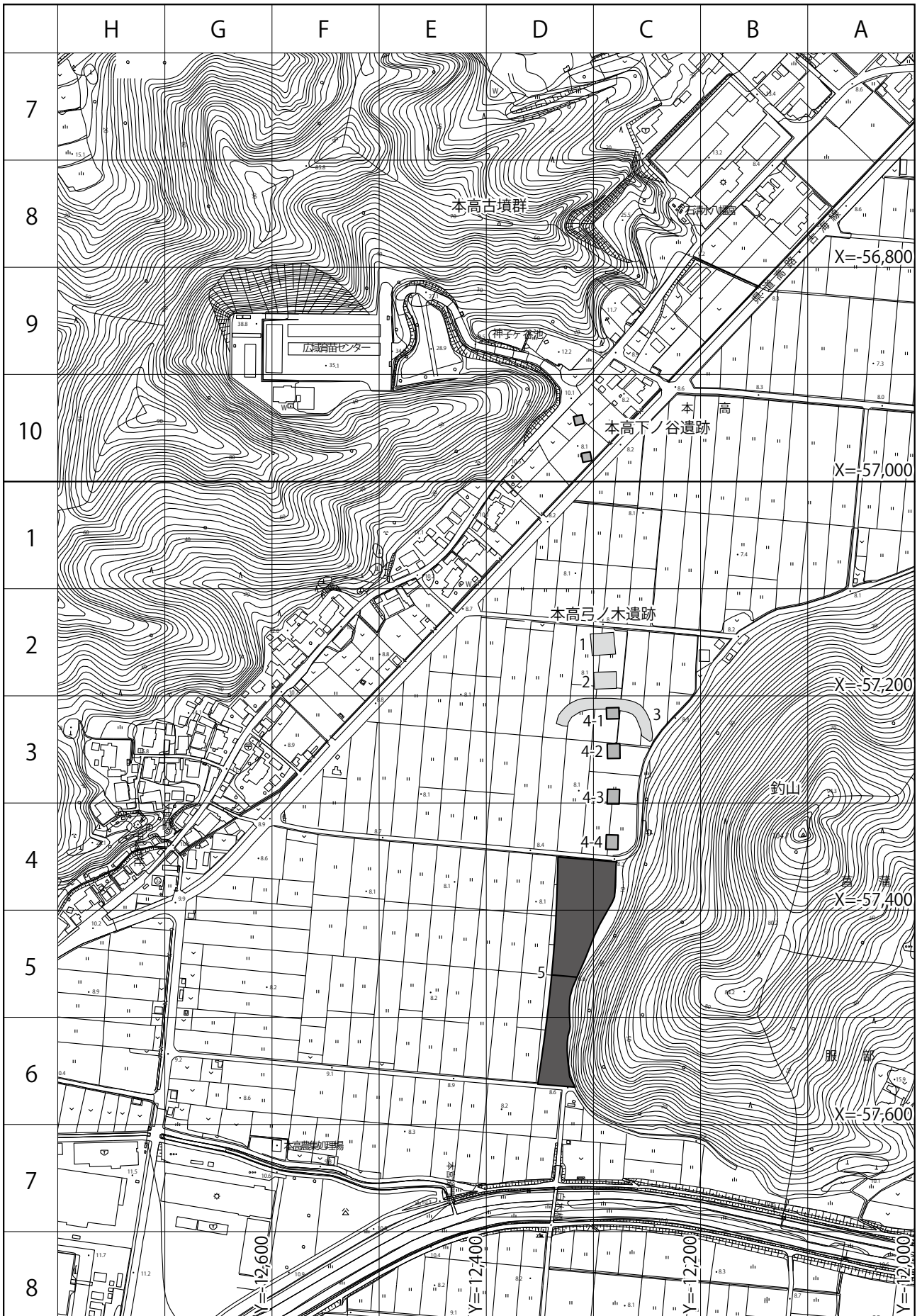
第 2 節 発掘調査の経過

第 1 項 平成 21 年度の発掘調査

本高弓ノ木遺跡 4 区、5 区、本高下ノ谷遺跡の発掘調査を実施するため、平成 21 年 4 月 1 日に県教委と県教育文化財団との間で「一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財調査（本高地区）」の委託契約を締結した。本高弓ノ木遺跡は調査面積の 4 区と 5 区を合わせて 18,720㎡、調査対象は包含層 1 層と遺構面 1 面（部分的に 2 面）という設計であった。また、調査後は、4 区と 5 区に盛り土工法によって道路が建設される計画であった。

そして、5 月 1 日に、県教育文化財団と国際文化財の間で、本高弓ノ木遺跡 4・5 区と本高下ノ谷遺跡 1・2 区における発掘調査支援業務に関する委託契約が締結され、5 月 26 日から本高弓ノ木遺跡 5 区を調査するための事前準備を始めた。支援内容は、契約日から 11 月 30 日までの現地調査と、その後の記録類の整理、編集である。

ところが、6 月半ばに、先行して人力による掘削作業を開始した 5 区で、グリッドラインにそってサブトレンチを設けて下層の確認を行ったところ、無遺物包含層として調査対象外となっていた地層に古墳時代や弥生時代の土器が含まれていることが確認され、調査対象地内に少なくとも 2 面以上の遺構面が存在していることが明らかとなった。また、7 月末には、さらに下にも縄文時代晩期の土器を包含する地層があり、少なくとも 3 面以上の遺構面を調査の対象としなければならないことが判明



第 I-2 図 調査地の位置

した。このため、県教育文化財団と県教委の間で協議を行い、今後の調査の方法と調査期間に係る設計の見直しを前提とした検討が始まった。

8月になって、県教育文化財団と県教委の間で数度の現地協議を行い、県教委の指示により、県教育文化財団から国際文化財に対して、設計の変更を前提とした調査期間の延長に関する指示書が手交され、承諾された。そして、10月26日付けで、県教育文化財団から実施計画の変更に関する協議書が県教委に提出され、県教委と国交省との協議を経て、11月19日付けで県教育文化財団からの協議事項が承諾され、県教委と県教育文化財団との間で変更契約を締結、翌20日に県教育文化財団と国際文化財が調査支援に係る変更契約を締結した。4区に関わる主な変更点は、平成21年度における4区を対象とした調査の延期である。

なお、平成21年度には4区の調査方針を決定するため、トレンチを3C-6j区と、3C-10h区に設定して、堆積状況、遺構および遺物の確認を行った。その結果、4区の広範囲に複数の遺物包含層や遺構面が広がる可能性が高いことが明らかになった。

第2項 平成22年度の発掘調査

平成22年2月をもって、平成21年度の発掘調査を中断していた本高弓ノ木遺跡5区の発掘調査を継続するため、県教委と県教育文化財団との間で平成22年4月23日に「一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財調査（本高地区）」の委託契約を締結し、4月26日に県教育文化財団と国際文化財との間で発掘調査支援業務に関する委託契約が締結された。一方、4区は、全面盛り土だった工法が変更され、橋脚が建設されることとなった。そのため、国交省による道路本体の設計変更を待って、7月7日に県教委と県教育文化財団との間で変更契約を締結し、4区の調査が追加された。4区に計画された橋脚は4カ所、調査平面積は計474㎡である。

その後、5区北半の調査に併行して、9月2日から4区の調査を開始した。4ヶ所の調査地点は、北から41区、42区、43区、44区とした〔第I-2図〕。9月3日から表土を掘削し、その後、第2a層、第3-1-1a層、第3-1-2a層、第3-2a層、第4a層、第5a'層の下面〔第IV-2図〕で遺構検出等を行い、記録を作成して、12月21日に4区の調査を終了した。

この間、11月3日に現地説明会を開催した。地元の方々を中心に、100名程の見学者が遺跡を訪れた。また、調査期間中は、随時、鳥取県教育文化財団調査室のホームページや同美和調査事務所の広報誌に調査成果の発表を行った^{註3}。

なお、現地の調査に併行して、国際文化財の現地事務所で、調査中に取得した記録類の整理と、現地で作成した図面類の編集を行い、3月25日に調査支援業務を終えた。また、3月末まで県教育文化財団調査室美和調査事務所で出土遺物の整理作業等を行った。

註

- 1 鳥取市教育委員会（加川崇、前田均、谷口恭子）編 2010『平成21（2009）年度 鳥取市内遺跡発掘調査報告書』
- 2 鳥取県埋蔵文化財センター（北浩明、岩垣命）編 2011『本高弓ノ木遺跡（1～3区）』鳥取県埋蔵文化財文化財報告書38
- 3 鳥取県教育文化財団調査ホームページ <http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu%20new.htm>
『発掘通信 鳥取西道路を掘る』

第 3 節 調査体制

平成 21 年度

鳥取県教育委員会

教育長 中永廣樹

鳥取県教育委員会事務局 文化財課

課長 植田司郎

課長補佐 植木敏郎 副主幹 寺垣仁志

歴史遺産室長 中原 斉

文化財係長 北浦弘人 文化財主事 高尾浩司

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田博充

事務局 事務局長 中村金一 事務職員 岡田美津子

調査室 室長 松井 潔（県教委から派遣）

次長 石本富正 事務職員 福田早由里

美和調査事務所 所長 松井 潔（室長兼務）

調査第 1 担当 副主幹 濱田竜彦（県教委から派遣）

文化財主事 岸本浩忠 下江健太（県教委から派遣）

中尾智行（財団法人大阪府文化財センターから派遣）

発掘調査支援業者 国際文化財株式会社西日本支店

現場管理人 竹内眞哉 飯田英樹

支援調査員 青島邦夫 石松直 大山祐喜 片山博道 栗木寧 鈴木恵介 日柴喜勝重

調査補助員 岡田竜彦 沖野実 長内礼二 鈴木健一 中井裕章 中野一徹 樋田泰之

宮崎育慈 亀井好美

平成 22 年度

鳥取県教育委員会

教育長 横濱 純一

鳥取県教育委員会事務局 文化財課

課長 植田司郎

課長補佐 田貝 隆 副主幹 福市 信

歴史遺産室長 中原 斉 文化財主事 大野哲二

文化財係長 北浦弘人

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上善弘

事務局 事務局長 漆原貞夫 事務職員 岡田美津子

調査室 室長 松井 潔（県教委から派遣）

次長 石本富正 事務職員 福田早由里

美和調査事務所 所長 松井 潔（室長兼務）

調査第 1 担当 副主幹 濱田竜彦（県教委から派遣）

文化財主事 下江健太 山梨千晶（県教委から派遣）

中尾智行（財団法人大阪府文化財センターから派遣）

発掘調査支援業者 国際文化財株式会社西日本支店

第 I 章 発掘調査の経緯

現場代理人 飯田秀樹
支援調査員 安村健 脇本博康 野上伸
調査補助員 櫻井毅 鳥越巨道

平成 23 年度

鳥取県教育委員会

教育長 横濱 純一

鳥取県教育委員会事務局 文化財課 課長 上山憲二
課長補佐 田貝 隆 副主幹 福市 信
歴史遺産室長 中原 斉 文化財主事 大野哲二
文化財係長 北浦弘人

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上善弘

事務局 事務局長 漆原貞夫 事務職員 岡田美津子
調査室 室長 松井 潔 (県教委から派遣)
次長 石本富正 事務職員 福田早由里
美和調査事務所 所長 松井 潔 (室長兼務) 事務職員 植木智子
調査第 1 担当 副主幹 濱田竜彦 (県教委から派遣)
文化財主事 下江健太 山梨千晶 (県教委から派遣)
中尾智行 (財団法人大阪府文化財センターから派遣)

発掘調査支援業者 国際文化財株式会社西日本支店

現場代理人 飯田秀樹
支援調査員 安村健 脇本博康
調査補助員 沖野実 西野順二 山本哲也 櫻井毅

平成 24 年度

鳥取県教育委員会

教育長 横濱 純一

鳥取県教育委員会事務局 文化財課 課長 上山憲二
課長補佐 土山和俊 係長 福市 信
歴史遺産室長 北浦弘人 文化財主事兼係長 大野哲二

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上善弘

事務局 事務局長 漆原貞夫 (2012 年 12 月まで)
石本富正 (2012 年 1 月から) 事務職員 岡田美津子
調査室 室長 松井 潔 (県教委から派遣)
次長 石本富正 (2012 年 5 月まで)
中川眞一 (2012 年 6 月から) 事務職員 福田早由里
美和調査事務所 所長 松井 潔 (室長兼務) 事務職員 植木智子
副主幹 濱田竜彦 (県教委から派遣)

調査第 2 担当 文化財主事 下江健太 奥原このみ（県教委から派遣）

調査協力

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所

鳥取市教育委員会、公益財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター、鳥取県埋蔵文化財センター

第Ⅱ章 本高弓ノ木遺跡の位置と環境

第1節 本高弓ノ木遺跡の位置と地理的環境

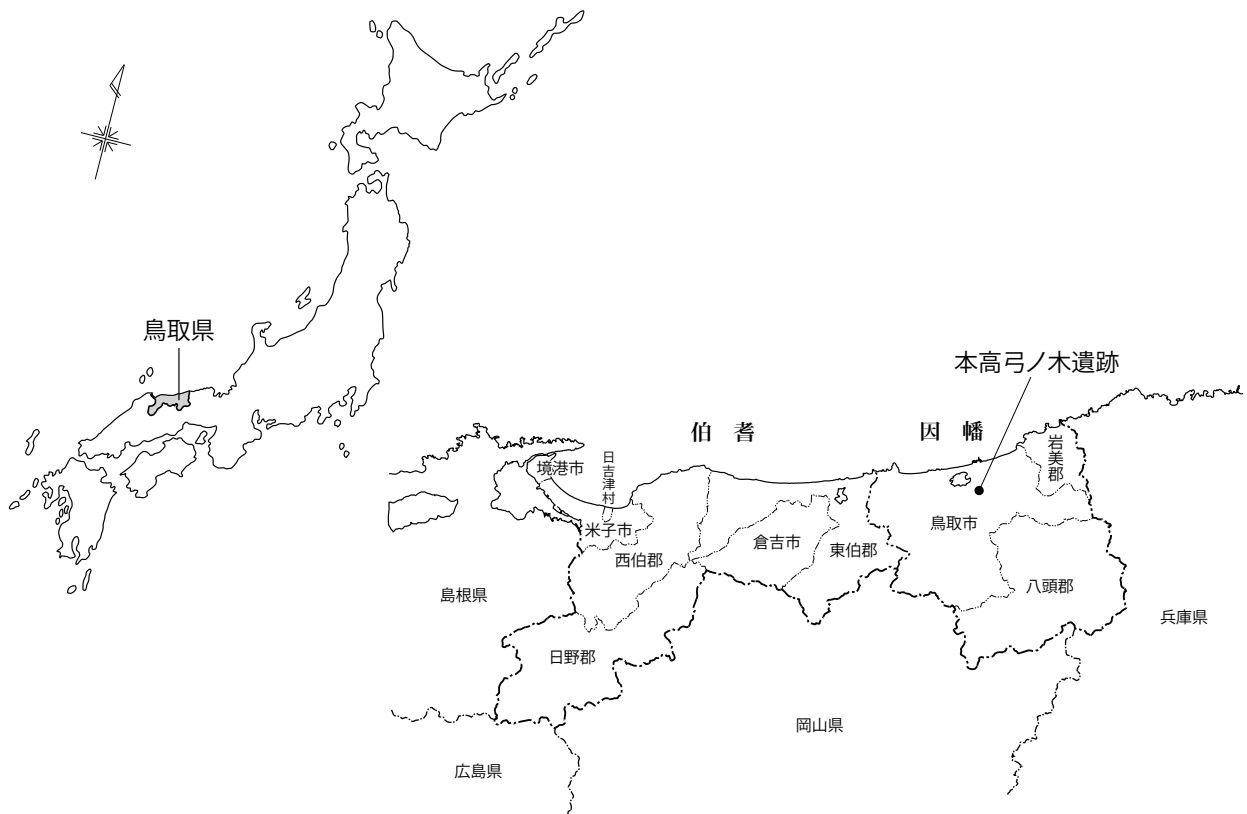
第1項 遺跡の位置

所在地 鳥取県鳥取市本高字弓ノ木、飛井田ノ一、毛勝に所在する。釣山と呼ばれる独立丘陵の縁辺にあり、調査地はもともと畑地や水田に利用されていた。遺跡の北側には、平成21年度に県教育文化財団に調査を委託した本高下ノ谷遺跡、本高古墳群がある〔第Ⅱ-2図〕。鳥取市遺跡分布地図（鳥取県教育委員会作成）に登録されている遺跡番号は3-0388である。

鳥取県 中国地方の北東部にあり、日本海に面し、東西に細長い形状をしている。東西約120km、南北約20～50km、面積3,507平方km、4市14町1村の自治体がある。人口は約59万人、県庁所在地は鳥取市である。近世までは、県東部が因幡国、中西部が伯耆国と呼ばれていた〔第Ⅱ-1図〕。

鳥取市 人口約20万人の地方都市である。平成16（2004）年11月に、鳥取市と、国府町、福部村、河原町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町が合併して新たな市となり、平成17（2005）年に特例市へ移行した。市域は765.66平方km、南側に岡山県、東側に兵庫県との県境がある〔第Ⅱ-1図〕。古代には国府町に因幡国庁が置かれ、近世には因伯二国を統治した鳥取池田家による藩政の中心地として栄えた。

本高 鳥取市内を北流する千代川の左岸にあり、その支流の有富川流域に所在している。古くは、



第Ⅱ-1図 鳥取県と遺跡の所在地

因幡国高草郡に含まれる。千代川支流の野坂川と有富川の間に介在している山地の南東側山裾部に集落が細長く展開しており、その西方に広がる有富川の左岸が水田地帯となっている。当地は鳥取市域から鹿野方面に至る交通の要地であり、近世には鳥取と鹿野を結ぶ鹿野街道が通過していた。

第2項 本高弓ノ木遺跡周辺の地形・地質

千代川と鳥取平野 鳥取県は中国地方の脊梁山地から日本海にいたる北側斜面にあり、県東部には開析の進んだ海拔1,200 m以下の山地が発達している。千代川は鳥取県八頭郡智頭町に所在する沖ノ山(1,319.0 m)に源を発する一級河川で、袋川や野坂川等の支流と合流しながら日本海に注ぐ。下流域には第四紀沖積世に浸食谷が埋め立てられて鳥取平野が形成されている。

千代川の東岸には急峻な山並みが連なり、扇ノ山から国府町の山地を経て久松山、摩尼山等の低い山並みが海岸付近にまで続く。一方、西岸には、野坂川や有富川の流域に、標高400 m付近を境に緩やかな傾斜を描く準平原状の山地が広がり、両河川の浸食により、谷底平野と同一方向に伸びる細長い丘陵が交互に連続している。また、千代川の河口周辺には鳥取砂丘が発達しており、西岸に形成された砂丘の後背部には湖山池と呼ばれる潟湖が生じている。

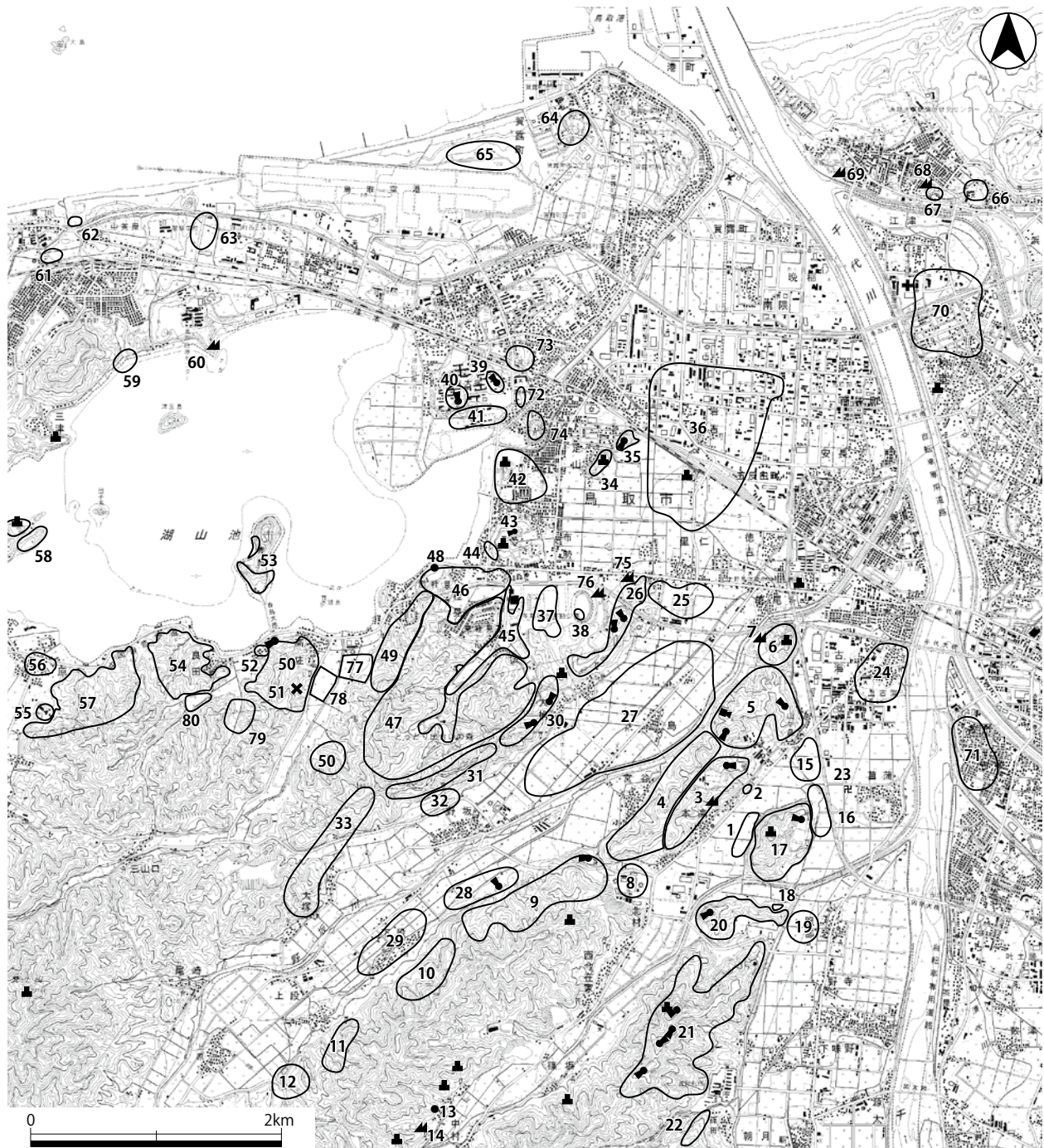
有富川 鳥取市南西部にある岩坪付近の標高500 mほどの山地に源を発し、北東に流下し、本高を経て、菖蒲付近で千代川に合流する。流路延長は約12kmである。明治期までは舟運にも利用されていた。また、昭和時代の初期までは、しばしば洪水を起こしていたが、現在は河川改修により治水が進展している。

本高弓ノ木遺跡 千代川に南西側から合流する有富川北岸の谷底平野に立地しており、千代川河口から直線で約6kmの地点にある〔第Ⅱ-2図1〕。遺跡の西側に平野が広がり、現在は広範囲に水田が営まれている。圃場整備により谷底平野に形成されていた本来の細かな微地形は失われている。遺跡は、開析谷上流域に広がる扇状地性低地の末端または谷底低地部分に位置する。空中から撮影されたカラー写真では地表が暗色のテクスチャーを示しており、相対的に排水不良で、泥質堆積物が堆積している場所にあると推測される。

第2節 有富川周辺の遺跡と歴史的環境〔第Ⅱ-2図〕

旧石器・縄文時代 千代川の西岸地域には、特に湖山池の南東岸に桂見遺跡(46)や布勢第1・2遺跡(37・38)といった山陰地方を代表する低湿地遺跡が周知されている。この一帯における人の営みは、少なくとも縄文時代前期にさかのぼり、その後は縄文時代が終焉に至るまで断続的な活動の痕跡が認められる。一方、本高下ノ谷遺跡(2)周辺では、後期後葉頃にさかのぼる活動の痕跡が見いだされている。本高弓ノ木遺跡の北東500 mほどのところにある山ヶ鼻遺跡(15)では、元住吉山式～滋賀里Ⅲa式に至る土器が出土している。また、本高弓ノ木遺跡には、滋賀里Ⅲa式に後出する篠原式を伴う晩期中葉の遺構がある。有富川の西側に後・晩期の生活痕跡が点在していることがうかがわれる。また、山ヶ鼻遺跡から北東約500 mに所在する古海遺跡(24)からは晩期終末の突帯文土器が出土している。古海遺跡の突帯文土器は、遠賀川式土器を伴わない単純資料で、口縁部に一条の突帯がめぐる砲弾型の深鉢を基本器種とする古海式の標識となっている。

弥生時代 本高弓ノ木遺跡では、古海式の特徴を有す大量の突帯文土器とともに、弥生時代前期の



- | | | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|------------|------------|
| 1 本高弓ノ木遺跡 | 16 菖蒲遺跡 | 31 野坂古墳群 | 43 布勢1号墳 | 58 岩本第1遺跡 | 71 古市遺跡 |
| 2 本高下ノ谷遺跡 | 17 釣山古墳群 | 32 野坂遺跡 | 44 帆城遺跡 | 59 中ノ茶屋古墳群 | 72 湖山第1遺跡 |
| 3 本高古墳群 | 18 本高門ノ前遺跡 | 33 大塚古墳群 | 45 東桂見遺跡 | 60 中ノ茶屋遺跡 | 73 湖山第3遺跡 |
| 4 宮谷古墳群 | 19 服部遺跡 | 34 足山古墳群 | 46 桂見遺跡 | 61 三津所在横穴 | 74 湖山古墳群 |
| 5 古海古墳群 | 20 服部古墳群 | 35 石場山古墳群 | 47 桂見古墳群 | 62 末恒遺跡 | 75 里仁第1横穴 |
| 6 徳尾古墳群 | 21 下味野古墳群 | 36 岩吉遺跡 | 48 西桂見墳丘墓 | 63 溝川遺跡 | 76 里仁第2横穴 |
| 7 松ヶ谷横穴群 | 22 篠田古墳群 | 37 布勢第1遺跡 | 49 倉見古墳群 | 64 長者石遺跡 | 77 高住井手添遺跡 |
| 8 北村恵儀谷遺跡 | 23 菖蒲廢寺 | 38 布勢第2遺跡 | 50 高住古墳群 | 65 賀露第1遺跡 | 78 高住牛輪谷遺跡 |
| 9 小森山古墳群 | 24 古海遺跡 | 39 大熊段古墳群 | 51 高住銅鐸出土地 | 66 賀露第2遺跡 | 79 高住平田遺跡 |
| 10 下段古墳群 | 25 里仁遺跡 | 40 大熊段遺跡 | 52 塞ノ谷遺跡 | 67 浜坂遺跡 | 80 良田中道遺跡 |
| 11 上段古墳群 | 26 里仁古墳群 | 41 三浦古墳群 | 53 青島遺跡 | 68 浜坂1号墳 | |
| 12 上原古墳群 | 27 大橋遺跡 | 42 三浦遺跡 | 54 良田古墳群 | 69 朽木山横穴群 | |
| 13 中村須恵器窯跡群 | 28 小森山遺跡 | 43 湖山第2遺跡 | 55 松原谷遺跡 | 70 荒神山横穴群 | |
| 14 中村横穴群 | 29 下段遺跡 | 44 天神山遺跡 | 56 松原所在遺跡 | | |
| 15 山ヶ鼻遺跡 | 30 梅間古墳群 | 45 天神山城 | 57 松原古墳群 | | |

第II-2図 本高弓ノ木遺跡周辺の遺跡

中でも古相の特徴をもった遠賀川式土器や、木製の農具類が出土している。有富川の西岸では、鳥取平野でも比較的早い時期に水稲耕作が開始されていると考えられる。山ヶ鼻遺跡では中期から後期に至る土器を伴う水路跡などが検出されており、弥生時代を通じて、この一帯では沖積地の利用が継続している。後期になると、墳丘墓の築造に表象される有力者の台頭が認められる。本高から北東に約3 km離れた湖山池南東岸の丘陵地帯では山陰地方を代表する規模の大型墳丘墓が造営されている。本高に近い場所では、後に本高古墳群（3）や古海古墳群（5）が造営される丘陵の先端にある徳尾古墳群（6）で、1辺が10 mほどの方形墳丘墓が発見されている。

古墳時代 有富川周辺の丘陵には各所に古墳が分布している。このうち、本高弓ノ木遺跡と深い関係にあるとみられるのが、本高下ノ谷遺跡の背後に所在する本高古墳群である。本高古墳群は本高弓ノ木遺跡を見下ろす環境にあり、平成21年度の発掘調査によって、調査前には直径20 m級の円墳と考えられていた本高14号墳が、全長63.7 mをはかる前方後円墳であることが確認された。副次的な埋葬施設には4世紀中葉のものとみられる土器が副葬されており、山陰地方に築造された最初期の前方後円墳と考えられている。

一方、本高古墳群の直下に位置する本高下ノ谷遺跡では、同じく古墳時代前期当該期の土器や木製品が出土している。また、鳥取県埋蔵文化財センターが実施した本高弓ノ木遺跡3区の調査では、前期から中期に営まれていた水田関連施設が報告されているし、5区の調査では、本高14号墳と同時期に建設され、機能していた大規模な水利施設も見つかった。この施設は、この一帯を利用するための幹線水路だった可能性が高く、本高一帯を勢力下においたとみられる本高14号墳の造営主体との関わりがうかがわれる。

その後、本高古墳群では中期中葉にいたるまで古墳が築造されている。同一丘陵上では、古海古墳群においても有富川流域を見通す立地に古墳が造営される。しかし、本高14号墳に匹敵する規模の大型古墳の存在ははっきりとしない。一方、野坂川の流域には大型の前方後円墳などが散見されることから、中期以降、千代川左岸地域で首長権力に移動があったのかもしれない。なお、後期には全長約26mの前方後円墳である釣山2号墳、終末期には、切石でつくられた石棺式石室をもつ山ヶ鼻古墳（古海13号墳）が発見されている。

古代以降 古代では、菖蒲に白鳳時代創建とみられる菖蒲廃寺跡（23）が周知されている。また、菖蒲遺跡（16）では、奈良時代の建物跡などがみつまっている。この地域は高草郡に属し、高庭庄として東大寺による荘園開発が行われていたことが、『東大寺東南院文書』の「東大寺因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」にみえる。本高の付近には古代山陰道の存在が推定されており、古代において、この一帯は、千代川左岸の中でも最重要地域の一つであった可能性が高い。菖蒲遺跡や山ヶ鼻遺跡では、鎌倉時代の遺構や遺物も確認されており、この一帯で水田を耕し、村落を営む人々が引き続き存在していたことがうかがわれる。

主要参考文献

- 財団法人鳥取県教育文化財団（中原斉）編 1985『里仁古墳群〈32・33・34・35号墳の調査〉』
- 財団法人鳥取市教育福祉振興会（西浦日出夫、小谷修一）編 1993『古海古墳群 菖蒲遺跡』
- 財団法人鳥取市教育福祉振興会（谷口恭子、藤本隆之・神谷伊鈴）編 1996『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』
- 財団法人鳥取市文化財団（藤本隆之）編 2006『野坂遺跡』

財団法人鳥取市文化財団（谷口恭子）編 2009『徳尾墳墓群』

鳥取県企画室 1966『鳥取県地質図説明書』

鳥取県教育委員会（亀井熙人、田中弘道、久保穰二郎）編 1985『徳尾遺跡群発掘調査報告書』

鳥取県教育委員会（大川泰広、岡戸哲紀ほか）編 2010『本高古墳群』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財報告書Ⅳ

鳥取県教育委員会（北浩明、岩垣命）編 2011『本高弓ノ木遺跡（1～3区）』

鳥取県教育委員会（濱田竜彦ほか）編 2013『本高下ノ谷遺跡』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財報告書Ⅶ

鳥取県教育委員会（濱田竜彦、中尾智行、下江健太、奥原このみ、高尾浩司、山梨千晶ほか）編 2013『本高弓ノ木遺跡（5区）Ⅰ』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財報告書Ⅷ

鳥取県埋蔵文化財センター編 1986『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財シリーズ1

鳥取市教育委員会編 2011『平成22（2010）年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

鳥取市教育委員会（杉谷愛象）編 1978『大柵遺跡Ⅰ』

野田久男・清水真一 1983『日本の古代遺跡9 鳥取』、保育社

第Ⅲ章 発掘調査の方法

第1節 試掘調査の成果と本調査の方針

第1項 試掘調査成果の概要

本高弓ノ木遺跡4区と5区の発掘調査に係る当初設計は、鳥取市教育委員会によって平成20(2009)年度に実施された試掘調査の成果に基づく。試掘調査の際には、4区に7カ所(Tr-1～7)、5区に2カ所(TR-8・9)のトレンチが設けられ、包含層および遺構面の有無が確認された。

4区の各トレンチでは中世、古墳時代、弥生時代の遺物を包含する堆積が確認され、Tr-1～5・7では溝などの遺構が検出されている。また、最も5区に近い場所に位置するTr-6では、標高7.1m付近に堆積した粘土層から弥生時代開始期の土器が多数出土しており、この付近に当該期の遺物包含層の広がりが見込まれた。一方、5区の各トレンチでも中世や古墳時代の遺物を包含する堆積が確認されている。Tr-9からは、古墳時代前期の土師器や弥生時代後期の土器が多量に出土しており、当該期の遺構が調査区内に存在する可能性がうかがわれた。また、Tr-8では溝や土坑が検出されている。こうした成果をもとに、4区と5区については、包含層1層と遺構面1面(部分的に2面)の調査が必要であるという判断がなされた。

また、本調査の対象とならなかった5区の南側にも3カ所にトレンチ(Tr-10・11・12)が設けられていた。各トレンチからは、古代や古墳時代の遺物が出土していたが、遺物量が少ないこと、遺構が確認できなかったことから、この近辺に遺跡が広がる可能性は低く、調査の必要性がないという判断が下された。

第2項 本調査の方針

試掘調査の成果および立地から、本高弓ノ木遺跡の性格は、大部分が水田や畠などの生産に関連するものと想定された。また、5区の南側には弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた居住域の一部が含まれている可能性が考えられた。

一方、遺跡の立地を勘案すると、試掘調査のさいに基盤層と判断された堆積が、基盤層ではない可能性があると思われた。そこで、5区の表土を掘削するさい、機械を使用して、一部を深く掘り下げ、下層の確認を行ったところ、基盤層と判断されていた堆積層の下にも炭化物や植物遺体を含む堆積層があることが明らかになった。第1章にも記述したが、こうした状況をふまえ、人力掘削を始める際に、調査区に設定したグリッドライン沿いにサブトレンチを設け、遺跡内の堆積を再観察し、調査方針を検討することにした。

その結果、当初設計において、遺物包含層と評価されていた堆積層は、水田の耕作土層であり、その下面にも遺構が存在していることを確認した。また、さらに、その下層にも人為的に攪拌された可能性が高い堆積を確認できる場所もあり、下層も発掘調査の対象となる可能性が高まった。そこで、当初設計において調査の対象とされていた堆積と遺構面の調査を進める過程で、さらに下層の状況を詳細に把握しながら、県教委と県教育文化財団の間で調査にかかる設計の見直しすることとなった。

したがって、調査開始前に、明確な調査目標を設定し、その目標を達成するための調査方針を決定することはできなかったが、この調査では、環境の変化と人との関わりに着目し、遺跡の成り立ちを体系的に捉えることに力点をおきながら、調査を進めることとした。

第2節 調査地の地区割りとグリッド名

第1項 調査地の地区割り〔第Ⅲ-1・2図〕

県教育文化財団に再委託された鳥取西道路関連の発掘調査では、遺跡や遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用するグリッドに、平面直角座標系の第Ⅴ系（世界測地系）を使用している。さらに、県内を対象に発掘調査の地区割りを標準化する試みとして〔第Ⅲ-1図〕、県域に「第Ⅰ区画」「第Ⅱ区画」「第Ⅲ区画」「第Ⅳ区画」を設定し、調査地にグリッドを割り付けを行った〔第Ⅲ-2図〕。

第Ⅰ区画

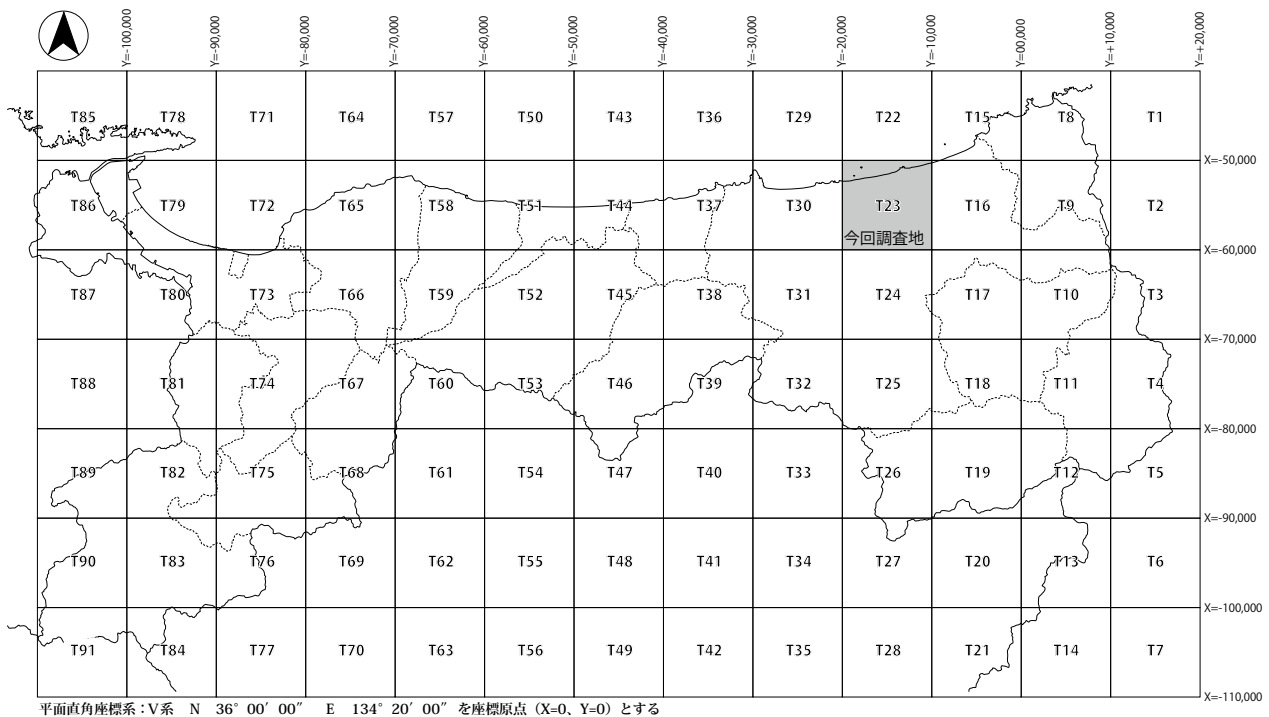
鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000 m × 10,000 mで、1～91の区画を設け、北東隅からT1～T91の記号を付した。

第Ⅱ区画

91分割した第Ⅰ区画の1区画内を100等分した区画である。1,000 m × 1,000 mを第Ⅱ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。

第Ⅲ区画

第Ⅱ区画を100等分した区画である。100 m × 100 mを第Ⅲ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、各区画を1A～10Jと呼称した。

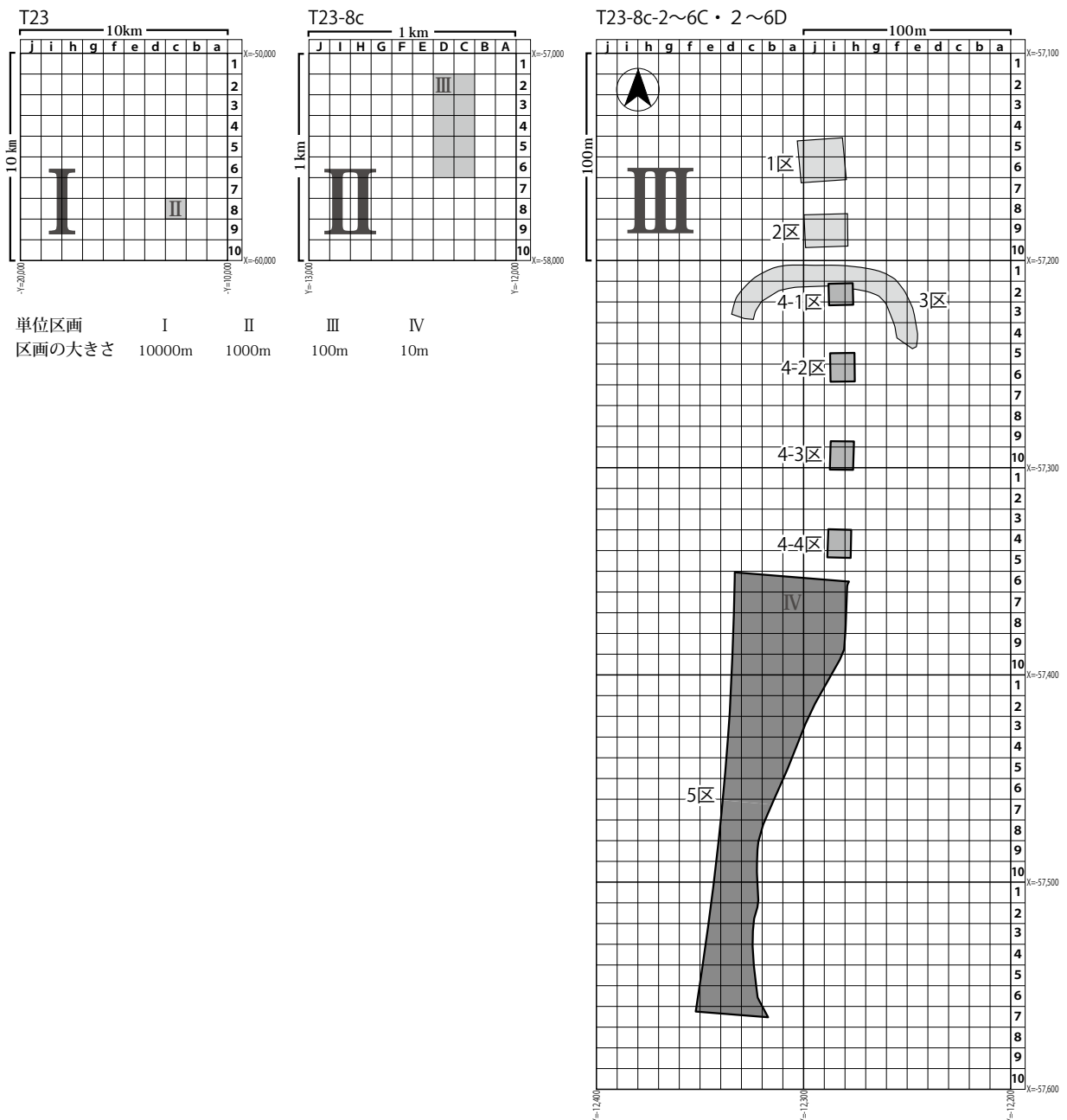


第Ⅲ-1図 地区割り模式図（鳥取県）

第Ⅳ区画

第Ⅲ区画を100等分した区画である。10 m×10 mを第Ⅳ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1 a～10jと呼称した。この10 m×10 mの区画が遺構の位置表示や遺物取り上げ時に使用する基本グリッドとなる。

ところで、第Ⅴ系を用いた地区割りには多くの発掘調査で一般的に行われており、特別な方法ではない。しかし、調査年次、遺跡名称、調査組織、場合によっては調査担当者が異なると、地形や内容が連続する1つの遺跡、または連続する調査区であっても、調査のたびにグリッドの名称が任意に設けられていることがある。その場合、一連の遺跡なのにグリッド名が連続しなかったり、同一名称のグリッドが重複することもある。このようなグリッドの設定は、遺跡の記録を作成し、それを評価するうえで望ましいこととはいえない。



第Ⅲ-2 図 調査地の地区割り (第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区画)

県内全域の発掘調査に共通使用できる地区割りの使用は、こうした問題を解消するための方法の1つである。共通の基準で設定されたグリッドは、複数の遺跡を包括した遺跡群の評価、さらには記録保存された埋蔵文化財情報の整理、活用にも有意であろう。

第2項 調査区とグリッド名〔第Ⅲ-2図〕

本高弓ノ木遺跡4区と5区は、いずれも第Ⅰ区画「T23」〔第Ⅲ-1図〕、第Ⅱ区画「8c」内〔第Ⅲ-2図〕に所在している。しかし、第Ⅲ区画は複数の区画にまたがり、4-1区と4-2区が「3C」、4-3区が「3C・4C」、4-4区が「4C」、5区が「4C・5C」「4D・5D・6D」となる。そして、第Ⅲ区画内を10m四方に分割した第Ⅳ区画が、包含層の掘削や、包含層出土遺物を取り上げるさいの作業の基礎単位となる。

なお、グリッド名は、第Ⅰ～Ⅳ区画までの名称を「-」でつなぎ、「T23-8c-第Ⅲ区画-第Ⅳ区画」と表現する。ただし、本高弓ノ木遺跡の4-1～4区、5区は全てが「T23-8c」内にあるので、本文中では、第Ⅰ・Ⅱ区画を表す「T23-8c」を省略し、第Ⅲ区画と第Ⅳ区画のみをグリッド名として記す。

第3節 調査と記録の対象

第1項 記録の対象

本調査では主に古代以前の堆積や遺構面を調査の対象とし、中世以降の堆積や遺構については、必要に応じて記録を作成することにした。その理由は、調査地が中世以降は水田や畠として利用されており、耕作による連続的な攪乱により、各時代の遺構が遺存状況が悪く、平面的には遺構の検出、記録が困難なことによる。したがって、中世以降の耕作土については、人力による掘削のさいに遺物の取り上げのみを行い、主要な遺構については、下にある古代の遺構面において記録を行った。

第2項 遺構名と番号

調査中に検出された遺構に通し番号を付し、機能が特定（または推測）できる遺構には、番号の後に遺構の性格や機能を表す名称を記した（例えば、1土坑、2柱穴など）。また、竪穴住居や掘立柱建物のように複数の遺構（例えば、数基の柱穴など）によって構成されるものを本調査では集合遺構と認定し、それぞれの性格や機能等を表す呼称と番号を与えることにした（竪穴住居1、掘立柱建物2など）。

第3項 遺物の取り上げと遺物カードの記載

遺物の取り上げには、鳥取県教育文化財団調査室が用意した遺物カードを使用した。取上番号は通し番号とし、遺物カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。遺物カードの記載項目・内容は以下のとおりである。

遺跡名 「本高弓ノ木遺跡09」「本高弓ノ木遺跡10」と記載。「09」「10」はそれぞれ2009年度、2010年度に調査を実施したことを示す。

地区名 遺物の取り上げは、10m×10mのグリッドを基本とし、第Ⅰ～Ⅳ区画で構成されるグリッド名を記載した（第Ⅲ章第2節参照）。

- 層位名** 遺物が帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。
- 遺構名** 遺物が帰属する遺構の名称を記載した。
- 取上 No** 取り上げ順に通し番号を記載した。
- 出土年月日** 検出日ではなく、取り上げ日を記載した。
- 図面** 遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。
- 備考** 特記事項を記載した。
- 時代・時期** 取り上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。
- 種別** 土器や鉄器など素材によって大別される遺物の種別を記載。
- その他** 上記の記載項目とは別に、取上時に座標値が記録されたものについては、遺物カードのメモ欄に座標値を記載した。

第4節 調査と記録作成の方法

第1項 掘削

掘削はスコップや移植ゴテを用いた人力掘削を原則とした。ただし、表土や近現代の耕作土に限って、バックホウによる掘削を行い、人力による掘削は、近世以前の耕作土や氾濫堆積物などを対象とし、層界に留意しながら、層位的な発掘をこころがけた。そのため、調査の過程では土層観察用の断面をグリッドラインに沿って残し、必要に応じて調査区を横断するサブトレンチを設け、土層の観察を行いながら、一度に掘削する土層の単位や深度を検討し、平面的な調査の対象となる遺構面を確認していった。

第2項 土層区分と土層名

本調査では、主にグリッドラインに沿って土層観察用畦を設け、サブトレンチを掘削しながら土層の断面観察を行い、上層から順番にアラビア数字を付すことにした。そのさい、一連の土層に含まれる遺物の時期差や、堆積環境の変化に着目しながら、調査区内の堆積を大別し、アラビア数字を付すことをこころがけた。

さらに分層時に、人為による攪乱の有無に注意を払うこととした。そして、耕作土や造成土など人為的な攪乱の痕跡が明瞭に観察できる土層を「a層」、河川の氾濫などに起因する自然堆積層を「b層」、過去の地表面に形成された古土壌層で、人為による攪乱が明瞭に観察されないものを「a'層」とした（a'層には、a層とb層の区別が肉眼では判別できなかったものを含む）。そして、アラビア数字と、「a」「b」「a'」の組み合わせを、土層名とした。

なお、a層の直下にあるb層またはa'層、a'層の直下にあるb層は、下層が上層の母材となっている場合がある。こうした理解が可能な堆積については、アラビア数字を分けず、同一のアラビア数字にa、b、a'を組み合わせている。

土層断面図などの記載には、土層名の後に、色調と層相を記し、混入物などについては土層名の後に加えた括弧に内容を記した。また、調査地が広範囲におよぶことから、分層時には可能な限り複数の監理者で検討を行い、情報の共有をはかるとともに、a、b、a'層の区別に齟齬が生じないように

注意を払った。ただし、括弧書きした混入物などの記載については、観察視点の共有するように心がけたが、記載内容について細部の統一をはかっていない。

第3項 遺構面

遺構の検出は層界で行った。本高弓ノ木遺跡では、自然堆積層、すなわちb層の直下で確認できる遺構面は調査区全体に確認できなかった。したがって、本調査で記録の対象とした遺構面は、原則、人為などによって攪乱された土壌層、a層の除去面である。そこで、本調査では、各遺構面を、「第○a層下面」と呼称することにした。

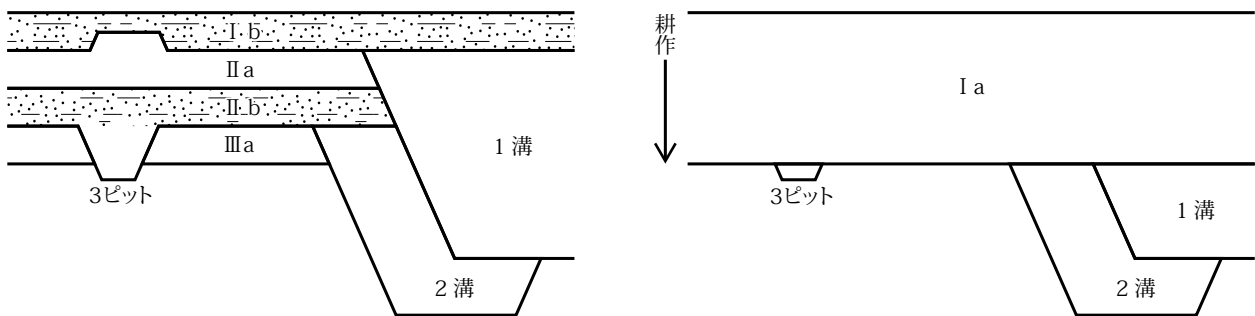
なお、本調査でa層とした土層の多くは、耕作などの行為により、ある時期の地表面から一定の深度が攪乱されることで形成されたものである。そのため、b層の下面が、ある一時期の地表面を覆っているのに対し、a層下面は、ある一時期の地表面ではない。したがって、a層形成時に累積する複数の旧地表面に攪乱がおよんでいれば、a層下面で検出した遺構面には、土器数型式分の時期幅をもつ遺構が混在する可能性がある〔第Ⅲ-3図右〕。

第4項 図面による記録

本調査では、現地で作成した「素図」の情報を、遺構面、遺構単位に整理、統合して「編集図」を作成した。なお、素図とは、測量、作図の方法を問わず、発掘調査に伴い遺跡で作成した遺構、土層断面、遺物を記録した図面類である。素図のうち、平面図はトータルステーションによる電子測量を基本としたが、土層断面図の作成には、手測りと写真測量も併用した。一方、編集図とは、調査中に作成された素図の中で関連をもつ情報を整理し、デジタルデータに統合、編集したものである。編集図の作成には adobe イラストレーター CS4 を使用した。

第5項 写真による記録

使用機材・媒体 写真の撮影は主に中型（6×7判）一眼レフカメラで行い、小型（35mm判）一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ APS-C 以上、有効画素数 1220 万画素以上）を併用し、中判と小型一眼レフカメラには、6×7リバーサルフィルム（富士フィルム社 プロビア 100F）、同黒白フィルム（富士フィルム社 ネオパン 100ACROS）、35mm リバーサルフィルム（富士フィルム社 プロビア 100F）、同黒白フィルム（富士フィルム社 ネオパン 100ACROS）の使用を基本とした。また、デジタル一眼レフカメラによる撮影は RAW・JPEG 形式で画像データを取得し、保存した。



第Ⅲ-3図 a層下面検出遺構面の概念図

なお、記録対象の内容によっては、中型一眼レフカメラでの撮影を省略したことがある。なお、メモ的な写真の撮影は全てデジタル一眼レフカメラによる。必要に応じて、大型一眼レフカメラによる撮影も行った。

写真の管理 撮影した写真は、原則として、撮影日順に番号を付して、写真台帳に登録した。撮影した内容(タイトル)はデジタル一眼レフカメラに写し込み、中型と小型一眼レフカメラによって撮影したフィルムの検索性資料とした。写真台帳は、全ての写真を網羅するデジタル画像を基に作成し、中型と小型一眼レフカメラで撮影したフィルムを整理、管理できるようにした。

写真撮影 調査中、土層、遺構内の堆積、遺構の検出と完掘状況、遺物の出土状況等を記録するために写真撮影を行った。写真撮影は、撮影対象、範囲、アングル、使用機材等に関する発掘調査管理者の指示をもとに支援調査員が行った。

第5節 出土遺物の整理

土器 調査終了後に洗浄、接合、復原、実測を行った。器種、形状が判明ないし復元できる個体を実測の対象とした。

木製品 調査終了後に洗浄、注記、接合、復原、実測を行った。器種や用途、または、特徴的な加工が施されているものを実測の対象とした。また、素材の樹種同定を目的としたサンプリングを行い、鳥取大学地域学部の中原計准教授に樹種同定を依頼した。

写真撮影 土器や木製品を対象に、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ フルサイズ）で撮影を行った。

保管 図面、写真の記録類、出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行った。

第IV章 調査成果

第1節 調査区と基本土層

(1) 調査区の位置と地形

本高弓ノ木遺跡4・5区は、標高点104mの独立丘陵・釣山の西側にあり、5区は調査区東側が山裾と接している〔第I-2図〕。4区は5区の北側にあり、橋脚が建設される4箇所について、北から4-1区、4-2区、4-3区、4-4区とした〔第IV-1図〕。

4区の標高は、北端に設けられた4-1区北端で標高8.12m、南端に設けられた4-4区南端で8.35mである。見かけ上は平坦だが、北から南側にかけて少しずつ地形が高くなる。5区の発掘調査では、縄文時代晩期以前に西側から釣山の裾に向かって流入する谷地形（710溝ほか）がみついている。4区は概ね、その延長線上にあり、現在の地表面にも微妙な高低差として古い地形が認識できるものとする。

(2) 調査区の形と地区割り

4-1～4-4区はいずれも方形をした調査区で、 $Y=-12,280$ ライン上にならび、4-1区の北端が $X=-57,211$ 付近、4-4区の南端が $X=-57,343$ 付近となる。調査地の地区割りは、平面直角座標系の第V系（世界測地系）により（第III章第2節参照）、第IV区画となる10m四方の最小区画に基づき調査記録などを作成した〔第IV-1図〕。

なお、第IV区画に分割されたグリッド名は、第I～IV区画の各名称の組み合わせによるが、本報告書では、全てのグリッドに共通する第I区画T23と第II区画8cを省略し、第III区画と第IV区画のみをグリッド名として記述する。

(3) 内容確認調査を行った位置

平成21年度に内容確認を目的とする調査を行うため、3C-6j区と、3C-10h区にトレンチを設定した〔第IV-1図〕。3C-6j区に設定したトレンチ（T01）は4-2区の西側にあり、規模は南北11m、東西6m。3C-10h区に設定したトレンチ（T02）は西半分が4-3区にかかる。規模は南北3.5m、東西10mである。3C-6j区のトレンチを標高-1.7m、3C-10h区のトレンチを標高-1.3mまで掘削し、下層における遺構および遺物の確認を行った。

その結果、土器片や木製品片などが数点出土し、弥生時代以降のものとみられる溝（もしくは流路）などを確認した。また、両トレンチともに堆積状況の記録などを作成した。しかし、平成22年度に実施した4-2区、4-3区の調査時に、堆積状況の評価については見直しを行った。そこで、平成21年度に実施したT01、T02内の堆積などについては、4-2区、4-3区の調査成果に含めて報告を行う。

(4) 基本層序と遺構面

各調査区における土層断面の記録は、調査区北側もしくは南側に設定した東西方向の断面において



第IV -1 図 4区 調査区およびグリッド配置図 (赤線は当初設計の調査範囲)

行った。また、調査完了後には埋め戻しを行う前に、下層を確認するため、重機による掘削を行い、下層の堆積状況を観察、記録した〔図版1-3〕。確認できた最下部の標高は7.3～6.5mである。各調査区の堆積は、第IV-2図に4区の基本層序模式図、第IV-3～6図に各区の土層断面図を示した。

各層の主な特徴は、以下の通りである。

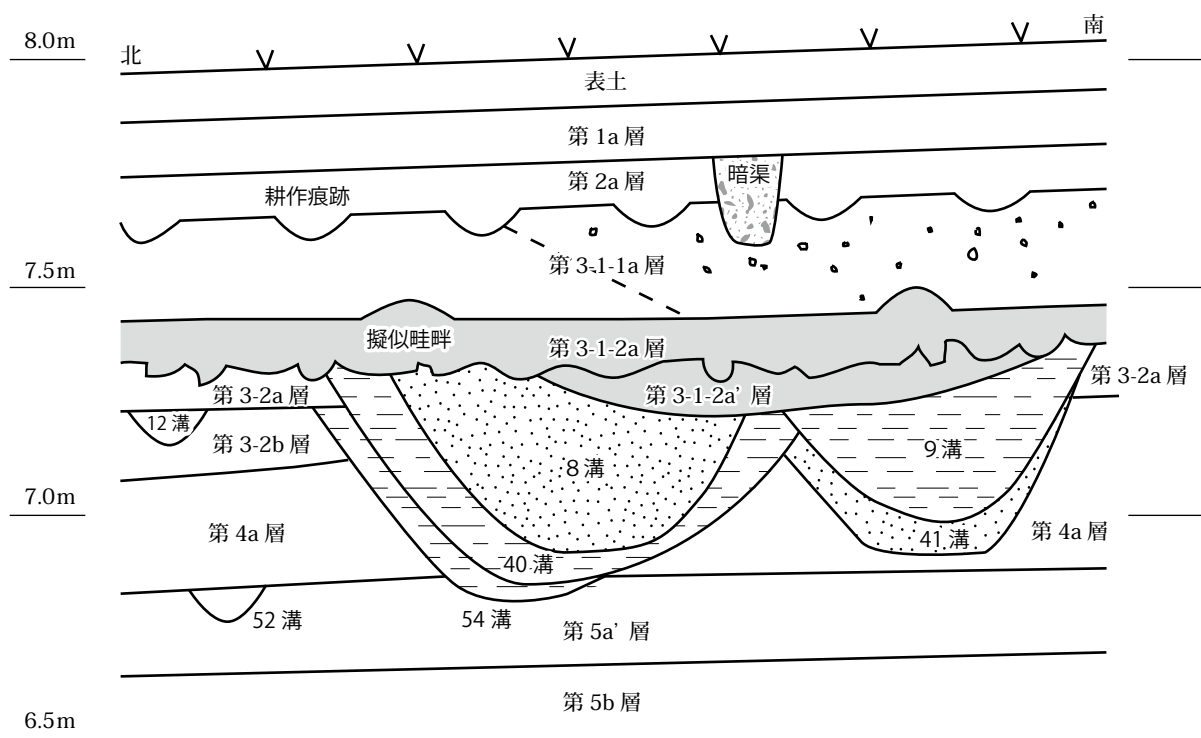
第1a層 粗砂～粘土を含む灰白色土層で、耕作土と考えられる。近世～近代の遺物を含む。

第2a層 粗砂～粘土を含む灰白色土層で、耕作土と考えられる。奈良時代から室町時代の遺物を含む。

第3-1-1a層 調査区の南北で層相が大きく異なる。4-1区、4-2区では、シルトを主体とした粘質の強い灰白色土層であった〔第IV-3・4図〕。直下層の第3-1-2a層と比べるとやや粗粒になる。第IV-6図5層（第3-1-1b層）のような、小規模な氾濫堆積物の供給後に形成された耕作土と考えられる。一方で、4-3区、4-4区および3C-10hトレンチでは、第3-1-1a層中に直径3cm程度までの凝灰岩礫が含まれていた〔第IV-5・6図〕。凝灰岩は、調査区の東に接する釣山に多く露頭しており、第3-1-1a層の形成過程で、山肌が浸食・流出するなどして供給された礫が同層中に混和されたものとする。また、4-4区の西側では明瞭ではないものの、礫の多寡を基準に同層を上下に分層できる〔第IV-6図3・4層〕。

第3-1-1b層 4-4区で部分的に確認される。他の区では確認できない。灰白色の粗砂で、ラミナは確認できないものの淘汰はよい。小規模な氾濫堆積物と考えられる。

第3-1-2a層 淘汰はそれほど悪くないが、ラミナは認められない。下層に由来する土をブロック状に含み、本層除去面で列状に並ぶ牛の蹄跡が検出されることから耕作による攪拌層と考えられるが、有機質に富み暗色を呈する。ブロック土の破砕が進んでいないことや有機物の包含からは、比較的短期間の耕作利用により形成された土層の可能性が高いものと考えられる。

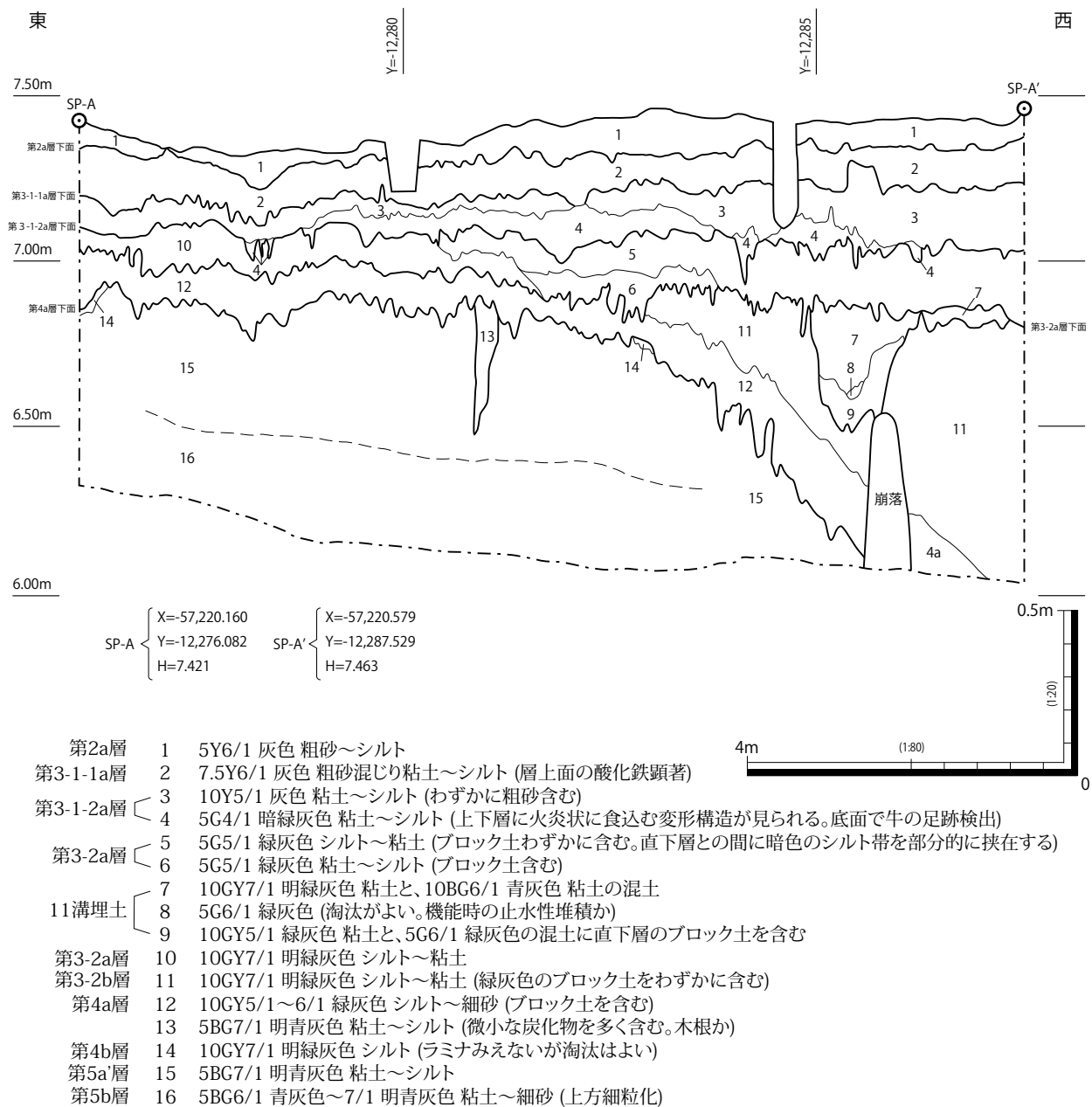


第IV-2図 4区基本層序模式図

第3-1-2a'層 直上の第3-1-2a層よりさらに暗灰色を呈する淘汰のよいシルト層で、部分的に炭化物や木質有機物を層状に含む。本層と、本層を母材に形成された第3-1-2a層は、5区を含めた遺跡内に広く確認されている。有機物を多く含むことから、地下水位の変動や、周辺の開発放棄など、広域的な環境変化を要因とした湿地化により形成された泥質の堆積層と、それを母材にした古土壌と考えられよう。4-4区8溝、9溝、4-3区34溝など、大規模な遺構が廃絶し、第3-2a層によって埋没した後に形成されており、周辺の土地利用のあり方も含めた環境の変化がうかがわれる。

直上の第3-1-2a層との区別は難しいが、本層と第3-1-2a層は、他の土層と比較して暗色を呈するため、本高弓ノ木遺跡の堆積層序の中では相対的に認識しやすく、後世の攪拌などによって各調査区で層厚が異なるが、調査時には鍵層（基準層）とした〔第IV-3図、図版1-1、第IV-5図、図版1-2〕。

第3-2a層 明緑灰色～灰白色の粘土～細砂層で、遺物をほとんど含まない。わずかにブロック土を含み、攪拌を受けている状況がみうけられた。



第IV-3図 4-1区 南側断面図

第3-2a'層 第3-2b層との区別が難しいが、わずかにブロック土を含む。炭化物などを層状に含む場所もあった。人為的な攪拌を受けておらず、第3-2b層が弱く土壌化したものである可能性が高い。

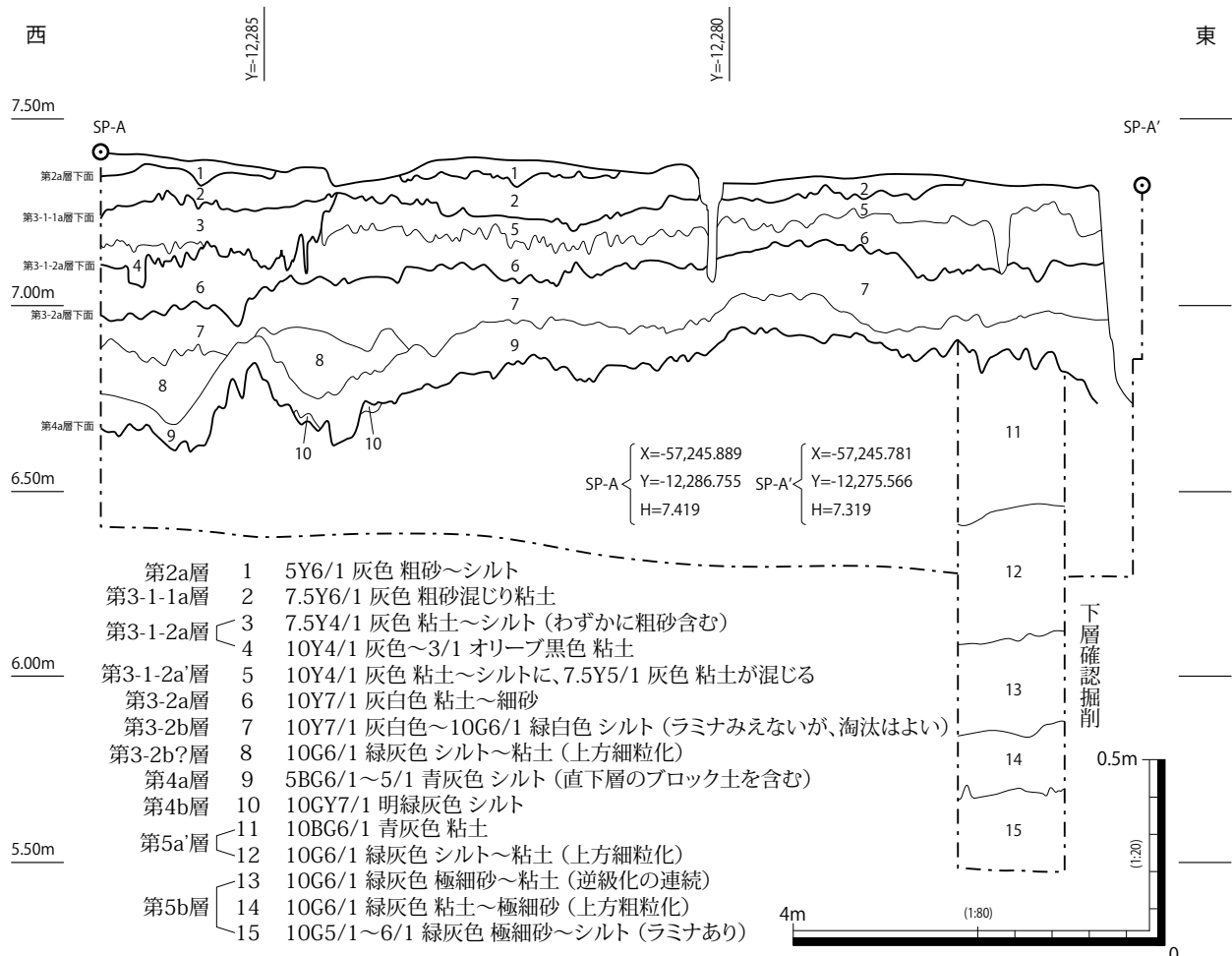
第3-2b層 明緑灰色～灰白色の粘土～シルト層。4-3区の西方など、古い地形のくぼみなどで堆積している。淘汰は良いが、ラミナなどは観察できなかった。

第4a層 灰白～緑灰色のシルト～粘土層で、直下層に由来する土をブロック状に含む。4-1区では、はっきりと確認できなかった。わずかに炭化物を含む場所もあるが、分布は散在的で明瞭な集中部は確認できない。

第4b層 明緑灰～明オリーブ灰色の極細砂～シルト層で、層厚は薄い。第4a層の直下に特徴的に認められる。南方の5区においても広範囲に認められ、一時期の氾濫堆積物である可能性が考えられる。

第5a'層 青灰～明緑灰色を呈するグライ化した粘土～シルト層で、比較的淘汰はよい。攪拌などによる明瞭な土壌化は認められない。わずかに炭化物を含む場所もあるため、a'層として取り扱った〔図版1-3〕。

各調査区の堆積を以上のように把握し、有機物を含み暗色を呈する第3-1-2a層を基準層として、その上下にある各層の把握と調査区間の対比を行おうとしたが、第3-1-1a層のように堆積環境の相違によって、層相の側方変化が想定されるものがあることに加え、地下水の影響による酸化やグライ化な



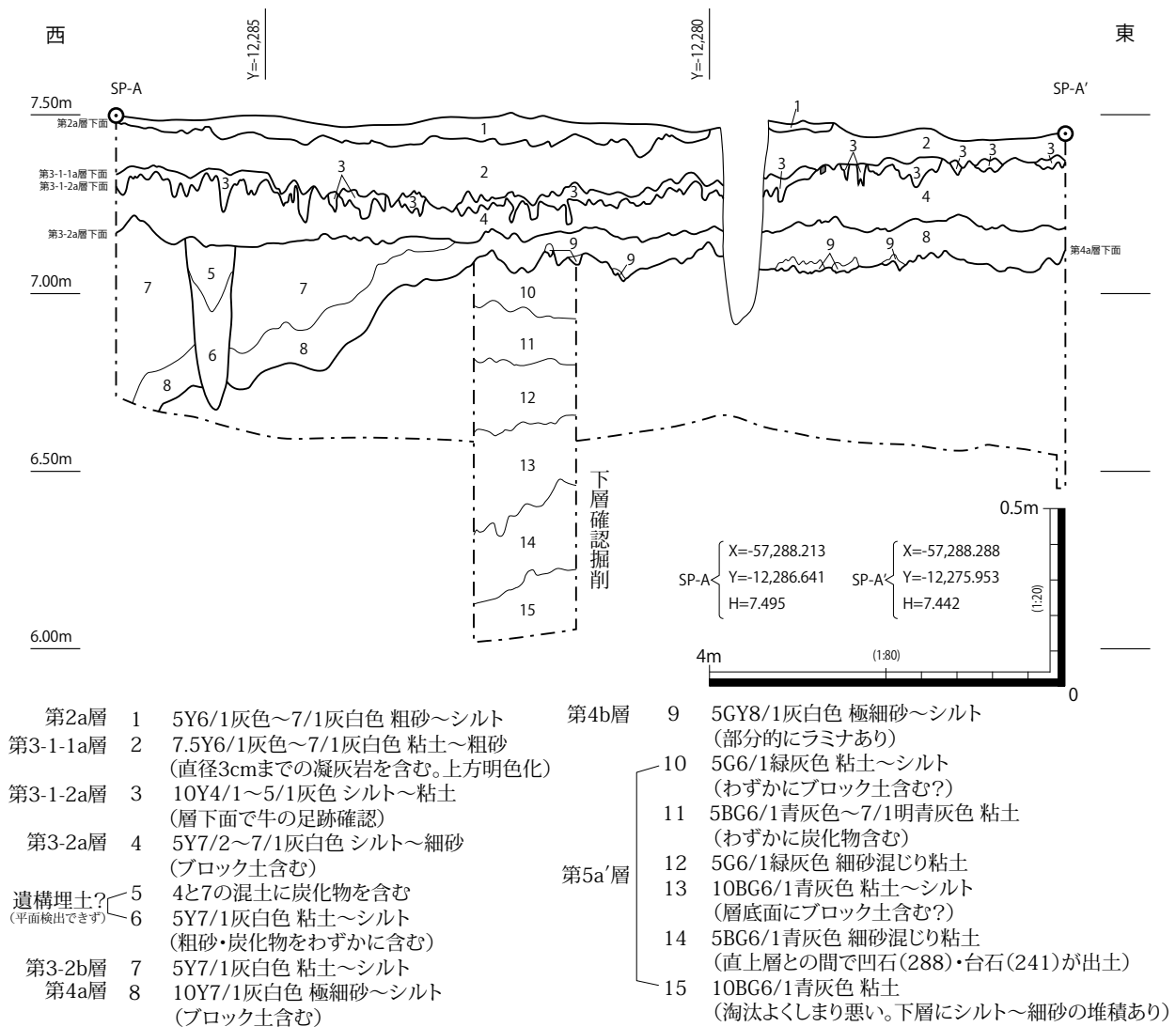
第IV-4図 4-2区 北側断面図

第IV章 調査成果

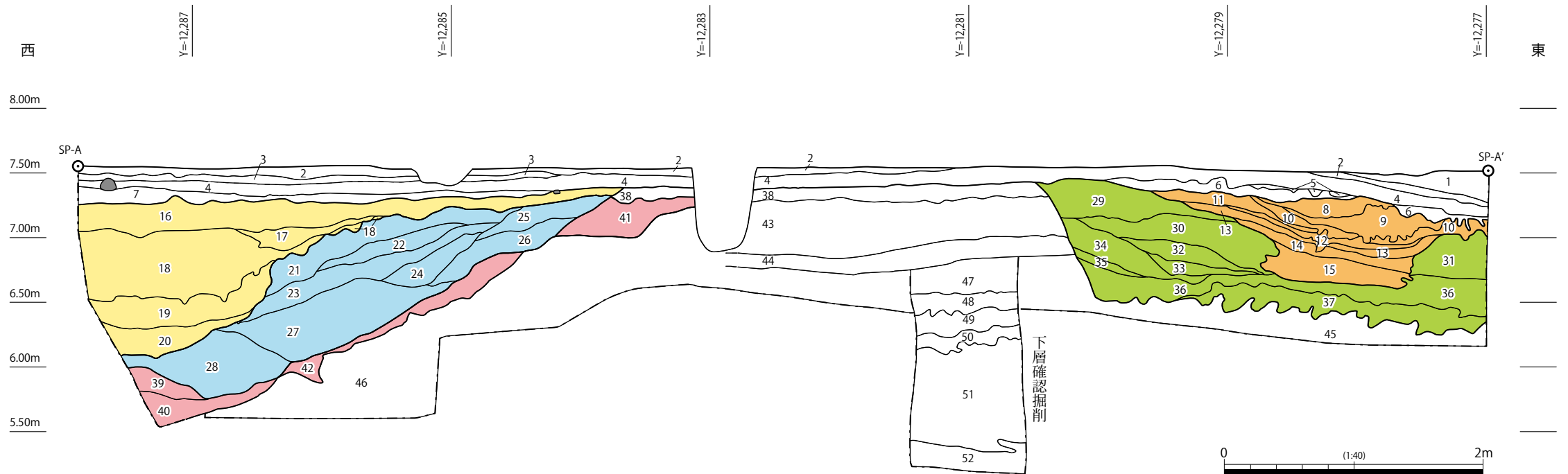
ど二次的な変色の度合いがそれぞれに異なっており、確実な層序対比が行えたとはいえない。連続する土層観察断面による観察ではないので、調査区間での層序対比に、いくらかの誤認があるかもしれない。

なお、自然堆積層と考えられるb層の直下で確認できる遺構はなく、調査を行った遺構面はいずれもa層の下面である。そこで、各遺構面を「第○a層下面」と呼称したが、調査対象とした遺構面は、過去の生活面や地表面ではないので、a層下面として認識した遺構群には、上部を覆っていた土壌（a層）が形成、利用される時間幅の中で生じた遺構が混在している可能性がある。

また、各調査区における鋼矢板の打設後、現在の耕作土および圃場整備時の攪乱、さらに近世までの耕作土と考えられる第1a層を対象に、重機による掘削作業を実施した。重機掘削終了後は、人力による遺物包含層の掘削と遺構検出・掘削を行ったが、鋼矢板の安全深度に制限され、一部、完掘に至らなかった遺構もある。



第IV -5 図 4-3 区 北側断面図



- | | | | | |
|----------|----|---|--|--|
| 第1層 | 1 | 10BG5/1 青灰色 粗砂～シルト | 21 | 10BG5/1 青灰色 粘土～シルト (ラミナみえないが淘汰は良い) |
| 第2a層 | 2 | 5Y6/1 灰色 粗砂混じり粘土 | 22 | 5BG5/1 青灰色 粘土～シルトに、10GY7/1 明緑灰色 粘土のブロック土が混じる |
| 第3-1-1a層 | 3 | 10Y6/1 灰色 シルト～粗砂 (直径2cmまでの礫を含む) | 23 | 5BG5/1 青灰色 粘土 (炭化物多く含む。ブロック土含む) |
| | 4 | 10Y6/1 灰色 シルト～細砂 | 24 | 10G5/1 緑灰色 粘土～シルト (わずかに細砂・炭化物を含む) |
| 第3-1-1b層 | 5 | 5Y8/1 灰白色 粗砂 | 25 | 10GY7/1 明緑灰色 細砂混じりシルト～粘土 |
| 第3-1-2a層 | 6 | 10G4/1 暗緑灰色 シルト～粗砂と、5Y7/1 灰白色 細砂の混土 | 26 | 10G5/1 緑灰色 粘土に、7.5GY7/1 明緑灰色 粘土～シルトがブロック状に混じる |
| | 7 | 5G4/1 暗緑灰色 シルト～粗砂 (下方に部分的に層状堆積あり) | 27 | 7.5GY5/1 緑灰色 シルト～粗砂 (底部に粗砂帯。ラミナ顕著。植物遺体を層状に含む) |
| 9溝 | 8 | 5Y8/1 灰白色～8/4 淡黄色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著) | 28 | 7.5GY5/1 緑灰色 粗砂混じりシルト～粘土 (底面に踏み込みあり。植物遺体を含む) |
| | 9 | 5G5/1 緑灰色 細砂混じりシルト～粘土 (植物遺体を層状に含む) | 29 | 5Y7/1 灰白色 粗砂～シルト |
| | 10 | 10G4/1 暗緑灰色 シルト～細砂と、5Y7/1 灰白色 細砂の混土 | 30 | 10Y6/1 灰色 粗砂～細砂 (ラミナみえない) |
| | 11 | 5BG4/1 暗青灰色 粘土～シルト (炭化物・植物遺体を層状に含む) | 31 | 10GY6/1 緑灰色 粘土～シルト (炭化物・ブロック土含む) |
| | 12 | 7.5GY8/1 明緑灰色 粘土～シルト (部分的にラミナあり) | 32 | 10G6/1 緑灰色～7/1 明緑灰色 粗砂～細砂 (部分的にラミナあり) |
| | 13 | 5BG4/1 暗青灰色 粘土～シルト (炭化物・植物遺体を層状に含む) | 33 | 10G5/1 緑灰色 細砂～シルトと、10GY8/1 明緑灰色 シルトの互層 (層底面に植物遺体が層状に堆積する) |
| | 14 | 5BGY5/1 青灰色 粘土 (部分的にラミナあり。炭化物含む) | 34 | 5G5/1 緑灰色 シルト～細砂に、5Y8/1 灰白色 粗砂が混じる (部分的にラミナあり) |
| 8溝 | 15 | 7.5GY4/1 暗緑灰色 シルト (ラミナあり。植物遺体含む) | 35 | 10G5/1 緑灰色 シルト～粘土 (ラミナあり) |
| | 16 | 10G4/1 暗緑灰色 粘土～細砂 (わずかにブロック土含む) | 36 | 7.5Y8/1 灰白色 粗砂～細砂 (ラミナあり) |
| | 17 | 7.5GY5/1 緑灰色 シルト～粘土 (植物遺体を層状に含む) | 37 | 10G4/1 暗緑灰色 シルトに、7/1明緑灰色 粘土～シルトが混じる (部分的にラミナあり。層底面に踏み込みあり) |
| | 18 | 5Y8/1 灰白色 粗砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層 | 38 | 10Y7/1 灰白色 シルトに、5G5/1～6/1 緑灰色シルトが混じる |
| | 19 | 10G5/1 緑灰色 シルトに、7.5Y8/1 灰白色 粗砂が混じる (層中に踏み込みあるが、部分的にラミナ残る) | 39 | 10BG6/1 青灰色 粘土 |
| | 20 | 7.5GY4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト～粘土 (植物遺体・炭化物含む) | 40 | 5Y8/1 灰白色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著) |
| 40溝 | | 41 | 10Y7/1 灰白色 粘土に、5BG6/1 青灰色 粘土がブロック状に混じる | |
| 41溝 | | 42 | 10G6/1 緑灰色 粘土と直下層の混土 | |
| 第3-2a層? | | 43 | 10Y7/1 灰白色 粘土 | |
| 第3-2b層? | | 44 | 5Y7/1 灰白色 シルト～粘土 | |
| 第4a層? | | 45 | 10G7/1 明緑灰色 シルト～粘土 | |
| 第5a層 | | 46 | 10G7/1 明緑灰色 シルト～粘土 | |
| | | 47 | 5BG6/1 青灰色～7/1 明青灰色 粘土 (上方酸化鉄・マンガン斑顕著) | |
| | | 48 | 10G6/1 緑灰色～7/1 明緑灰色 粘土～シルト | |
| 第5b層 | | 49 | 10G6/1 緑灰色～7/1 明緑灰色 粘土に、粗砂がわずかに混じる | |
| | | 50 | 10G6/1 緑灰色～7/1 明緑灰色 粘土に、粗砂がわずかに混じる | |
| 第6層 | | 51 | 5BG6/1 青灰色～7/1 明青灰色 極細砂～粘土 (逆級化の連続) | |
| | | 52 | 5BG7/1 明青灰色 粘土 | |

第IV-6図 4-4区 北側断面図

第2節 遺構と遺物

4区で確認した遺構、遺物については、横断する形で、遺構面ごとに記載を行う。また、平成21年度調査に行った2ヶ所のトレンチ調査（T01、T02）の成果もここに含める。

第1項 第1a層下面の遺構と遺物

近世以降の耕作土と考えられる第1a層は重機で除去した。第1a層下面では、ほぼ方位に沿った暗渠を確認した。内部に陶管が設置されており、近現代のものと考えられることから、図面や写真による記録は作成しなかった。

第2項 第2a層下面の遺構と遺物

4-1～4-4区の全てで耕作痕跡を検出した〔第IV-7図・図版2-1〕。耕作痕跡は、やや東に傾くが、ほぼ南北に向かって直線的に延びる。なお、現地表面の水田もやや東寄りの方位軸で区画されている。検出面からの掘削深度は一定しないが、2～3cm程度と浅く、平面プランは明瞭に確認できなかった。埋土は、第2a層と良く似た土であったが、底面に淘汰の良いシルトの薄層を確認できる場所もあり、畝間に設けられた溝の可能性も考えられる。遺物はほとんど出土しないが、4-4区において、東播系須恵器と考えられる鉢や、瓦質土釜が出土している。

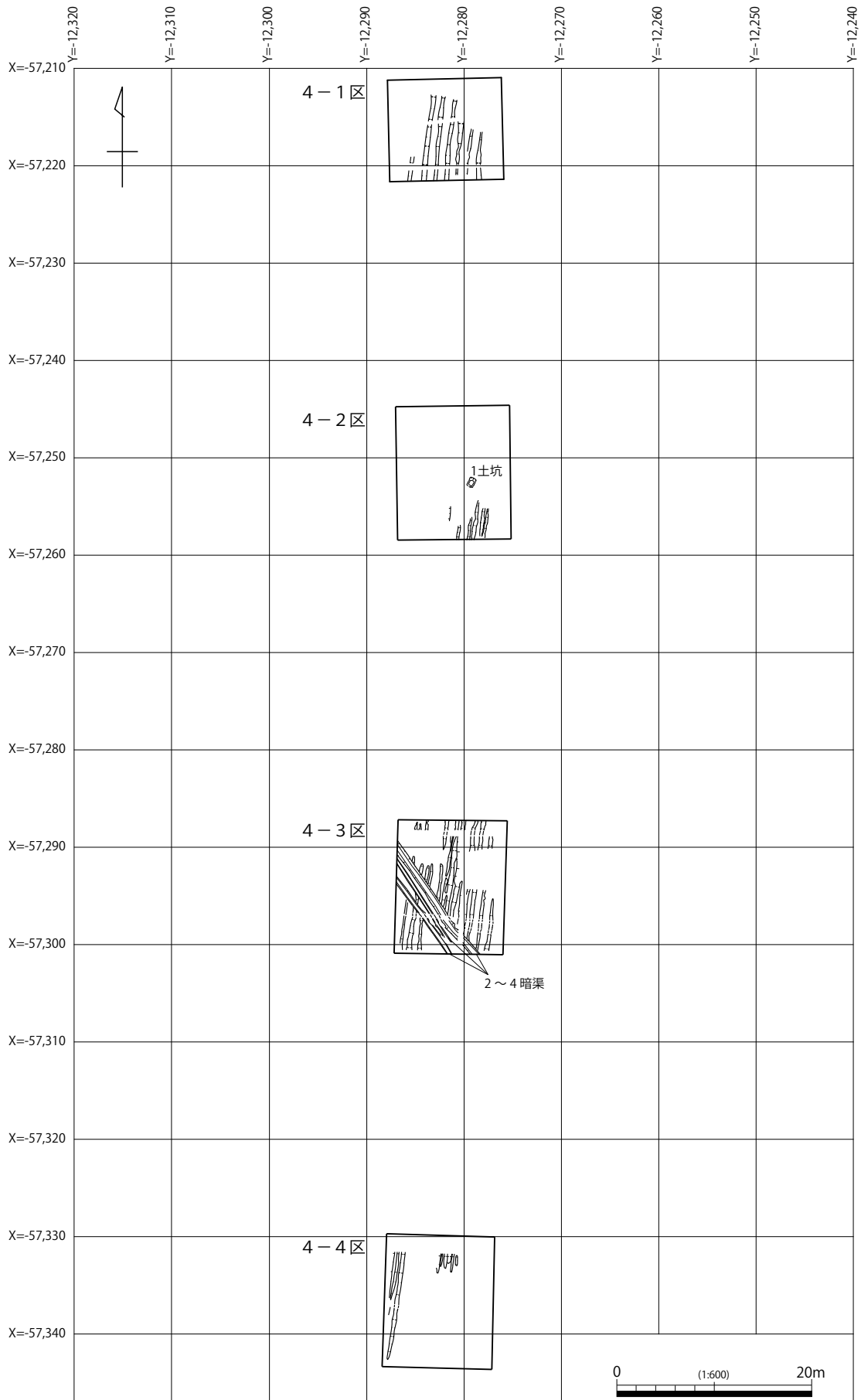
4-3区では、これらの耕作痕跡の上から掘り込まれる北西－南東方向の暗渠を3条確認した〔第IV-8図〕。3条の暗渠は平行しており、東側から順に2暗渠、3暗渠、4暗渠と呼ぶ。2暗渠の底面〔図版2-2〕と4暗渠には長径20cmまでの凝灰岩が充填されていたが、3暗渠にはあまり礫が含まれていなかった。いずれも埋土には第2a層～第3-2a層に由来する土がブロック状に含まれており、掘削後間もなく埋め戻されていると考えられる〔第IV-9図〕。ただし、2暗渠は、埋土上面ほどブロック土が少なく、第2a層に近似する灰色土層が認められた。

これらの暗渠は、第1a層を除去した機械掘削終了面で検出できなかったこと、方位軸に合わないこと、埋土に第1a層が含まれないことから、検出した耕作痕跡には後行するものの、第2a層を形成する耕作行為の中で設置されたものと理解したい。北西－南東方向に延びる暗渠は他にみられないが、釣山の西側斜面にみえる小規模な沢の延長方向に一致することから、沢から流入する水を排水する目的が想定できようか。

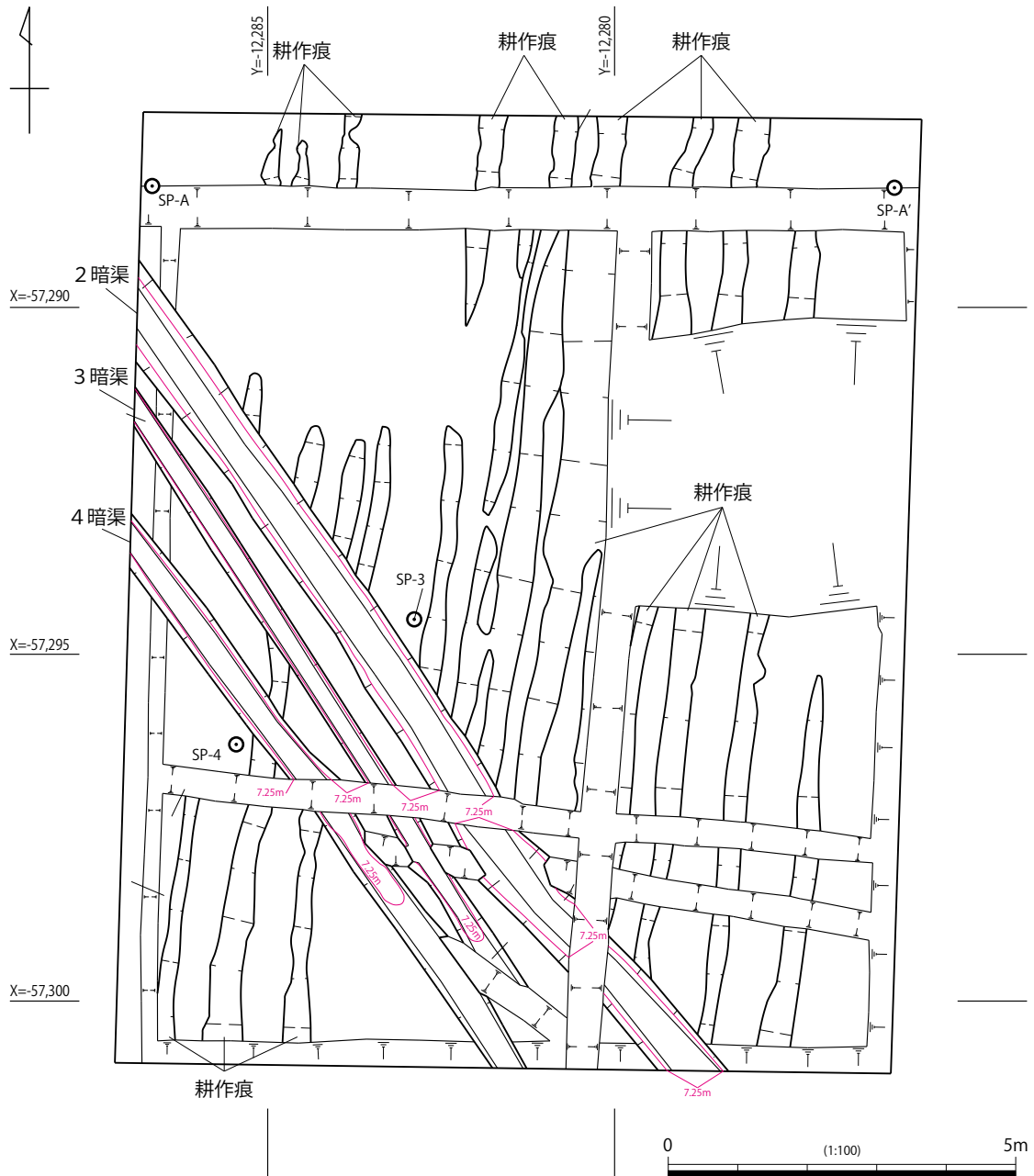
また4-2区では、調査区中央部で1土坑が検出された〔第IV-10図、図版2-3〕。1土坑は、隅丸方形で長辺1m、短辺0.7m、検出面からの深さは0.5mを測る〔第IV-11図〕。埋土は、第2a層と第3a層が粗く混り、凹凸のある底面を埋めている。掘削後間もない埋め戻しが考えられよう。遺物は出土しなかった。

第2a層から少量の土器が出土した〔第IV-12図〕。瓦質羽釜（1・2）、備前焼の鉢（3）、陶器椀（4）がある。1や3が耕作痕跡内から出土したことを考えると、これらの遺構は鎌倉時代頃に帰属すると想定される。窯道具（7）が出土したが、周辺に陶器の生産遺跡は確認されていない。窯道具の出土もこの1点のみである。この他に管状土錘（6）が出土した。

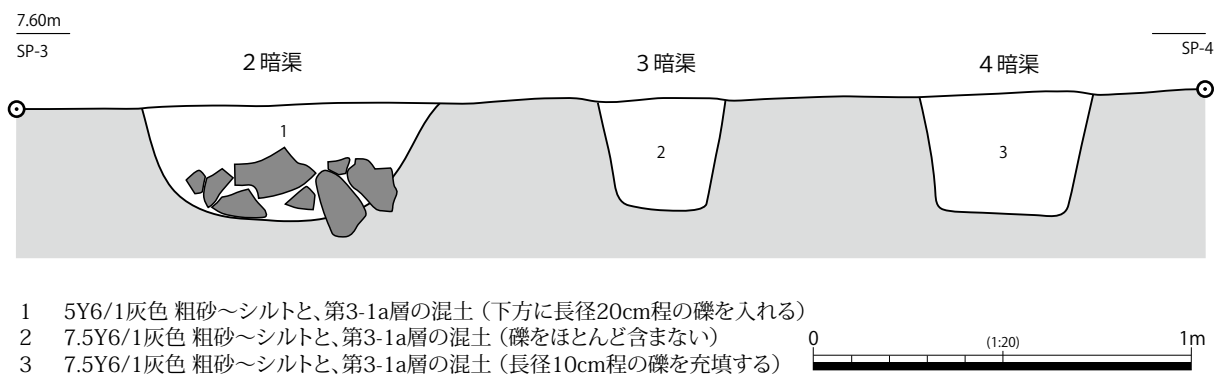
第IV章 調査成果



第IV -7 図 第2a層下面 平面図

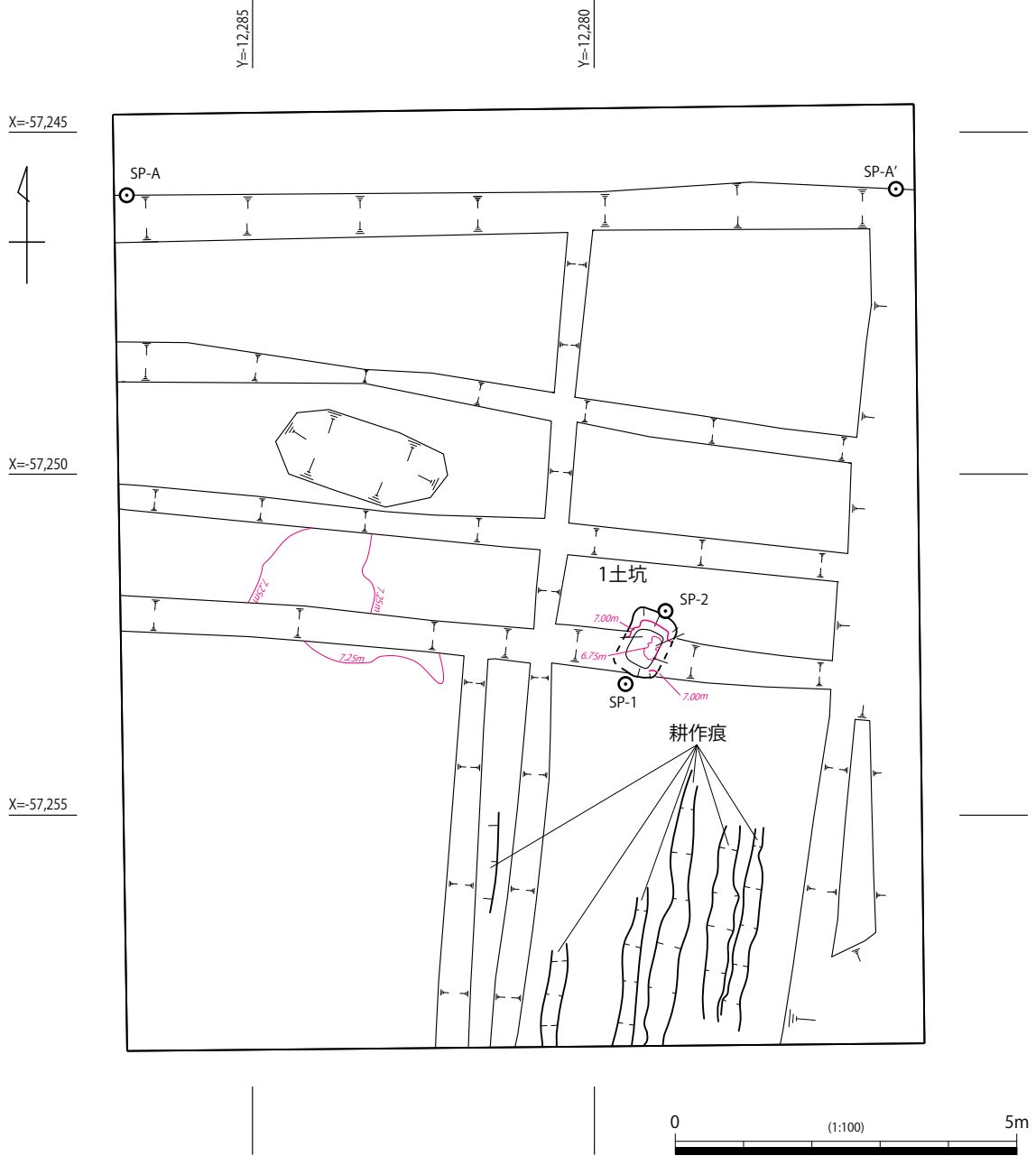


第IV-8図 4-3区 第2a層下面平面図



- 1 5Y6/1灰色 粗砂～シルトと、第3-1a層の混土（下方に長径20cm程の礫を入れる）
- 2 7.5Y6/1灰色 粗砂～シルトと、第3-1a層の混土（礫をほとんど含まない）
- 3 7.5Y6/1灰色 粗砂～シルトと、第3-1a層の混土（長径10cm程の礫を充填する）

第IV-9図 4-3区 2～4暗渠 断面図



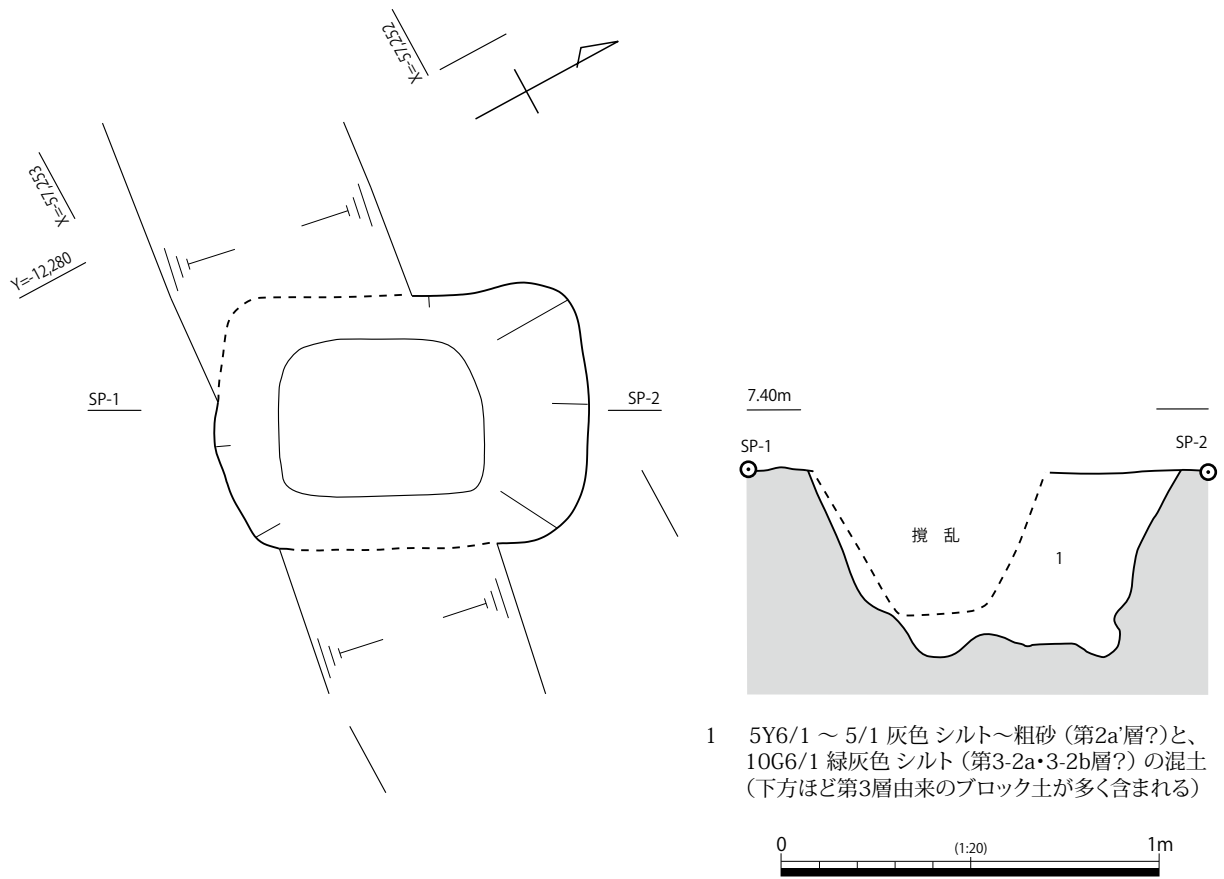
第IV -10 図 4-2 区 第2a 層下面 平面図

第3項 第3-1-1a 層下面の遺構と遺物

4-2 区を除いた調査区で、擬似畦畔を確認した〔第IV -13～16 図、図版 3-1～3〕。直上で行われた耕作に伴い第3-1-2a 層が削り残された痕跡であり、第3-1-1a 層を母材とする耕作によって形成されたものである。

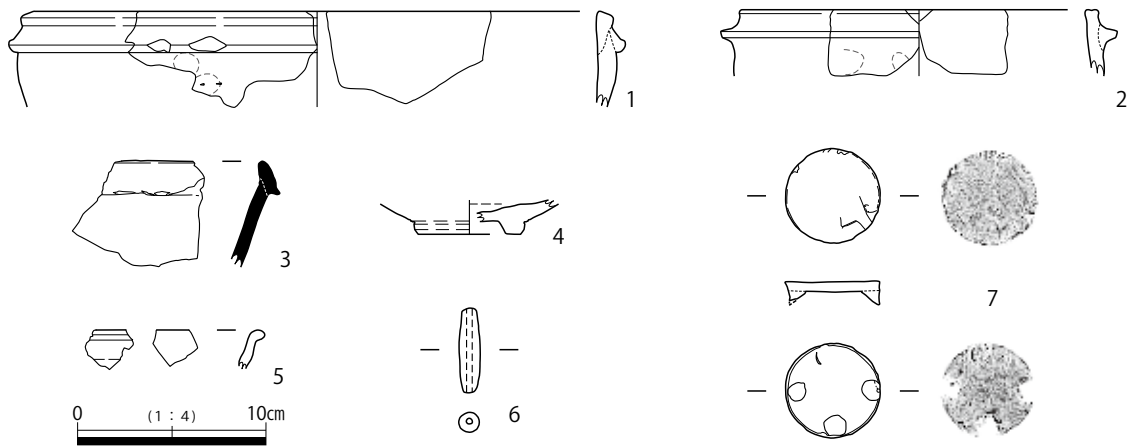
痕跡的な遺構であり、明瞭に確認できない場所も多いが、畦畔を挟んで耕地の段差を認識できる場所もあり、低い側では比較的明瞭に擬似畦畔を確認できた。第2a 層下面で検出された耕作痕跡と同じく、おおよそ南北方向を主軸とするが、その形状は曲線的で、水田区画は不定形なものだったと考えられる。

第3-1-1a 層からは須恵器や瓦質の土器が出土した〔第IV -17 図〕。1 は44 区から出土した須恵器の



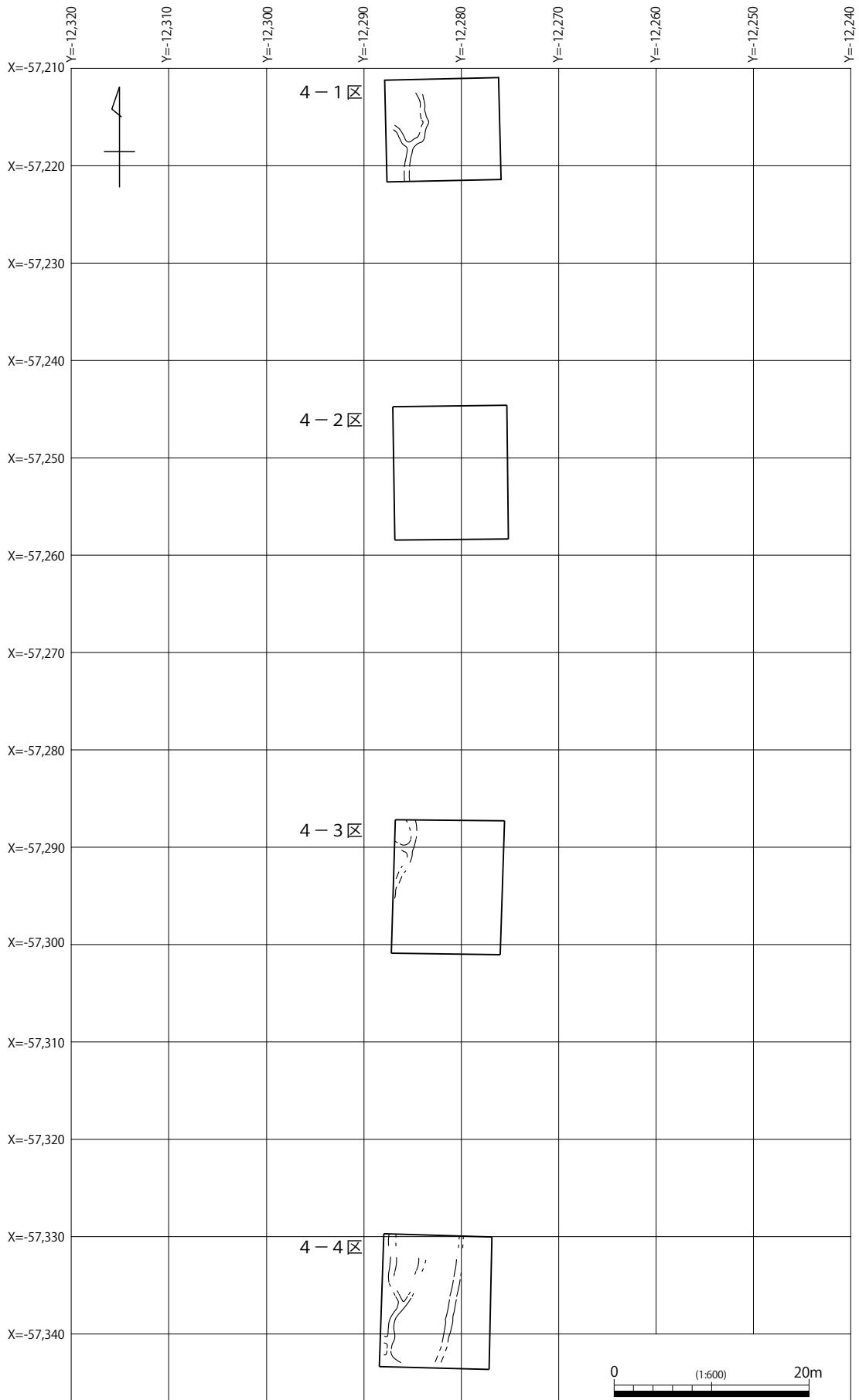
- 1 5Y6/1 ~ 5/1 灰色シルト~粗砂 (第2a'層?)と、
10G6/1 緑灰色シルト (第3-2a・3-2b層?) の混土
(下方ほど第3層由来のブロック土が多く含まれる)

第IV -11 図 4-2 区 1 土坑 平・断面図

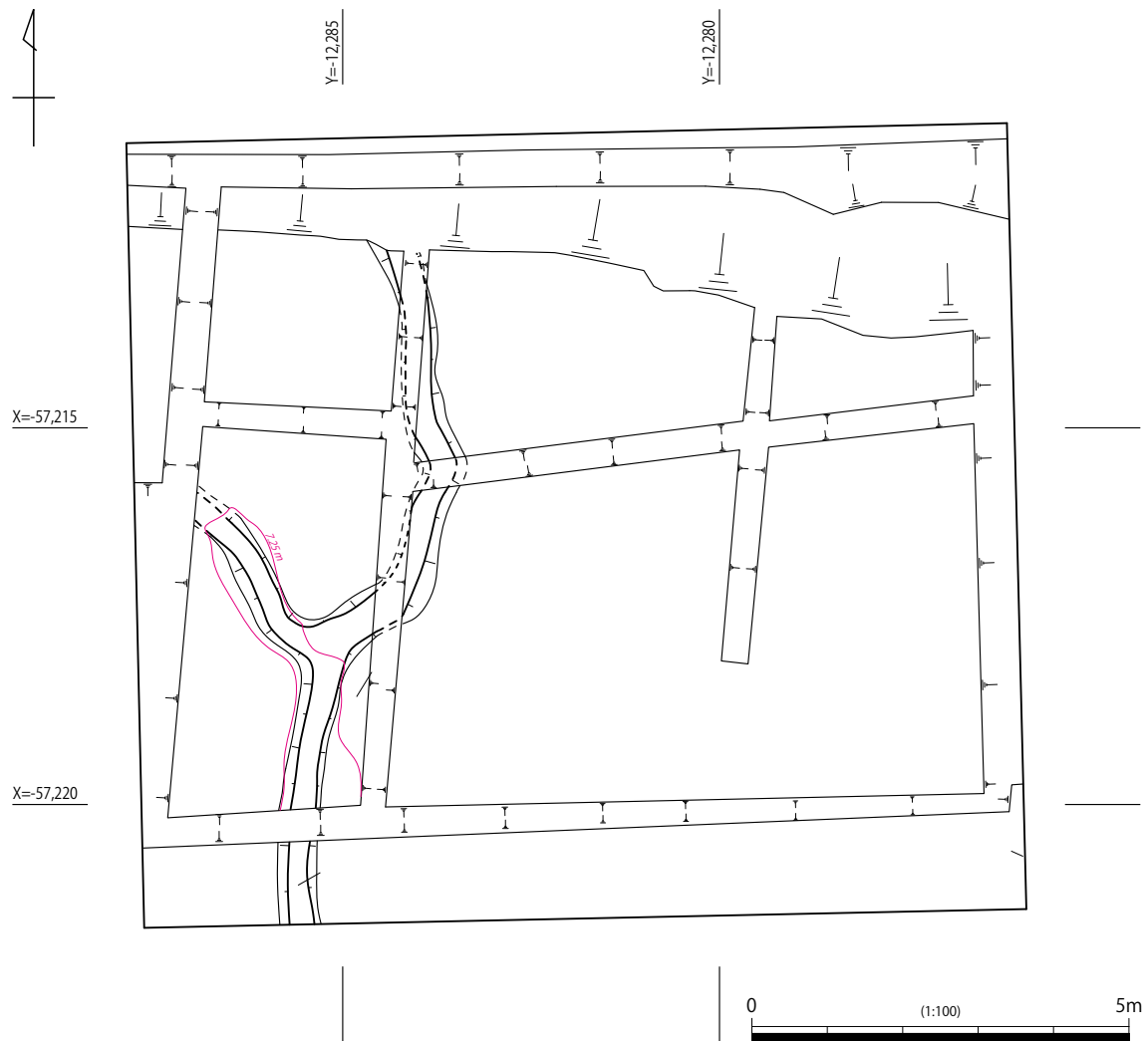


第IV -12 図 第2a層出土遺物

第IV章 調査成果



第IV -13 図 第 3-1-1-a 層下面 平面図



第IV-14図 4-1区 第3-1-1-a層下面 平面図

坏身、2は43区から出土した須恵器の壺か坏の底部で、高台が付く。4・5は瓦質の鍋である。4は4-2区、5は4-4区から出土した。瓦質土器は、第2a層下面の耕作痕跡から出土した土器とほぼ同時期のもので、上層（第2a層）の掘り残しから出土している可能性が高い。3は轆の羽口の破片とみられる。

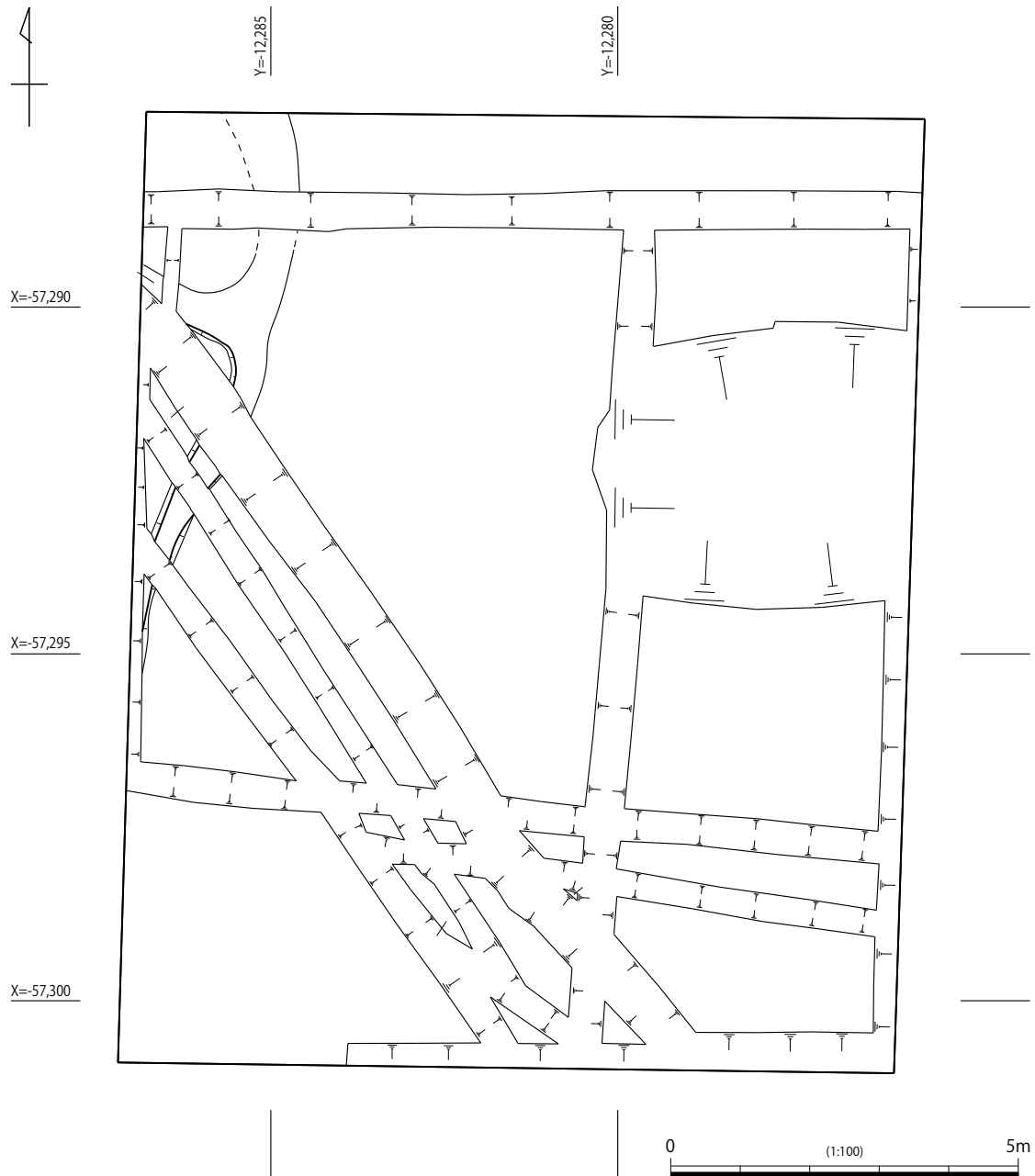
本高弓ノ木遺跡5区の調査成果を参考にするなら、本層の帰属年代は、飛鳥～奈良時代を下限とする。上層の掘り残しから出土した可能性がある瓦質の土器を除いた須恵器などの土器類は、5区との比較によって想定される時期と矛盾しない。

第4項 第3-1-2a層下面の遺構と遺物

第3-1-2a層下面では、複数の時期に帰属する遺構を確認した。

4-4区では、切り合い関係などから、各遺構間の前後関係が明瞭に把握できたので、上部の遺構群〔第IV-18図〕と、下部の遺構群〔第IV-32図〕に分けて整理を行った。出土した遺物から、上部の遺構群は古墳時代前期以降、下部の遺構群は弥生時代後期頃のものと考えている。確実な対応関係をはかることはできないが、上部の遺構群は、本高弓ノ木遺跡5区の第3-1-2a層下面、下部の遺構群は同じく第3-1-3a層下面に対比できるものと推定する。

なお、4-3区では調査区の南西隅で検出された34溝のほかにピット群を確認した〔第IV-18・32図〕。



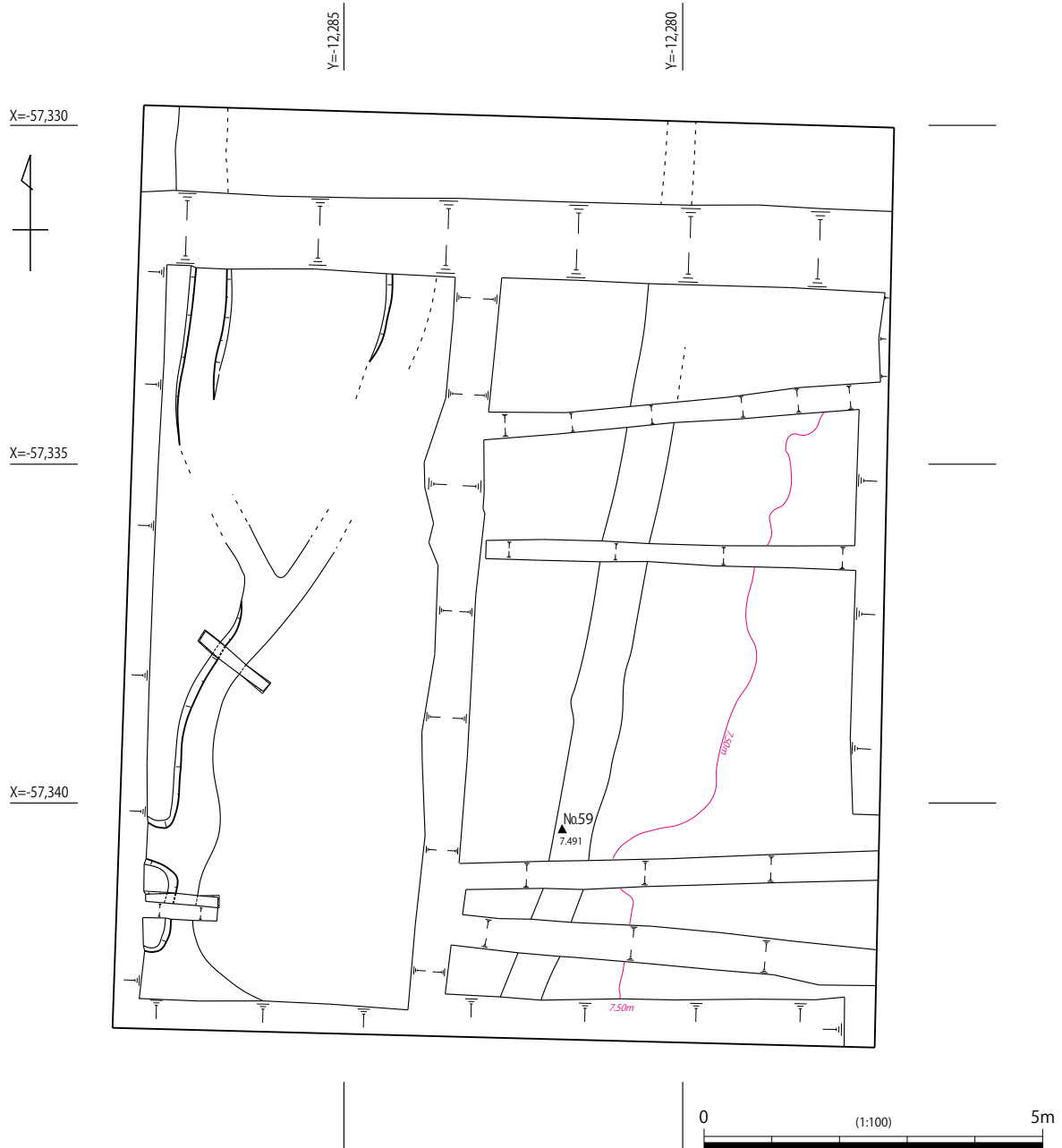
第IV -15 図 4-3区 第3-1-1a層下面 平面図

34溝については、上部の遺構群に帰属する8溝と堆積状況などが類似しており、上部の遺構群に含まれると判断した〔第IV -18 図〕。ピット群については、時期を示すものがなく、どちらに帰属するかが判然としない。ここでは、全て下面の遺構群に図示した〔第IV -32 図〕。

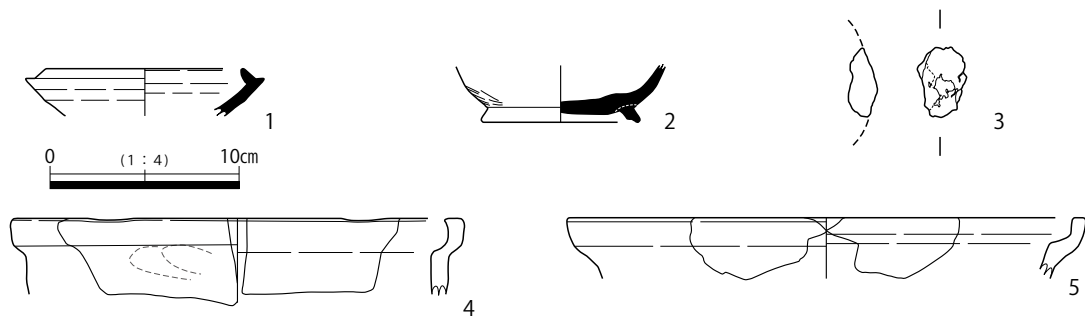
(1) 上部の遺構と遺物

4-1区、4-2区では、畦畔状の遺構を確認した〔第IV -18・19 図〕。帰属する時期を絞りこめなかったため、4-4区に確認できた上下の遺構群との対比はできなかったが、4-1区の畦畔付近から輪状つまみを持つ須恵器の坏蓋〔第IV -28 図2〕が出土していることから、上部の遺構群に含まれるものと判断した。

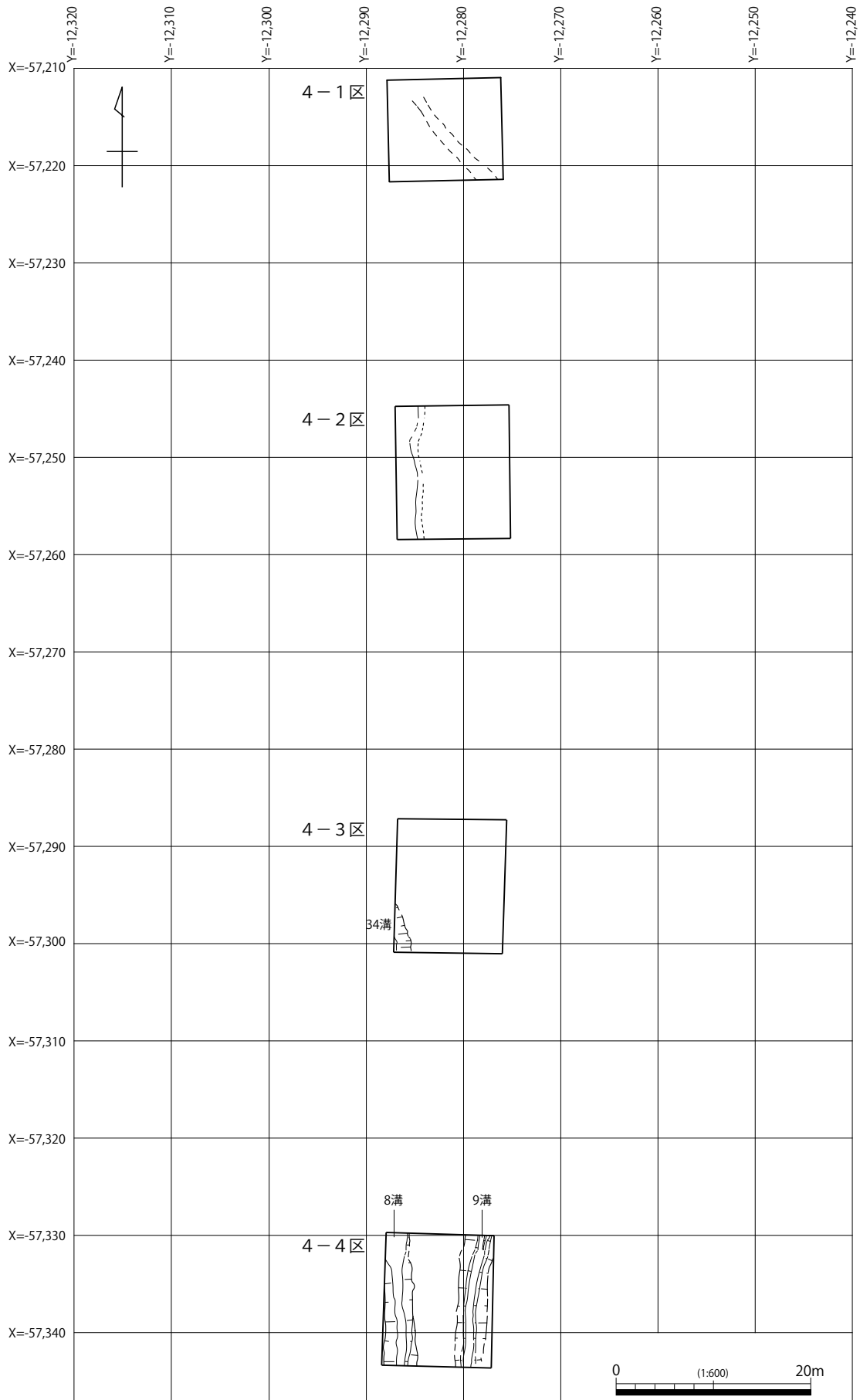
4-1区においては、偶蹄目の蹄跡が多数検出された〔図版4-1～3〕。蹄は主蹄のみで副蹄は確認できない。長さは約10cmを測る。ウシの蹄跡と考えられる。蹄跡内には、第3-1-2a層と考えられる暗



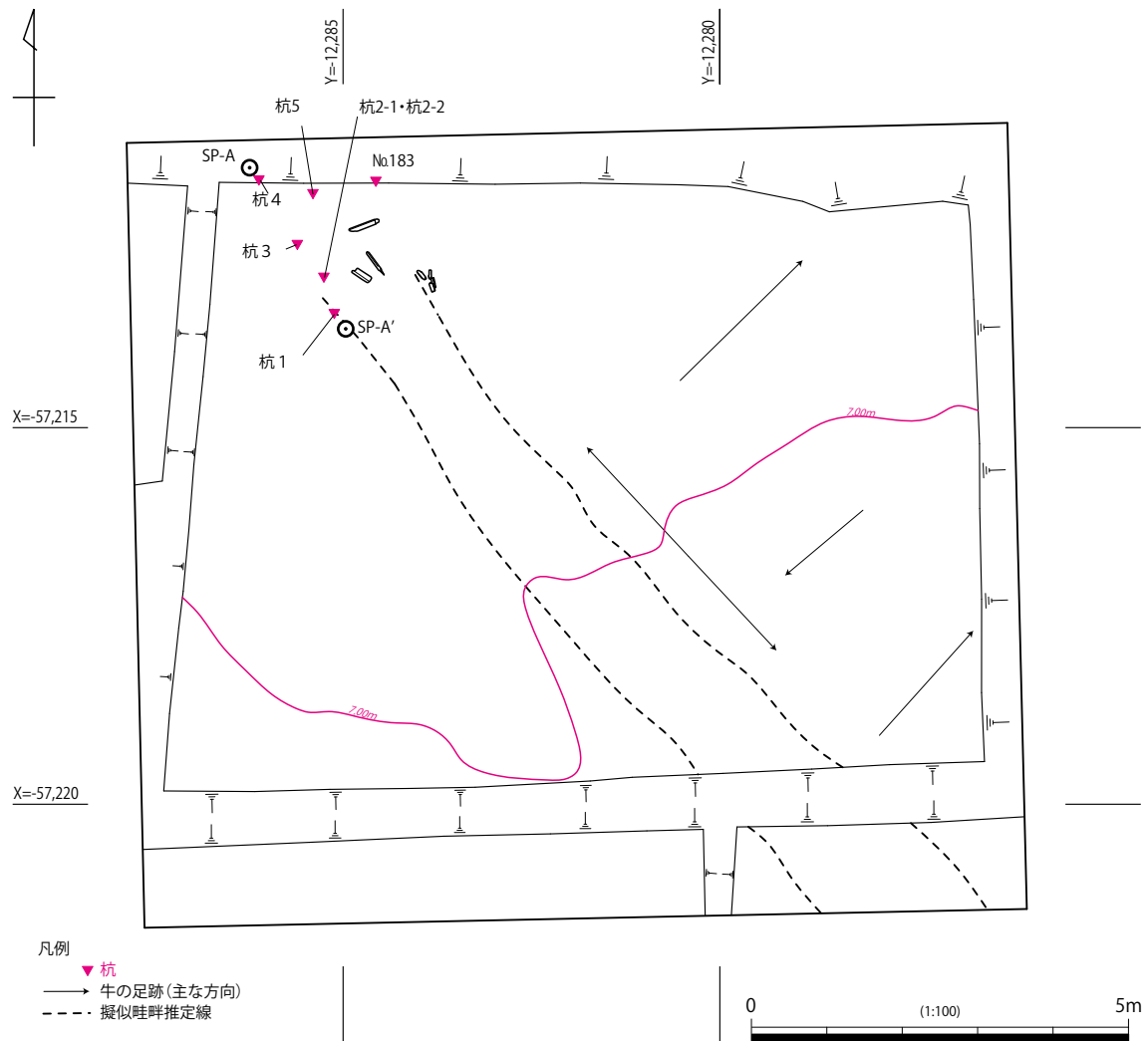
第IV -16 図 4-4 区 第 3-1-1-a 層下面 平面図



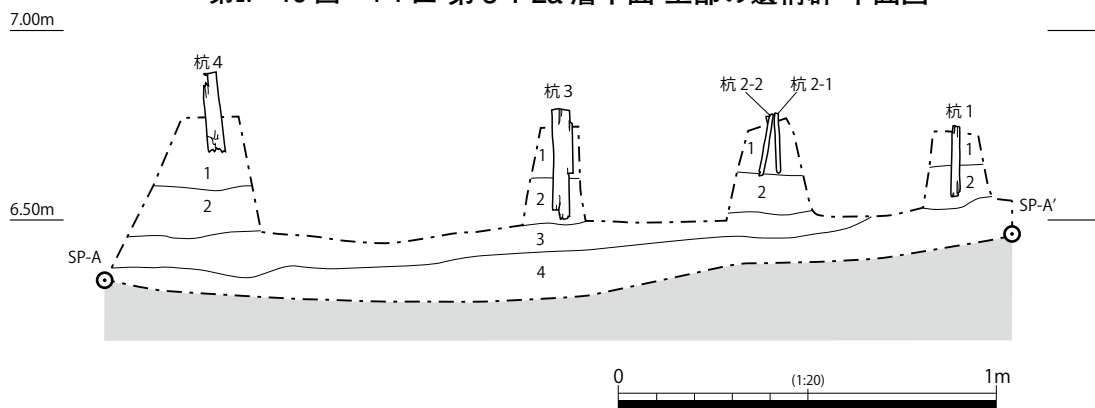
第IV -17 図 第 3-1-1a 層出土遺物



第IV -18 図 第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面図



第IV -19 図 4-1 区 第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面図



- 第3-2a層 1 5G5/1 緑灰色 シルト～粘土 (ブロック土わずかに含む。直下層との間に暗色のシルト帯を部分的に挟在する)
- 第3-2a'層 2 10BG5/1 青灰色 粘土に 7.5GY7/1 明緑灰色 粘土がわずかに混じる (部分的に炭化物が層状に含まれる)
- 第4b層 3 5GY7/1 明オリーブ灰色 細砂～シルト (ラミナあり。上方細粒化)
- 第5a'層 4 5BG5/1 青灰色 細砂～粘土 (炭化物わずかに含む)

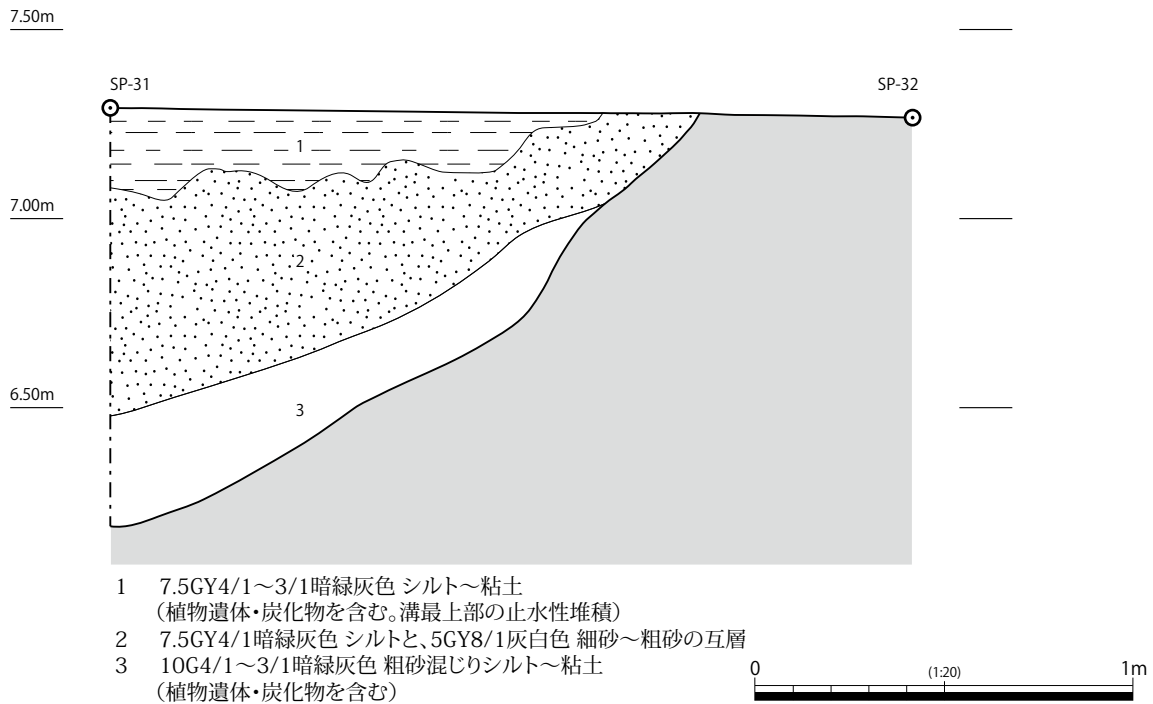
第IV -20 図 4-1 区 第 3-1-2a 層下面 上部の遺構群 平面図



第IV -21 図 4-3区 第3-1-2a層下面 上部の遺構群 平面図

緑灰色のシルトが充填されていたが、ラミナは認められない。同層が水を含み柔らかい状態だったときに直下層まで踏み込まれて形成されたものだろう。稲が生育している状況では、水田内で畜力の利用は想定しがたいことから、代かきなど、植え付け前の作業によって、耕作土直下の第3-2a層上面に残された蹄跡と考えたい。ウシの傍らにいたと想定される人の足跡が確認できないのは、踏み込みの深度の違いによるものであろうか。

蹄跡を観察すると、調査区中央部を境にして大きく調査区の北東側と南西側の二群に分かれることが確認できる。北東側の蹄跡群では、北東-南西方向に蹄跡が連続しており、同方向に往復する歩行の様子が良好に観察できた〔第IV -19 図、図版 4-3 〕。一方でこれらの足跡は調査区中央付近で途切れており、付近では北西-南東方向の蹄跡列が確認できる。この北西-南東方向の蹄跡列に平行するように、蹄跡の希薄な場所が带状に確認できることから、調査区中央付近を北西-南東方向に二分す



第IV -22 図 4-3 区 34 溝 断面図

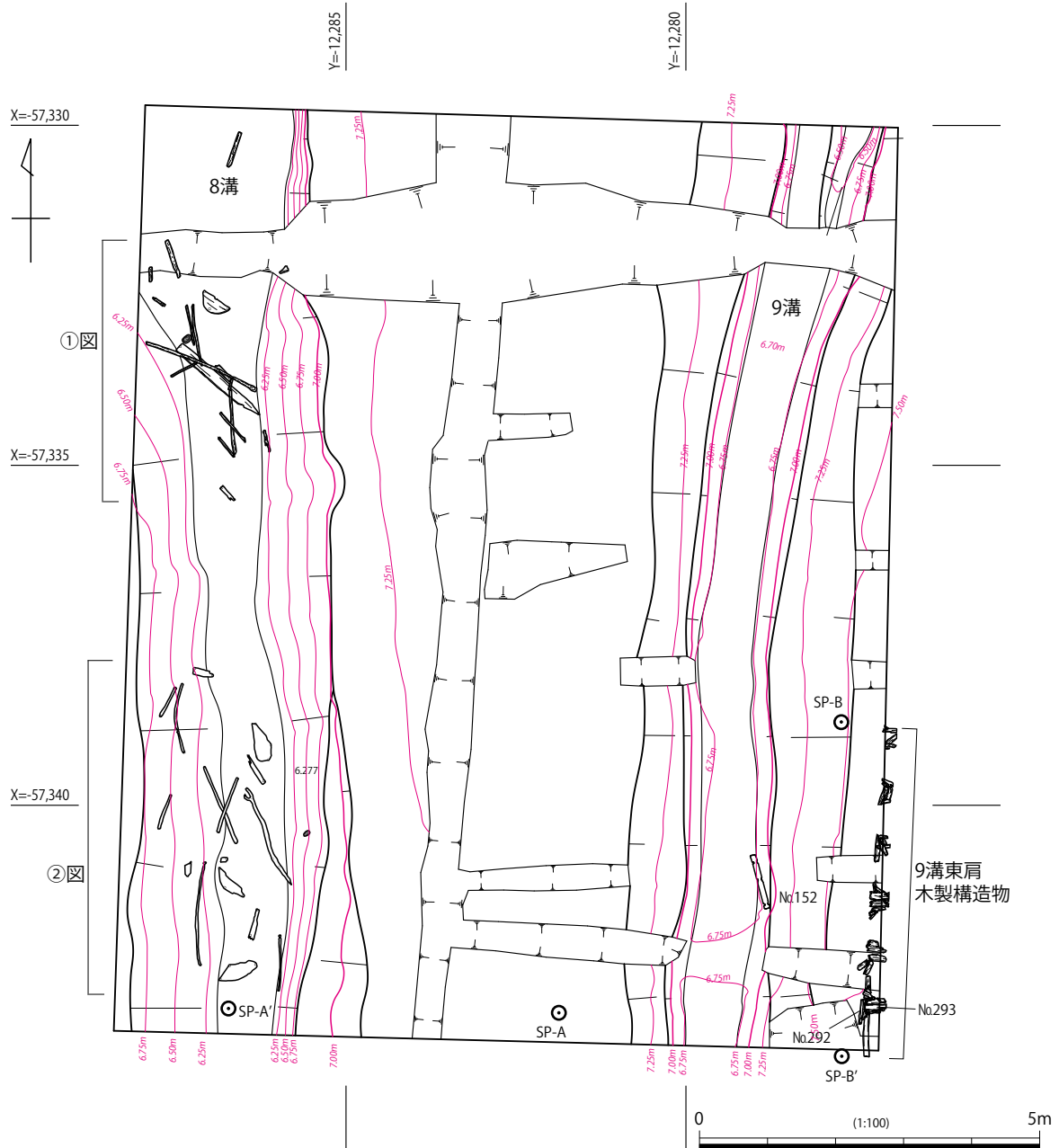
るような耕地区画の存在が想定できる〔第IV -19 図〕。溝のような遺構は確認できなかったことから、畦畔が設置されていたものと考えたい。北西側では土器や木質遺物が出土した〔第IV -19 図、図版 5-1〕。4-1 区北西では数本の杭が打設されており、列状に並ぶものもある〔第IV -19・20 図、図版 5-2〕。畦畔に付帯する可能性もあろう。また付近からは輪状つまみを持つ須恵器坏蓋が1点出土した〔第IV -28 図 2〕。上層の掘り残しに伴う土器の可能性はある。

4-2 区では、南北方向の擬似畦畔が検出された〔第IV -18 図〕。耕地の段差として確認できたもので、水田面は東から西に傾斜している。

4-3 区と 4-4 区では、3 条の溝を（8・9・34 溝）検出した〔第IV -21・23 図〕。4-3 区の 34 溝は、検出した標高、埋土の状況、遺構プランの連続性から、4-4 区の 8 溝と、同一の溝である可能性が高い。ただし、34 溝は 4-3 区南西端で、一部が調査できたにとどまるため、詳細は不明である〔第IV -21・22 図、図版 5-3・6-1〕。埋土からは、木材の他、古墳時代前期の甕と考えられる土器片が出土したが、小片であったため図化できなかった。

4-4 区で検出された 8 溝と 9 溝は、ほぼ南北方向に平行している〔第IV -6・23 図〕。規模、埋土の状況も近似するが、同時に開口していたかどうかは不明である。

8 溝は、4-4 区西側で検出された。検出面の標高は約 7.4 m である。北側では西肩が調査区外まで広がるが、南側では矢板にそって西肩がかろうじて確認できた。幅は約 3.5 m、検出面からの深さは約 1.0 m を測る。底面標高は 6.1 ~ 6.2 m で、下層には有機物を含むシルトを主体とした堆積層〔第IV - 6 図 19・20 層〕があり、中位には粗砂を主体とする砂層〔第IV - 6 図 18 層〕が比較的厚く確認できた。内部からは、土器や木質遺物などの遺物が出土している。8 溝内から出土した木質遺物は、2ヶ所に集中していたが〔第IV -23・24・25 図〕、もともと構築されていたものではない。木製品も含まれるが〔第IV -30・31 図〕、完形品はなく、破損後に廃棄されたような状況であった〔図版 7-2・3、8-1

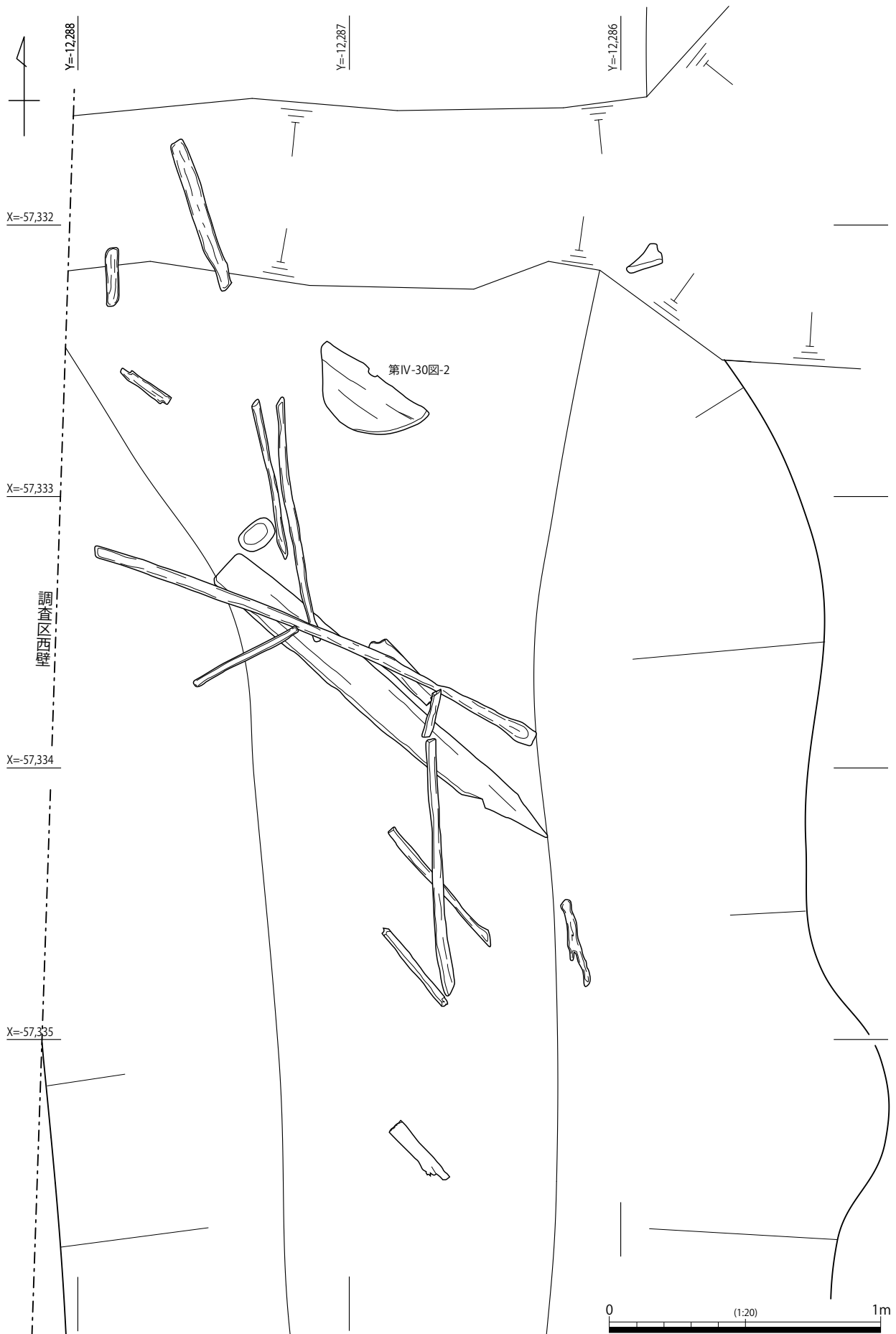


第IV-23図 4-4区 第3-1-2a層下面 上部の遺構群 平面図

～3)。

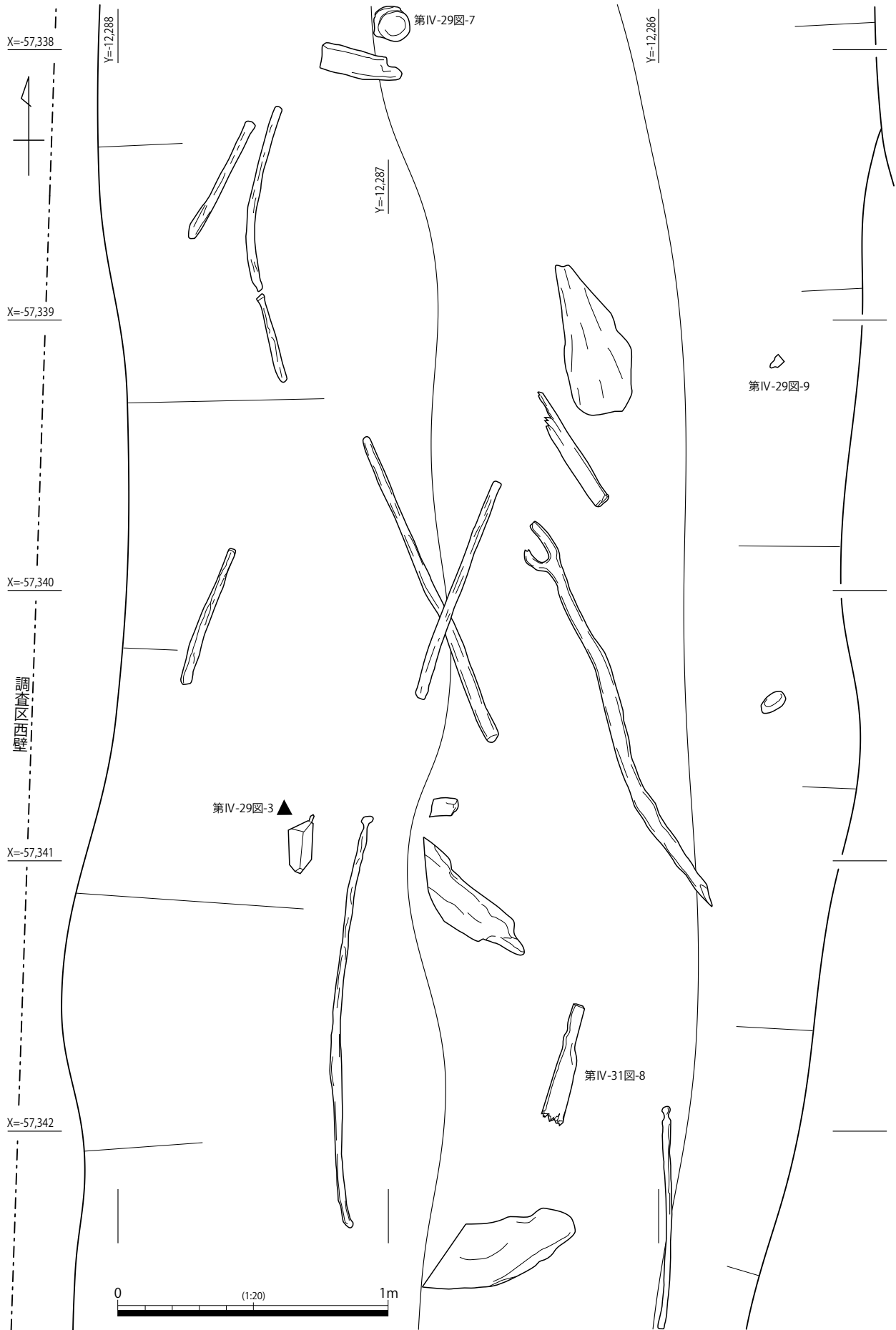
こうした状況は、5区で検出された2溝によく似る。8溝は5区の2溝の延長に相当する可能性がある。5区を南北に縦断する2溝は5区南端で検出した4落ち込みから、約200mにわたって北に延びており、4-3区の34溝、4-4区の8溝は、その延長線上に位置している。また、平成21年度に調査した3C-6j区に設定したトレンチでも、第3-1-2a層に比定し得る粗砂～シルト層が確認されている。標高も矛盾のない高さにあり、その直下には、深さ1m以上におよぶシルト質の土があったことから、このトレンチ自体が溝内に位置する可能性が考えられた。

さらに北方、平成20年度に調査が行われた3区で確認された「溝9」は、古墳時代前期の土器、木製品や木材など、4区の8溝や5区の2溝と時期や内容が共通する遺物併っている。したがって、5区で検出した2溝は、南方350m以上にわたって直線的に掘削されている可能性がある〔第V図〕。

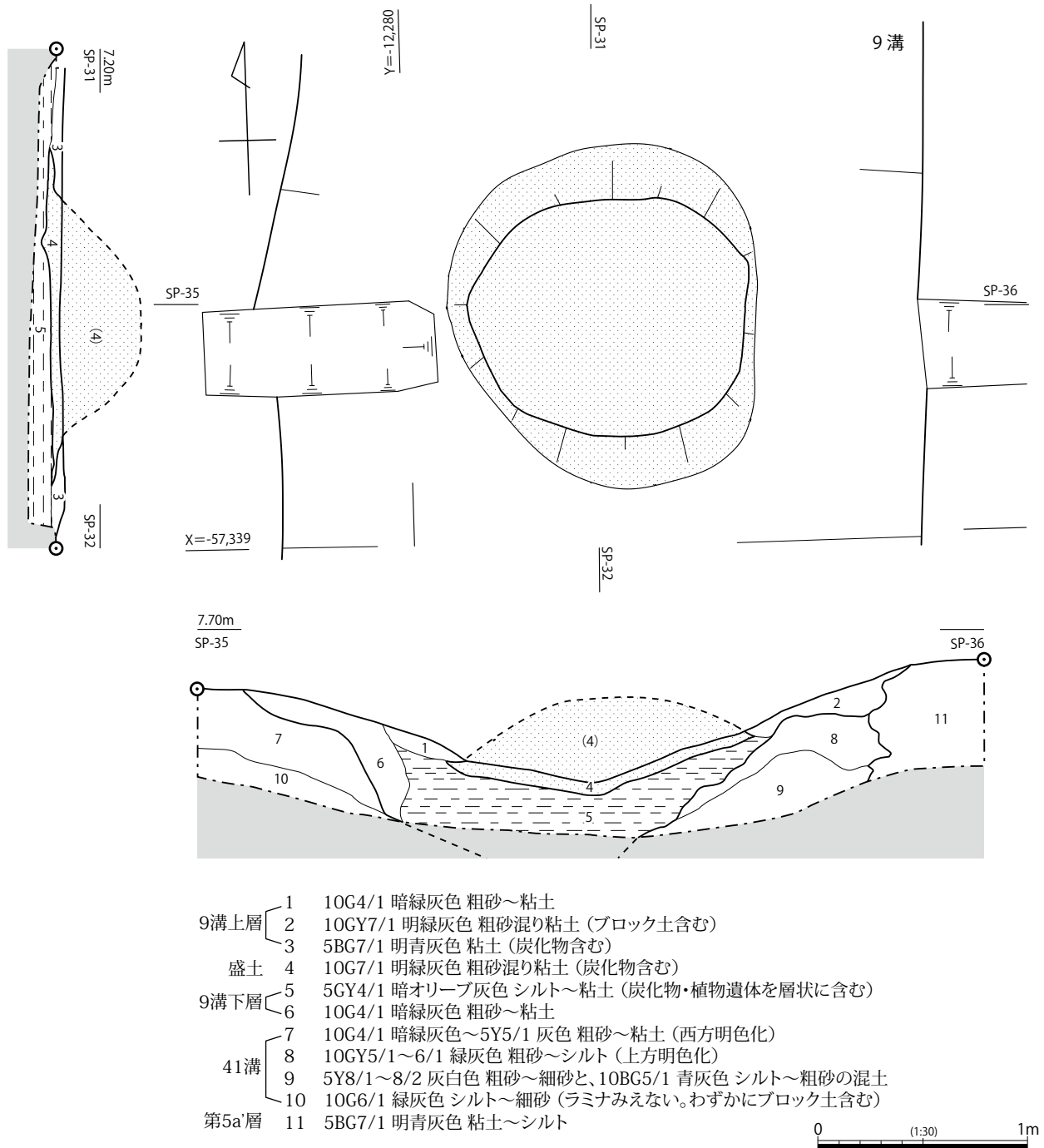


第IV-24 図 4-4 区 8 溝北側 遺物出土状況

第IV章 調査成果



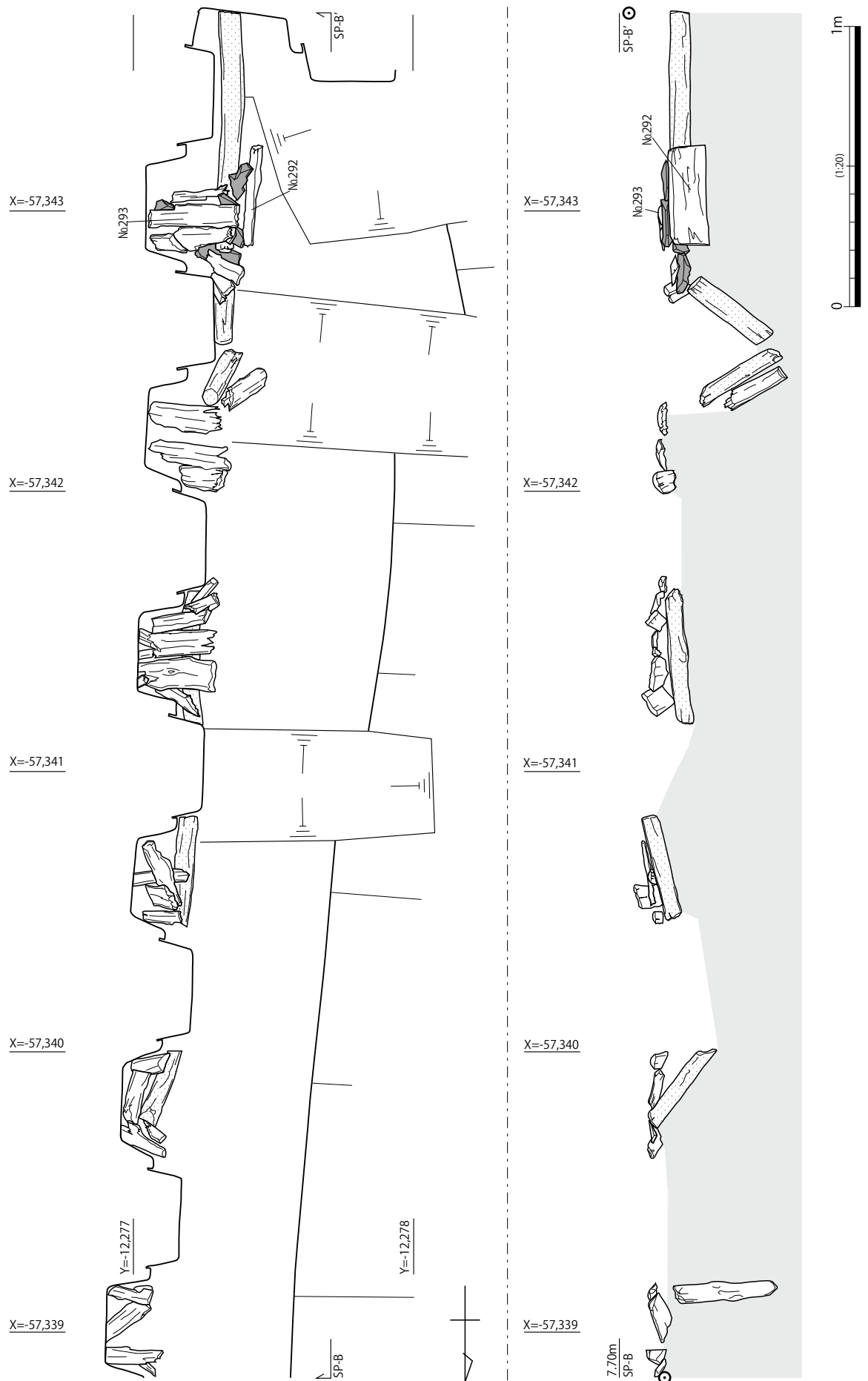
第IV-25図 4-4区 8溝南側 遺物出土状況



第IV-26図 4-4区 35盛土 平・断面図

9溝は、44区東側で検出した。検出標高は約7.4mである。北側では東肩が調査区外に広がる。幅は約3.2m、検出面からの深さは約0.8mである。底面標高は6.6mで、8溝よりも0.5m高い。粘土～シルトを主体とする土層〔第IV-6図11～15層〕が堆積しており、比較的静穏な埋没環境が想定できる。二段階の埋没過程が認められ、土壌化の進んだ10層を挟在する。9層の除去面では、偶蹄目の蹄跡を確認した。

また、調査中に溝の中央付近で盛土遺構(35盛土)を確認した〔第IV-26図、図版9-2・3〕。35盛土は、直径1.5～1.6mで、円形を呈する。盛土上部を誤って掘削してしまい、記録できなかったが、9溝検出面よりわずかに下がった所で円形のプランを確認したので、0.3～0.4mほどの高さで構築



第IV-27図 4-4区 9溝木製構造物 平・断面図（暗色のアミカケは襖）

されていた可能性がある。盛土は、明緑灰色の粗砂混じり粘土で、第4a～5a'層に近似する。9溝の下層に堆積するシルト～粘土層の上部に盛り上げられており、9溝の機能時（開口時）に造成された遺構と考えられるが、遺物の出土もなく、性格は不明である。

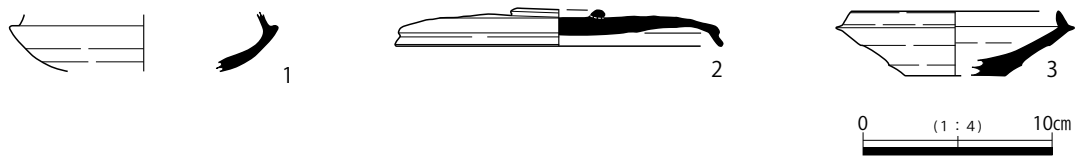
また9溝の東肩付近では、木製構造物を確認した〔第IV-27図、図版10-1・2〕。木製構造物は、直径7～8cmほどの芯持の丸太材を4m以上にわたって南北に設置し、その上部に丸太材を半裁もしくは縦割りして板状にしたものを敷き並べている。南端付近にはこぶし大の角礫が敷かれていた。調査区東端での検出であり、遺構の全容は確認できない。規模や構造、性格自体不明であるが、検出されている範囲においては、9溝に平行している。9溝からは、木製品〔第IV-31図9〕と弥生土器の底部が出土した。

平成21年度に設定した3C-10hトレンチ（T02）では、調査区東側で、南北方向に延びる溝の西肩が確認されている。溝は第3-1a層下面で検出されており、検出標高約7.4m、底面標高6.5mである。やや東によるが、北に延びる9溝の延長に位置しているとみてよい。

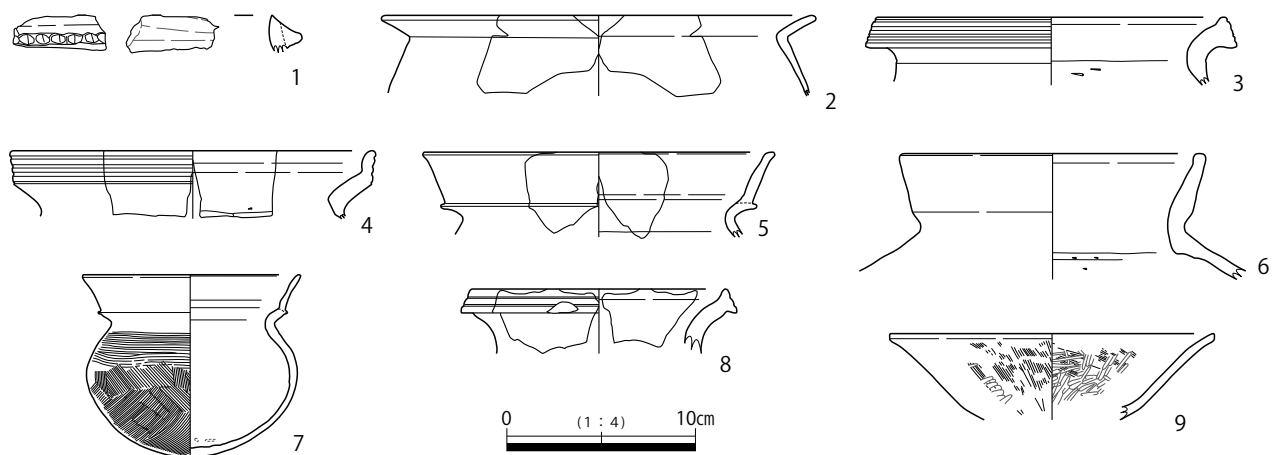
さらに平成20年度調査においては、3区で「溝10」とされた古墳時代前期の溝が検出されている。検出標高7.2m、底面標高6.3m、幅3.2mと、規模が9溝と類似する上に、3C-10hトレンチを經由して直線状に位置する。点的な調査成果をつなぐと、これらの溝が9溝と一連の関係にある可能性は高い〔第V図〕。「溝9」や「溝10」は、「黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト」とされる「VI層」の下面で検出されている。相対的に暗色を呈する「VI層」は、本調査で第3-1-2a層と呼称する有機物を多く含む土層に対応する可能性が高い。「溝9」「溝10」は、8溝や9溝と検出層位を同じくすると推定される。

遺物は、第3-1-2a層から第IV-28図に示した土器、8溝から第IV-29図に示した土器や、第IV-30・31図に示した木製品、9溝から第IV-31図に示した木製品が出土した。

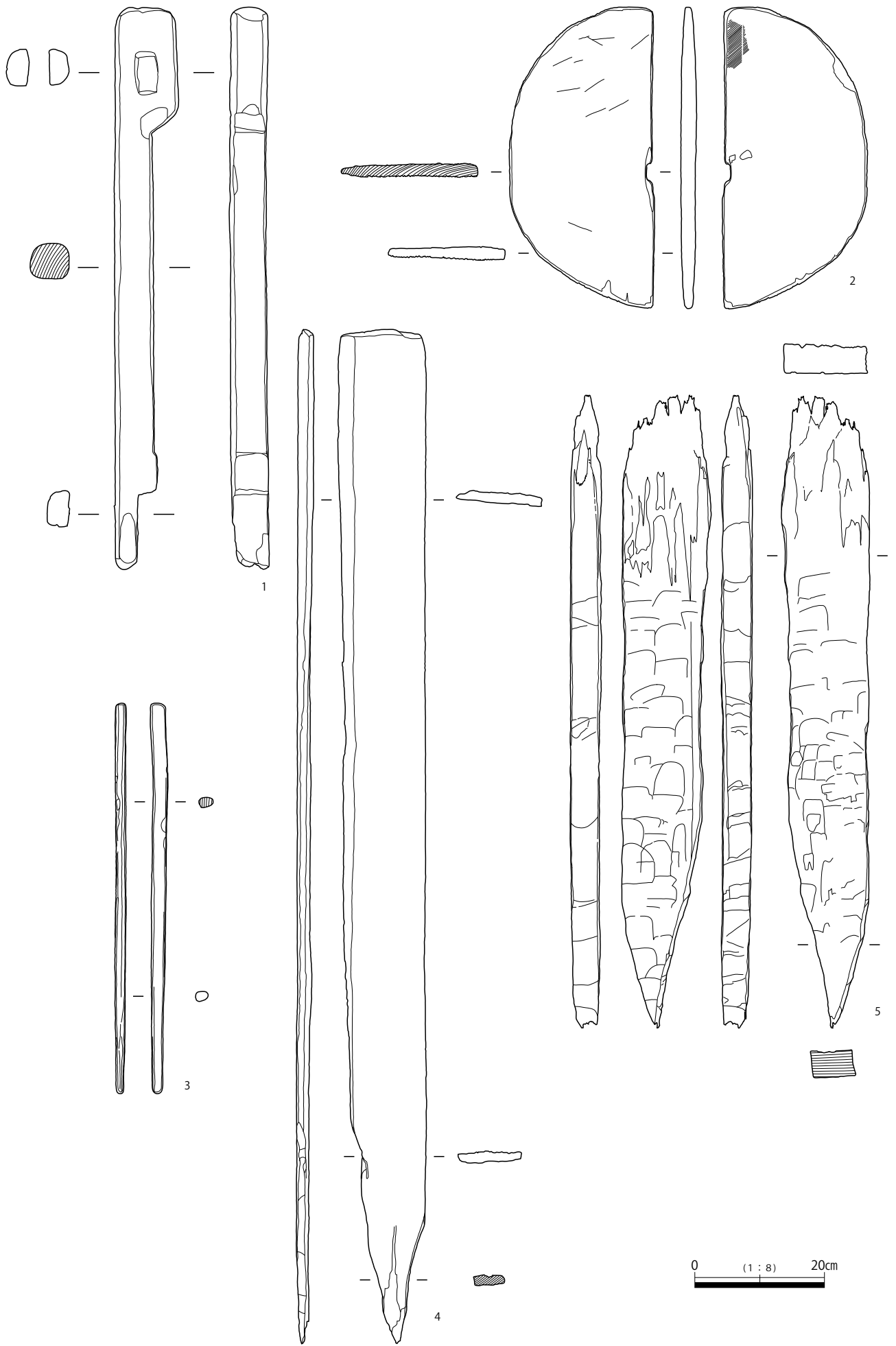
3-1-2a層からは、須恵器が3点出土している〔第IV-28図〕。8・9溝埋没後の上部にある第3-1-2a



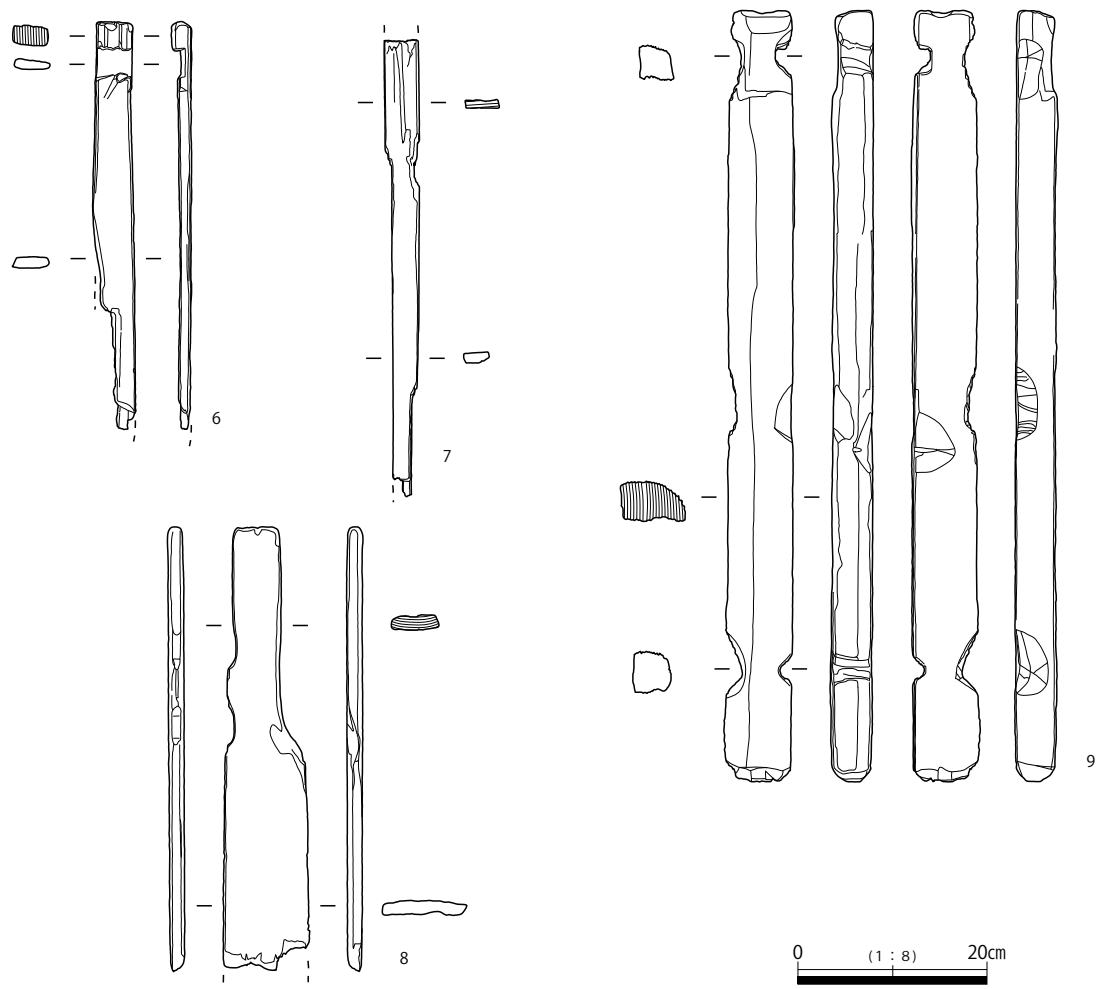
第IV-28図 第3-1-2a層出土の土器



第IV-29図 8溝出土の土器



第IV-30図 第3-1-2a層および8溝出土の木製品（1は3-1-2a層、2～5は8溝）



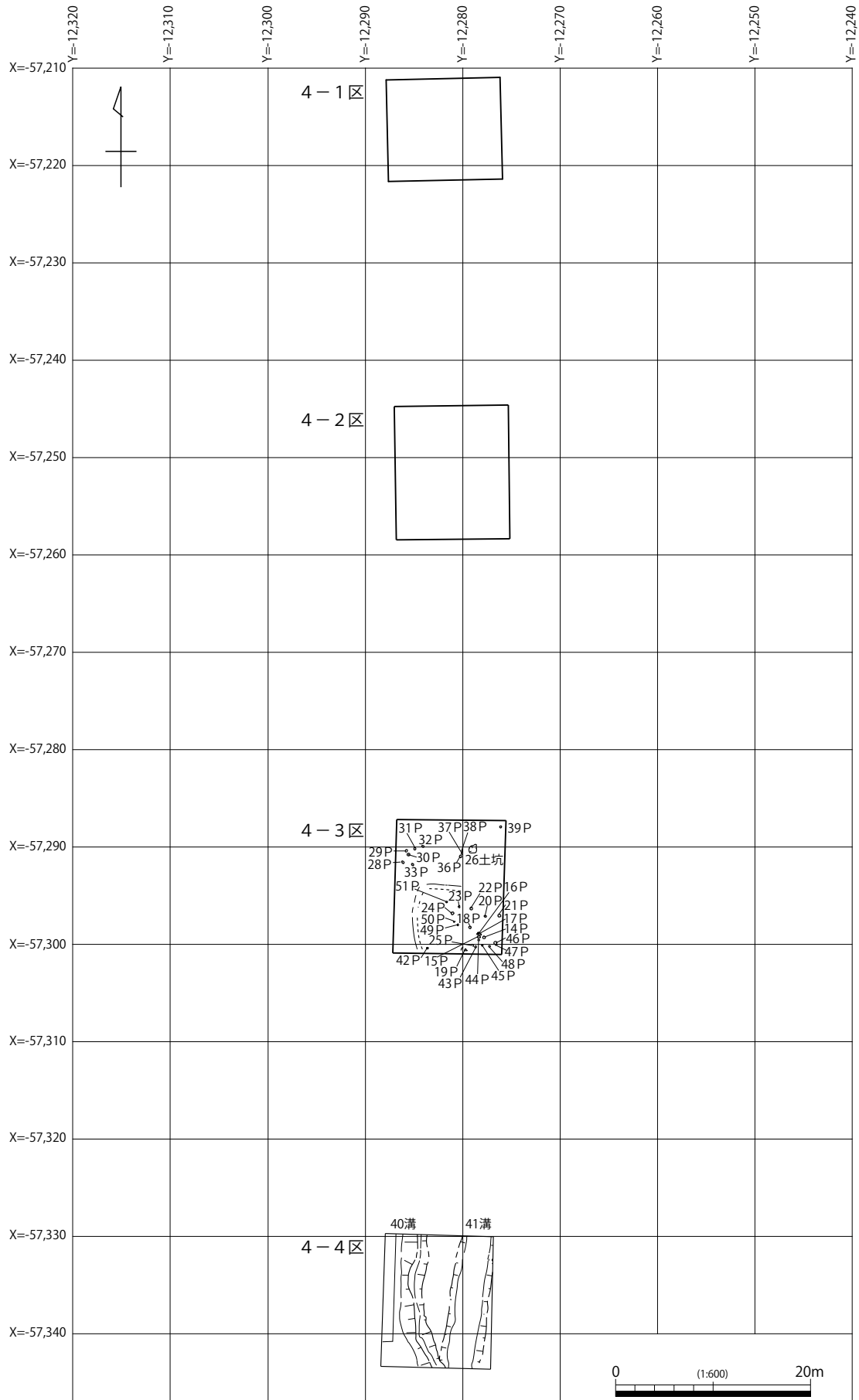
第IV-31 図 8溝および9溝出土の木製品 (6～8は8溝、9は9溝)

層が、古墳時代から飛鳥時代にかけての帰属時期を持つ可能性を示す。ただし、上層の掘り残しが存在した可能性があることを留意しておきたい。

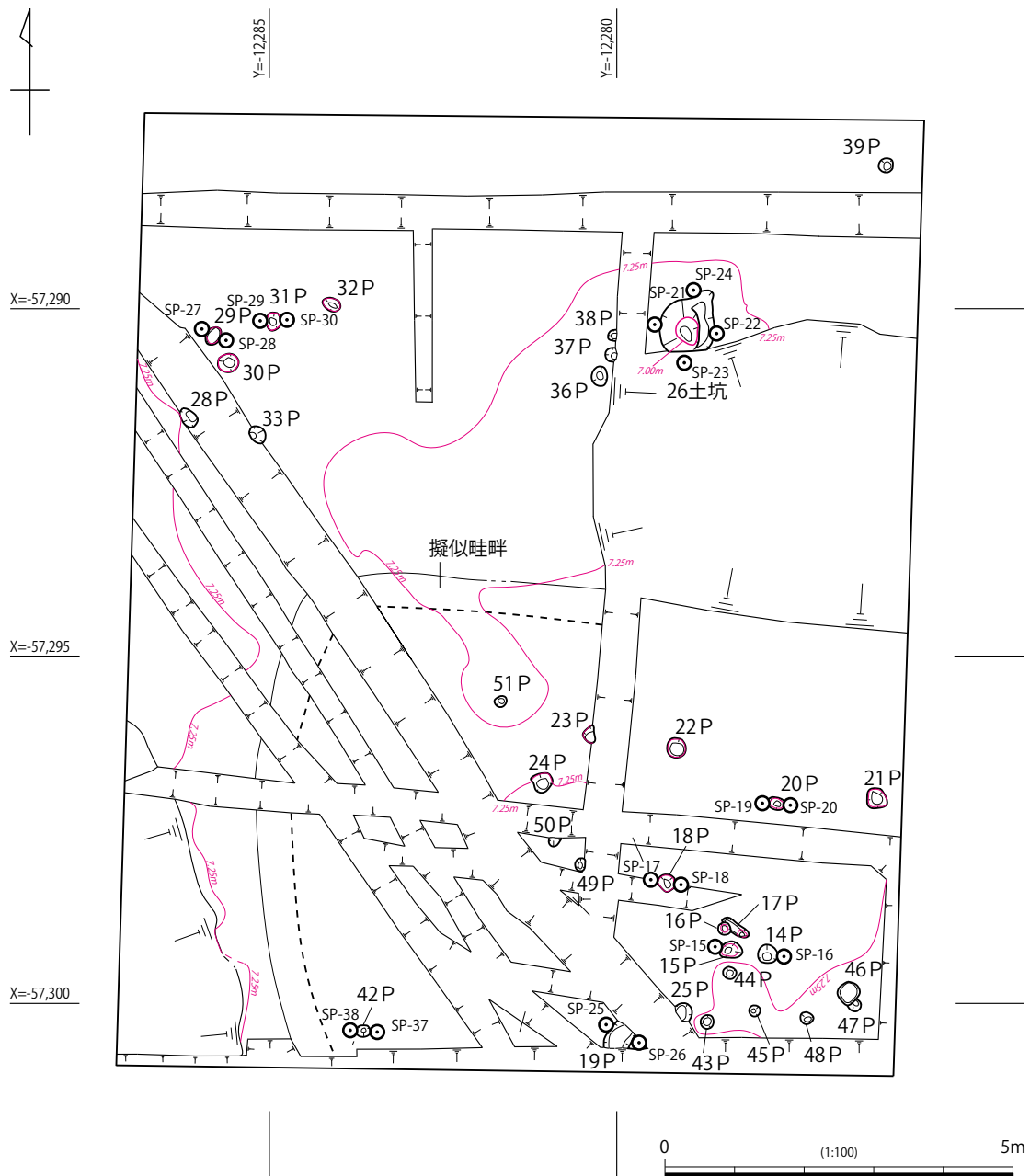
8溝から出土している主な土器は、弥生時代中期～古墳時代前期のものである〔第IV-29図〕。8溝の直下には、下面に帰属する40・41・54溝が存在するため、弥生土器が混入していると理解できる〔2～4・8〕。したがって溝の時期を示すのは、古墳時代前期の土器であると考えたい〔5～7・9〕。また、突帯文土器の深鉢の口縁が1点出土している〔1〕。鳥取市教育委員会により実施された試掘調査では、4-1区の西方約30mに設定された第6トレンチから、同様の突帯文土器や遠賀川式土器が出土している〔鳥取市2009〕。また、本高弓ノ木遺跡5区で検出された710溝からも同時期の土器が多数出土している。710溝は、5区の北半部で釣山沿いを北流することが確認されており、4-1区の直下に存在する可能性が高い(第V図)。8溝から出土した突帯文土器は、こうした遺構からの混入品と考えられよう。

木製品のうち、第IV-30図1は第3-1-2a層から出土した。建築部材の可能性はある。同図2～5、第IV-31図6～8は8溝から出土した。2は曲物の底板、3は棒状製品、4・5は矢板、6は建築部材で垂木、7と8は板状の製品で建築部材の一部とみられる。また、第IV-31図9は9溝から出土したもので、両端を欠き込んでいる。

第IV章 調査成果



第IV -32 図 第 3-1-2a 層下面 下部の遺構群 平面図



第IV -33 図 4-3区 第3-1-2a層下面 下部の遺構群 平面図

(2) 下部の遺構と遺物

4-4 区の溝と、4-3 区のピット群を下部の遺構とした〔第IV -32 図〕。本高弓ノ木遺跡5 区の第3-1-3a 層下面に帰属する遺構群と考え得るが、4 区では、第3-1-2a 層の形成により、下部の遺構の上部にあつたはずの第3-1-3a 層が失われ、その結果、第3-1-2a 層下面において、上部の遺構と混在する形で検出されることになったと考える。

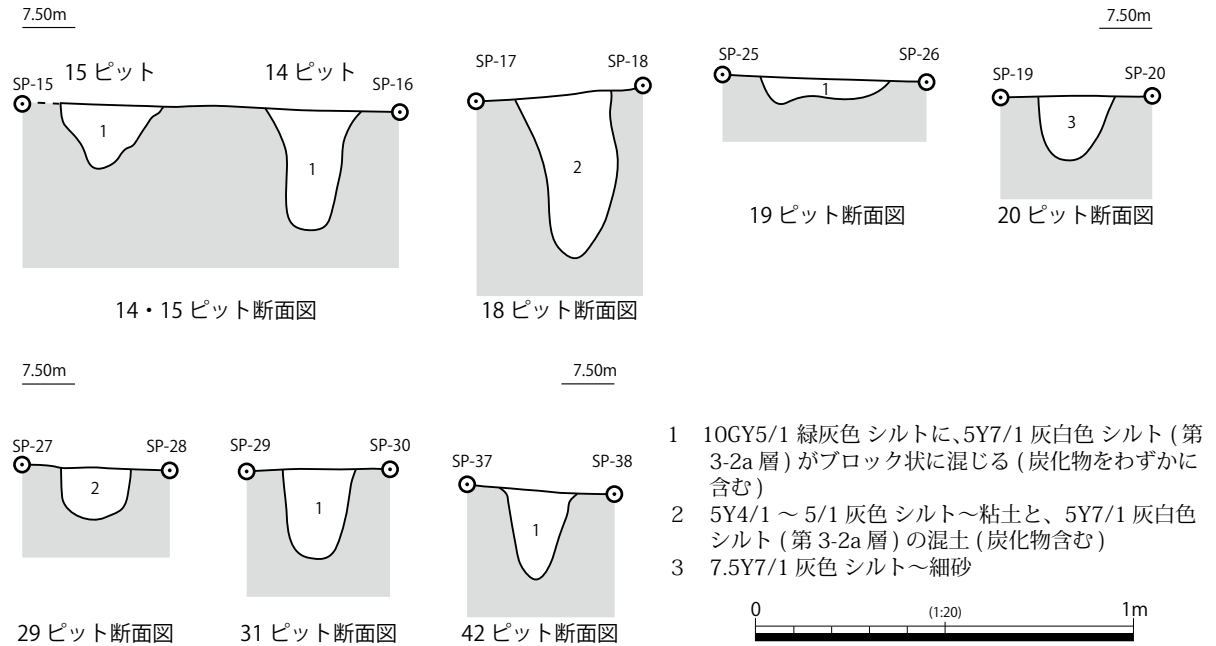
4-3 区では、ピット群、土坑、擬似畦畔を検出した〔第IV -33 図、図版 10-3、11-1～3、12-1～3〕。ピット群は調査区内の3ヶ所に集中している。南側のピット集中部が、L 字状に曲がる擬似畦畔に囲まれた段差上部の範囲に収まっている点が気になるが、土壤層下面で検出した両遺構の関係については明らかにし得ない。ピットの埋土は、3種に大別できる〔第IV -34 図〕。ただし、一定の範囲に、

第IV章 調査成果

土色1の埋土を持つピット：14～17、19、21、25、28、30～33、36～38、42～47

土色2の埋土を持つピット：18、22～24、29、39

土色3の埋土を持つピット：20



第IV -34 図 4-3 区 ピット群 断面図

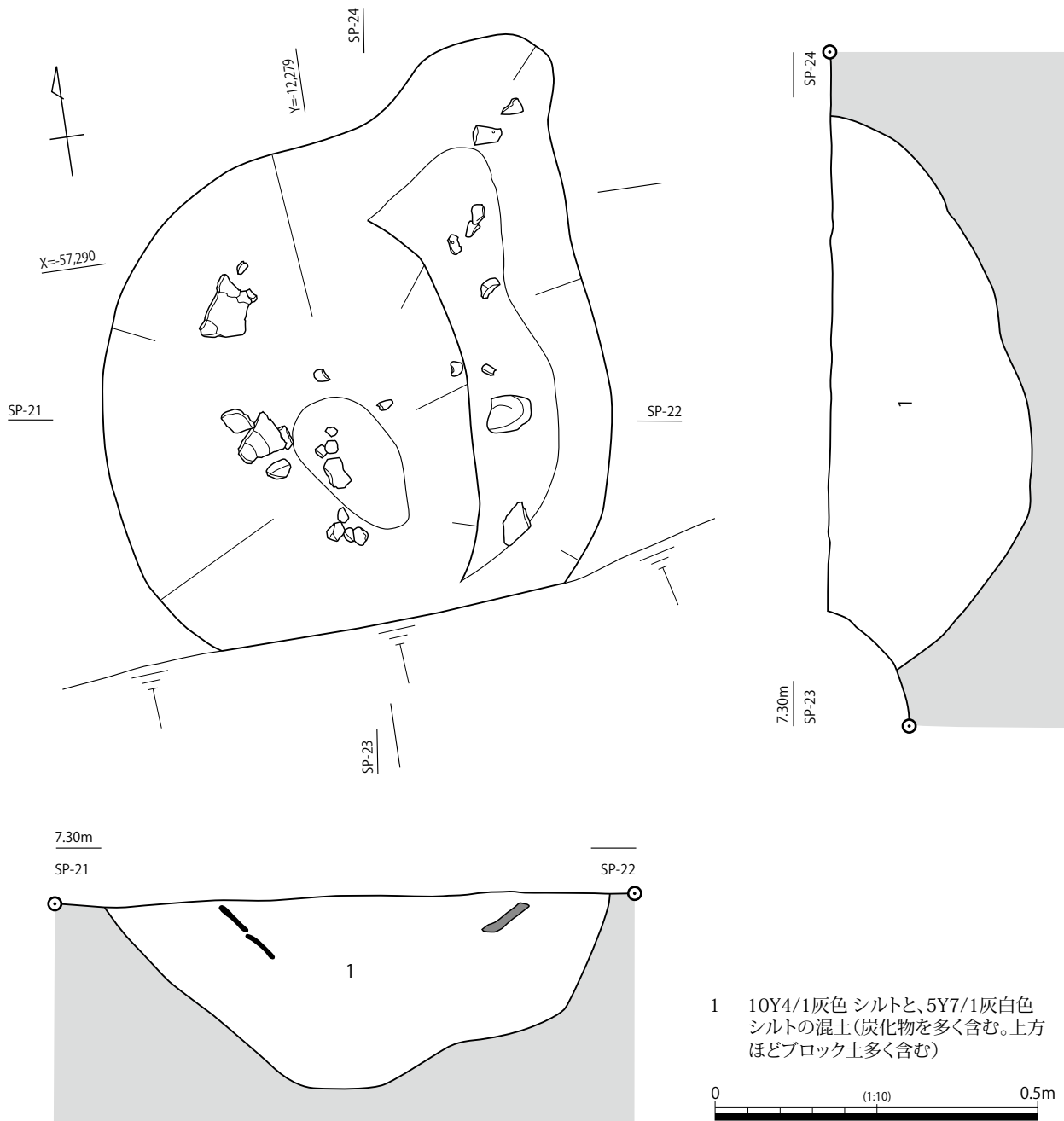
特定の埋土を持つピットが偏在する状況は認められない。また、各ピットには、規則的な配置を確認できなかった。

26 土坑は調査区北東で検出された〔第IV -33・35 図、図版 12-3〕。平面形は北東側に張り出しを持つ不整な円形をしている。南端は攪乱によって失われている。内部には炭化物を多く含み、被熱により破損した角礫もあった。複数個体の土器片が出土したが、いずれも胴部の小片ばかりで、図化できるものはなかった。調整などから、弥生時代後期頃のものと考えられる。

44 区では、8・9 溝の下部で、40・41 溝を検出した〔第IV -36 図、図版 13-1〕。両溝はほぼ南北方向に延び、直上にあった8・9 溝とよく似ているが、規模が大きい。調査区南側では、40 溝が41 溝の上層を掘り込んでいる状況を確認した〔第IV -37 図〕。よって、両溝には前後関係が認められる。

40 溝は、44 区の西側にある。西肩は調査区外に広がる。ほぼ南北方向に延びるが、南側はやや西に傾き、X=-57,337 ライン付近で緩く曲がり北方向に向かう。幅は6.0 m以上、検出面からの深さは約1.3~1.4 mを測る。底面標高は5.7 ~ 6.0 mで、底面には部分的に人の足跡が検出された。下層には粘土～シルト層〔第IV -6 図 24 ~ 28 層〕が堆積しているが、上層には炭化物やブロック土が含まれる。40 溝埋没後、8 溝が機能している段階で、部分的に埋め戻された可能性や、浚渫により生じた排土による盛土などが考えられる。

溝内には遺物が多く含まれていた〔第IV -38 図〕。また、上部の8 溝同様に木質遺物も多く出土している。調査区の南西端では、直径約60cm 種の木材（ムクノキ）が出土した〔第IV -36・39 図、図版 15-2、16-1〕。第IV -37 図 17 層で検出したので、40 溝出土遺物として取り上げたが、40 溝の直下にある54 溝内に埋没していたものが、洗掘された結果、40 溝内に露出したことも考えられる。この木材の東側には、イネ科植物が集中する場所が確認された。人為的に集積もしくは敷設された可能性が



第IV -35 図 4-3 区 26 土坑 平・断面図

ある〔第IV -36・40 図〕。

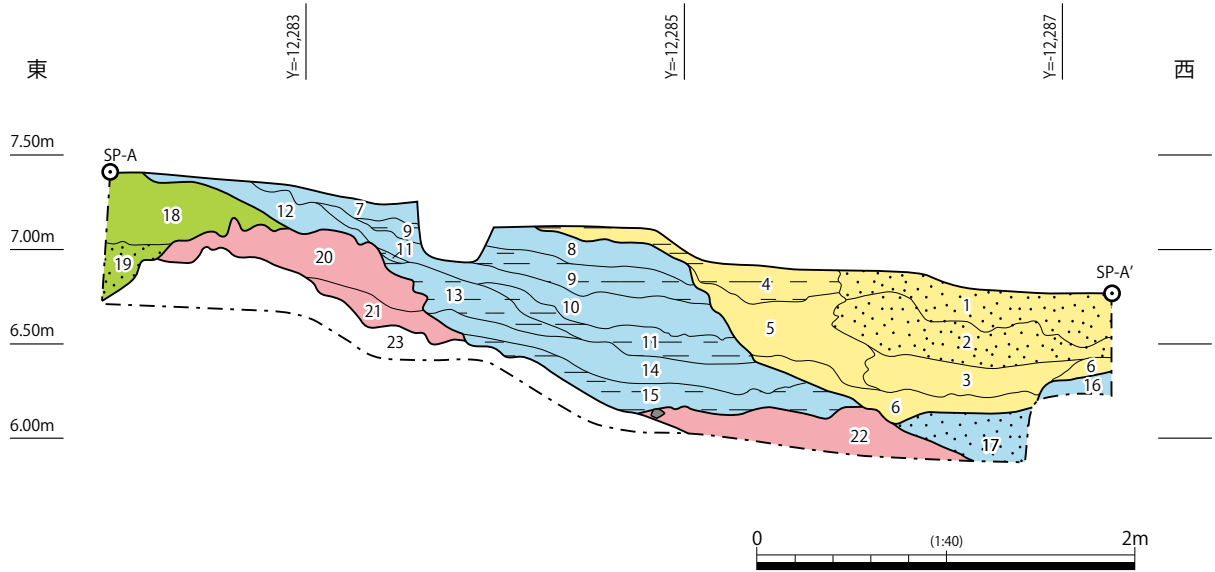
なお、このムクノキは剥り抜かれ、断面形は浅い皿状を呈する〔第IV -45 図〕。ほぼ東西方向に正置する格好で出土しているが、西側は調査区外に延びているため、全長は不明である。また、木材東側の40溝の法面には、イネ科植物が集中する場所があった。人為的に集積もしくは敷設された可能性がある〔第IV -40 図・図版 14-1〕。現地調査時には、この木材を舟材の可能性のあるものとして取り扱った。(東京都中里遺跡・神奈川県伝福寺遺跡・千葉県栗山川流域遺跡などにムクノキを用いた丸木舟の出土例あり(縄文時代中期))。一方、当調査区(44区)の南方に隣接する5区の北端では四隅突出型墳丘墓の可能性も考えられる700盛土が検出されている(鳥取県教育委員会 2013『本高弓ノ木遺跡(5区)I』)。周辺が墓域として利用されていたならば、割竹形木棺の可能性もあるかも



第IV -36 図 4-4 区 第 3-1-2a 層下面 下部の遺構群 平面図

しれない。また、大阪府四条畷市の雁屋遺跡では、1号方形周溝墓の周溝から長さ135cmのモミ材が出土した。鳥形木製品や棒材が近接して出土したことから、死者を墓に運ぶための担架ではないかと想定されている（四条畷市立歴史民俗資料館 2011『第26回特別展 魂はどこへ—雁屋遺跡の方形周溝墓を中心に—』）。40溝から出土したムクノキを繰り抜いた木材の性格を考える上で、参考としたい。他に木製品としては、板材などが出土している〔第IV-44図〕

40溝からは、弥生時代中期後半から古墳時代前期にいたる土器が出土している〔第IV-38・41図〕。新しい時期の遺物については、上層の8溝から出土している土器と近似しており、調査時の混入品と理解したい。また、8溝と同様に、縄文時代晩期後葉の土器片が混入していた。1は突帯文土器の浅鉢、2は深鉢である。口縁部の突帯に浅い刻目が施されている。3～7は弥生時代中期中葉の甕、8

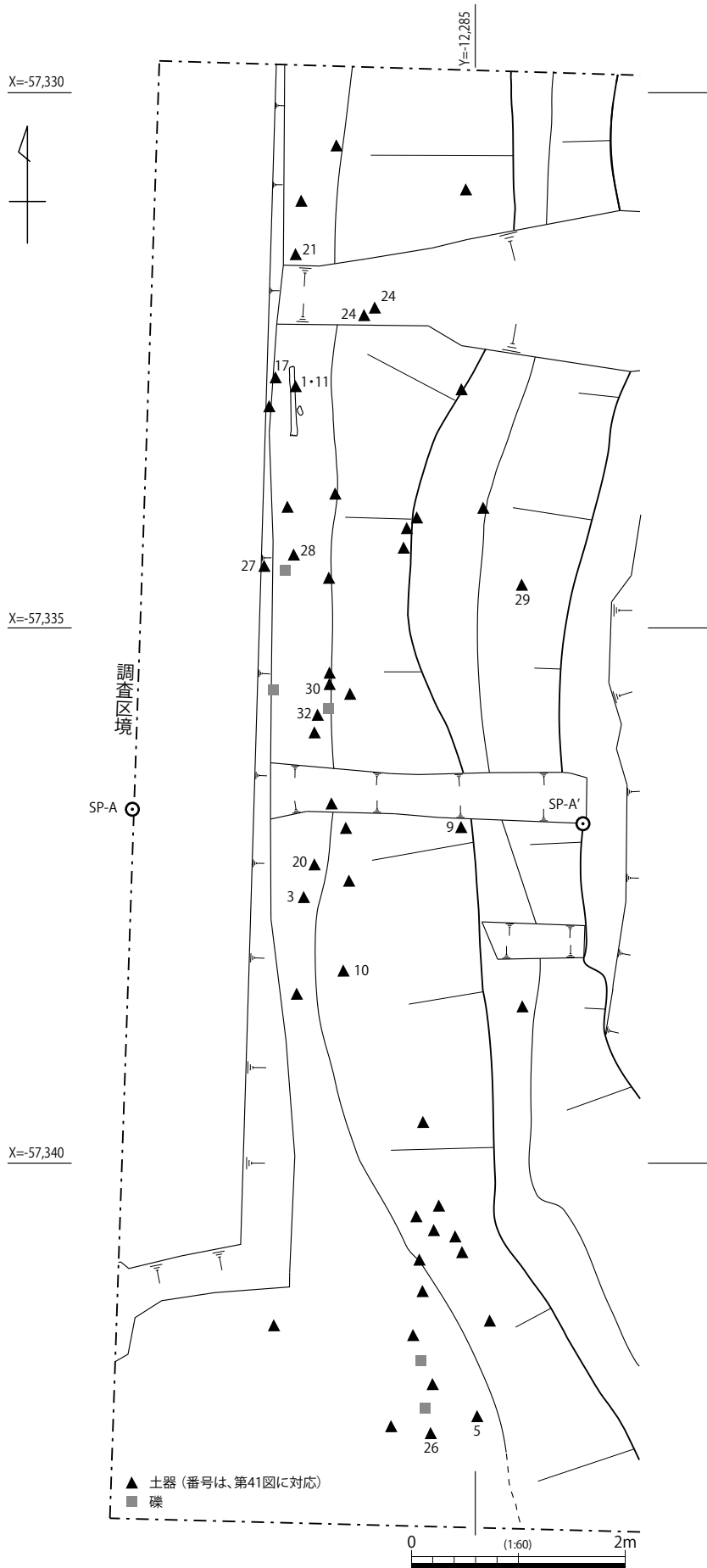


- 1 10GY5/1 緑灰色 シルトと、2.5GY8/1 灰白色 細砂の互層
- 2 5GY5/1 オリーブ灰色 シルトと、5Y8/1～8/2 灰白色 細砂～粗砂の互層
- 3 2.5GY5/1 オリーブ灰色 粘土～粗砂 (炭化物を多く含む)
- 4 5GY6/1 オリーブ灰色～10G5/1 緑灰色 (植物遺体を層状に含む。上方暗色化)
- 5 2.5GY6/1～5/1 オリーブ灰色 シルト～粘土 (植物遺体を多く含む)
- 6 7.5GY5/1 緑灰色 粗砂混じりシルト
- 7 5BG4/1 暗青灰色 粗砂混じり粘土
- 8 10G6/1 緑灰色 粘土～シルト (炭化物・植物遺体含む)
- 9 5BG6/1 青灰色 シルト～粘土
(炭化物・植物遺体を層状に含む。7.5GY8/1 明緑灰色 細砂が底面に堆積する)
- 10 2.5GY5/1 オリーブ灰色 シルト
(炭化物・植物遺体を含む。ブロック土をわずかに含む。盛土か?層底面で被覆材を確認)
- 11 2.5GY5/1 オリーブ灰色 (炭化物・植物遺体を層状に含む)
- 12 5Y6/2灰オリーブ色 粗砂～粘土
- 13 5GY5/1 オリーブ灰色 シルト～粘土 (炭化物・植物遺体を層状に含む)
- 14 10GY7/1 明緑灰色 粘土 (15との層界に弥生中期末頃の土器)
- 15 7.5GY5/1 緑灰色 粘土 (炭化物・植物遺体を層状に含む)
- 16 5Y6/2 灰オリーブ色～10G5/1 緑灰色 粗砂～シルト (上方粗粒化・明色化)
- 17 2.5GY8/1 灰白色 粗砂 (ラミナ顕著)
- 18 5Y6/2 灰オリーブ色～10G5/1 緑灰色 粗砂～シルト (上方粗粒化・明色化)
- 19 10GY8/1 明緑灰色 細砂と、5BG5/1 青灰色 シルトの互層
- 20 10BG5/1～6/1 青灰色 粘土に、5G7/1 明緑灰色 粘土がブロック状に混じる
- 21 5BG4/1 暗青灰色 粗砂～粘土 (ラミナみえない。炭化物をわずかに含む)
- 22 10G4/1 暗緑灰色 粗砂～シルトが混じる (攪拌は弱く、部分的にラミナ有り)
- 23 5BG7/1 明青灰色 粘土～シルト

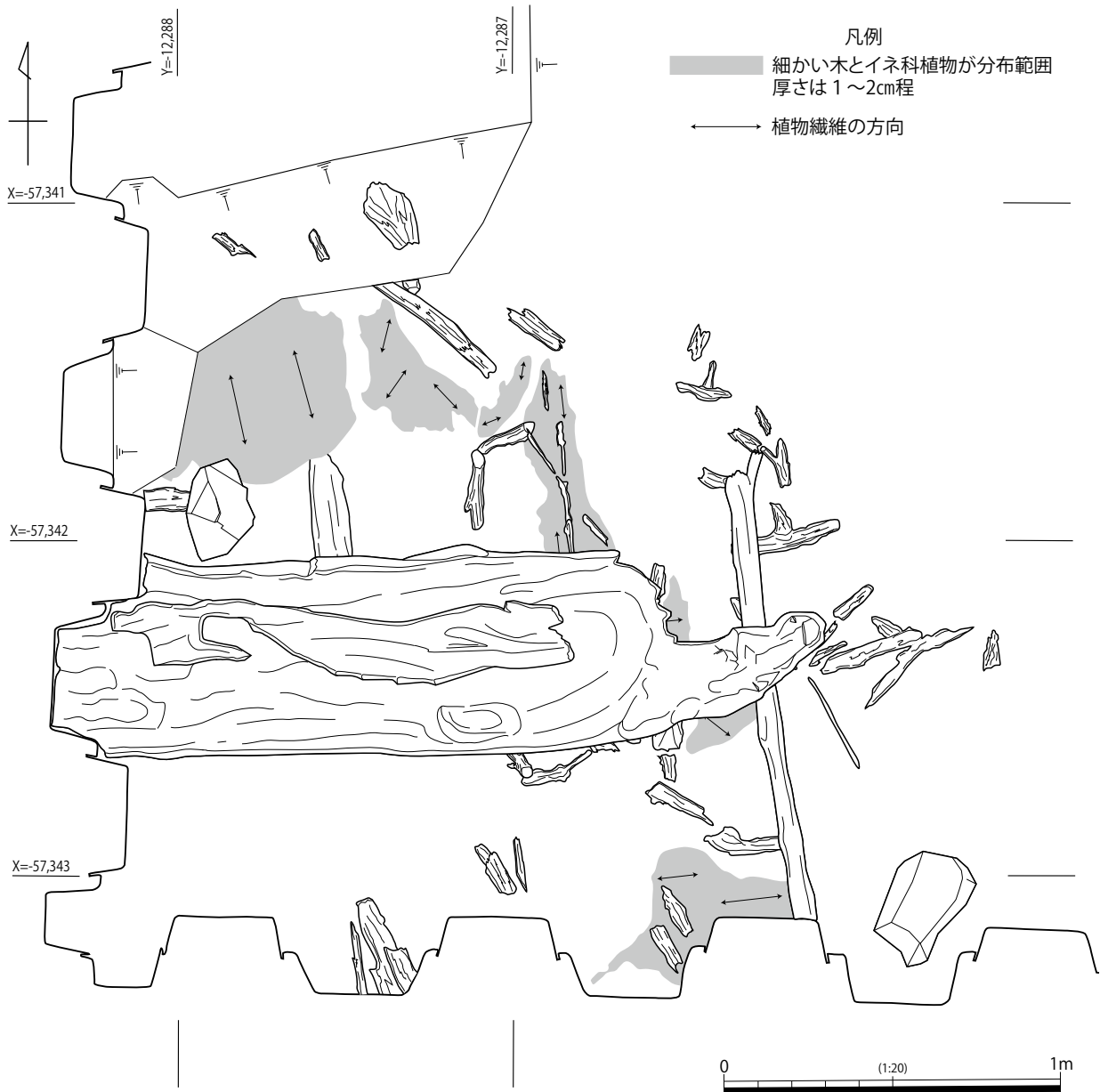
第IV -37 図 4-4 区 第3-1-2a 層下面 南壁断面図

～ 15 は弥生時代中期後葉から後期前葉の甕、16・17 は弥生時代終末期から古墳時代前期前半の甕である。18～21 は弥生土器の壺である。18 は時期不明、19～21 は中期後葉のものである。22 は蓋である。また、23～33 は弥生時代中期中葉から後期の甕や壺の底部である。この他に石庖丁や敲石が最下層から出土している〔第IV -43 図 1・2〕

一方、41 溝は、4-4 区東側にあり、ほぼ南北方向に延びる。幅は約 8.0 m、検出面からの深さは約 0.9 m である。底面標高は約 6.5～6.6 m で、40 溝より高い。断面形は整った逆台形を呈しており、人為的に掘削されたものと考えられる〔第IV -6 図〕。下層は粗砂を主体とした砂礫〔第IV -6 図 32～37 層〕、上層は淘汰が悪く、炭化物やブロック土を含む〔第IV -6 図 29～31 層〕。41 溝埋没後、9 溝の機能時に、肩部の土壤化が進んだ可能性、部分的に埋め戻された可能性、浚渫された排土による盛土など



第IV -38 図 4-4 区 40 溝 平面図・遺物出土状況



第IV -39 図 4-4 区 40 溝 木材 (ムクノキ) 出土状況 平面図

が考えられる。

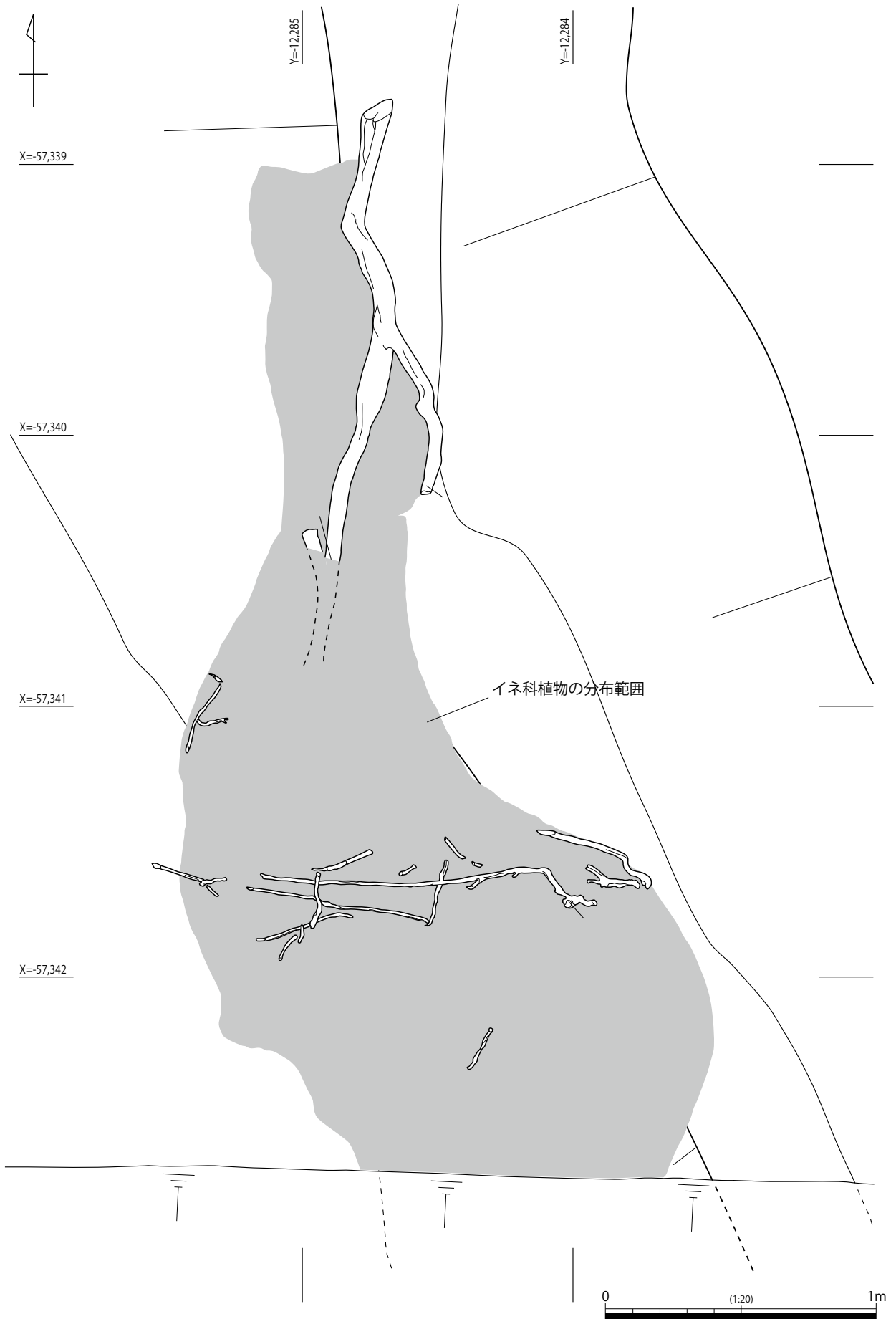
41 溝からは、土器の小片が出土したが、実測できるものはなかった。

第5項 第3-2a層下面の遺構と遺物

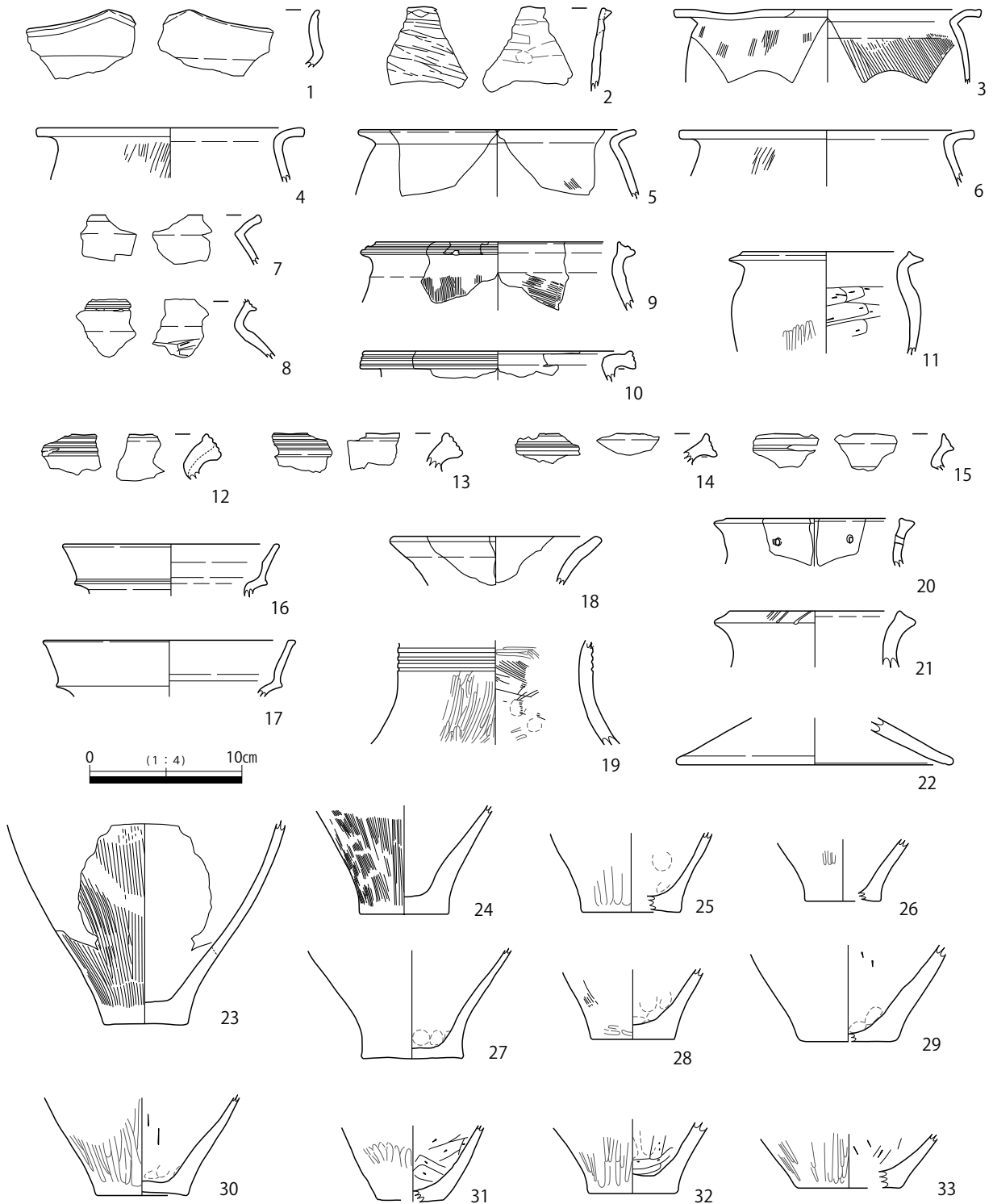
4-1 区、4-2 区、4-4 区で遺構を検出した〔第IV -46 図〕。

4-1 区では、南東から北西方向へ下る斜面地形を確認し、傾斜に平行するように3条の溝（10～12 溝）を検出した〔第IV -47 図、図版 16-2、17-1〕。10・12 溝は、深さ 10cm 未満と浅く、埋土は直下の層がブロック状に含まれるものの、第3-2a 層に近似する〔第IV -48 図2層〕。底面には凹凸があり、溝として開口していたというよりは、耕作の痕跡なのかもしれない。なお、12 溝からは弥生時代中期の甕口縁部が1点出土した〔第IV -53 図〕。

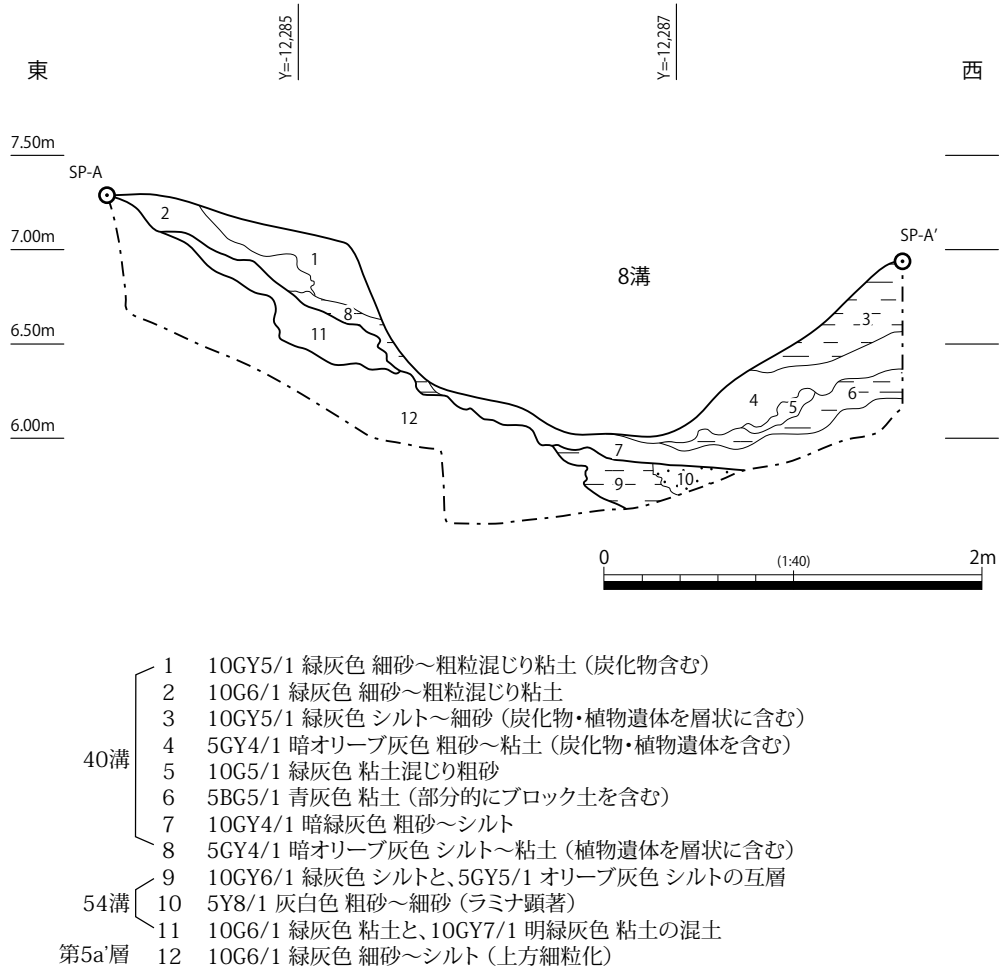
一方、11 溝は 10 溝の一部を掘削している。幅 1.0 m、深さ 0.4～0.5 m を測り、埋土の下部には、



第IV -40 図 4-4 区 40 溝 被覆材の検出範囲



第IV -41 図 40 溝出土の土器



第IV -42図 4-4区 40・50溝 断面図

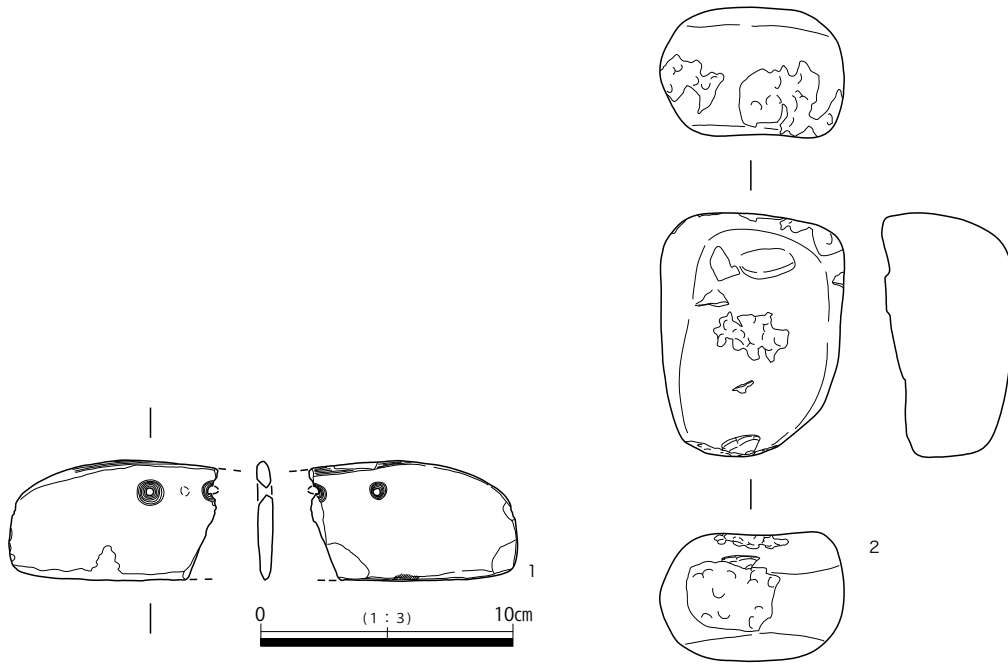
滞水を示すような堆積も確認できた〔第IV -48図 4層〕。埋土の上部からは、弥生時代中期の土器片が数点出土している。頸部に凹線文を持ち、口縁端部に3条の沈線と刺突文を施した壺〔第IV -52図〕がある。

4-2区では、ピット、土坑、溝を検出した〔第IV -49・50図、図版17-2・3〕。6ピットは13ピットを切って掘削されている。13ピットの底からは、長軸約15cmの角礫が出土した〔第IV -50図、図版17-2〕。ピットの底面から沈み込んだように出土している。その要因を上部構造物の荷重に求めるならば、軟弱地盤における柱の根石などの性格が考えられよう。7溝は南北方向に延びる浅い小溝で〔第IV -50図〕、遺物は出土していない。

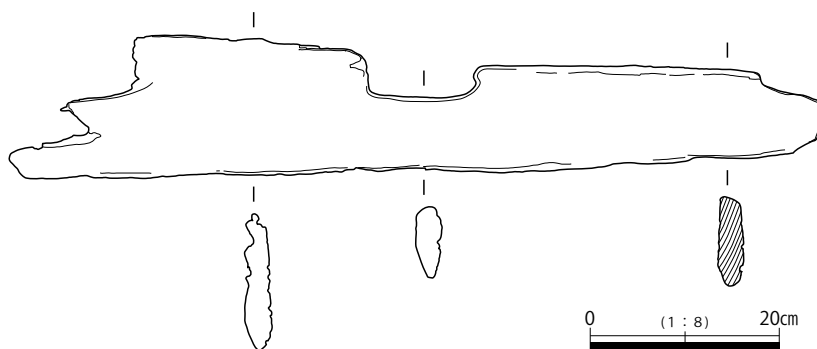
4-4区では、54溝と55土坑を検出した〔第IV -51・55図〕。54溝は、40溝の直下で検出した溝だが、掘削作業の安全が確保できず、完掘はできなかった。また、確実に54溝に伴う遺物はなく、時期などの詳細は不明である。

55土坑は、4-4区東端にある。遺構の東側は調査区外となり、西側は41溝に切られている。そのため土坑としたものの、実際には溝状の遺構なのかもしれない。グライ化した粘土がレンズ状に堆積していた〔第IV -55図、図版18-1〕。埋土最下層から弥生土器の小片が出土した。

なお、第3-2a層からは弥生土器の底部片が出土している〔第IV -54図〕。



第IV-43図 40溝出土の石器



第IV-44図 40溝出土の木製品

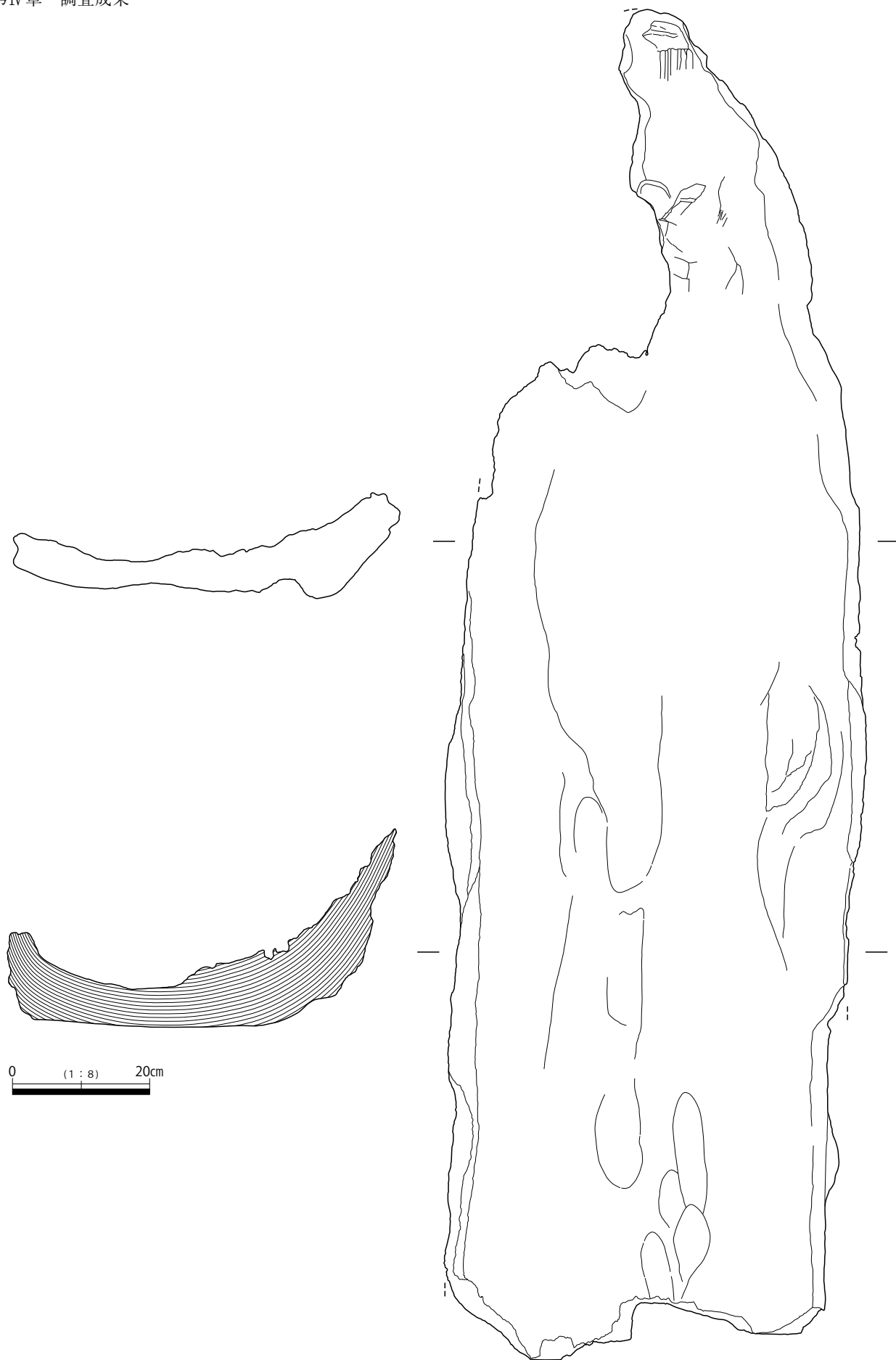
第6項 第4a層下面の遺構と遺物

4-3区で52溝を検出した〔第IV-56図〕。他の調査区では遺構を確認することはできなかった。

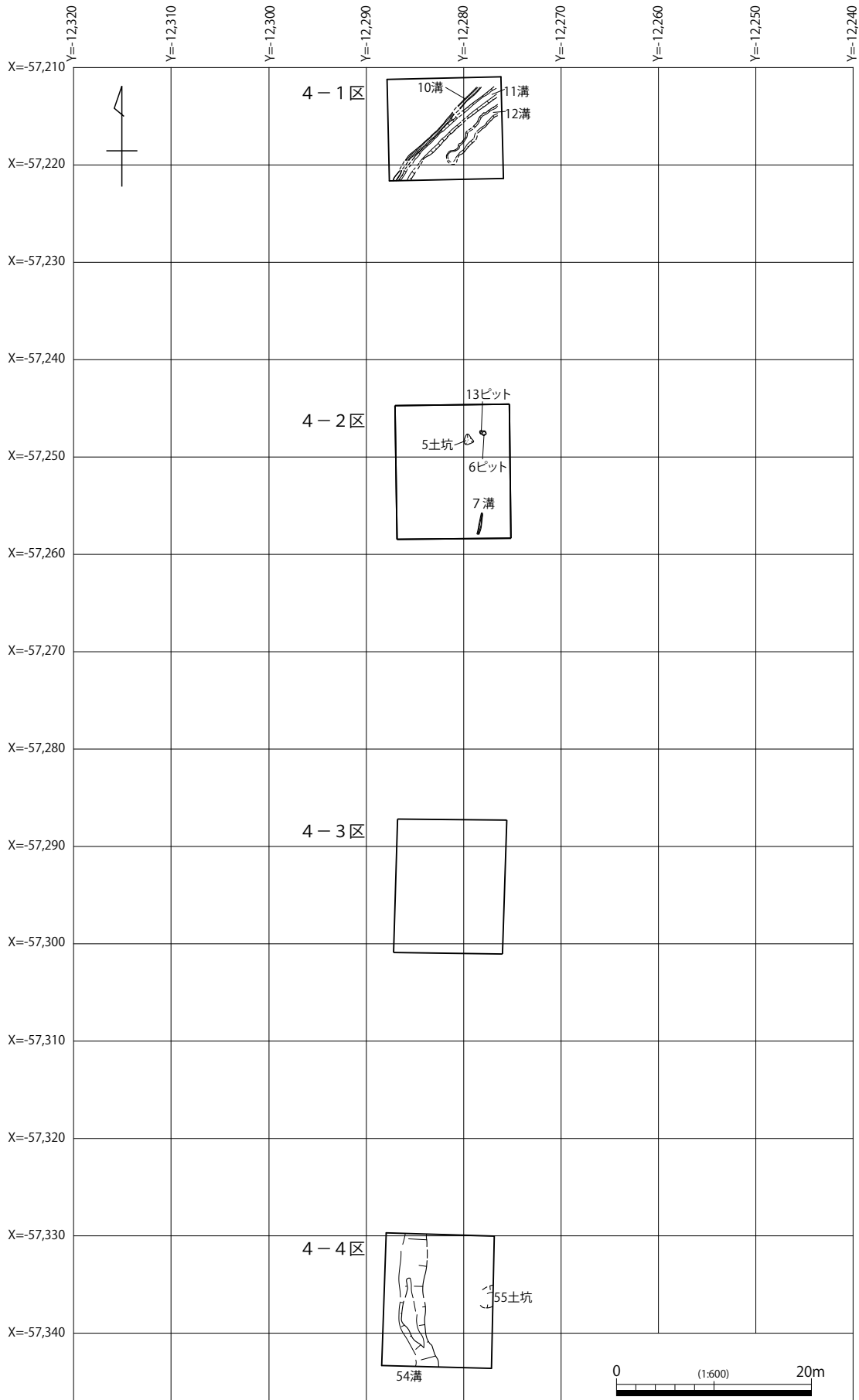
52溝は、西側が調査区外にあって、全形を正確に知ることができなかったが、調査区内に確認できる形状から溝とした〔第IV-57図〕。第4b層に近似する明緑灰色のシルト層が遺構底面に堆積しており、自然に埋没した状況を示すものと考えた〔第IV-58図〕。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。また、第4a層からも遺物は出土していない。

第7項 第5a'層下面の遺構と遺物

調査区の四方に打設した鋼矢板の安全掘削深度に達するため、各調査区を全面調査することができず、それぞれの調査区にトレンチを設定し、部分的な掘り下げを行い、遺物の有無や下層の堆積状況を確認した〔第IV-59図〕。



第IV -45 図 40 溝出土の木材



第IV -46 図 第3-2a層下面 平面図

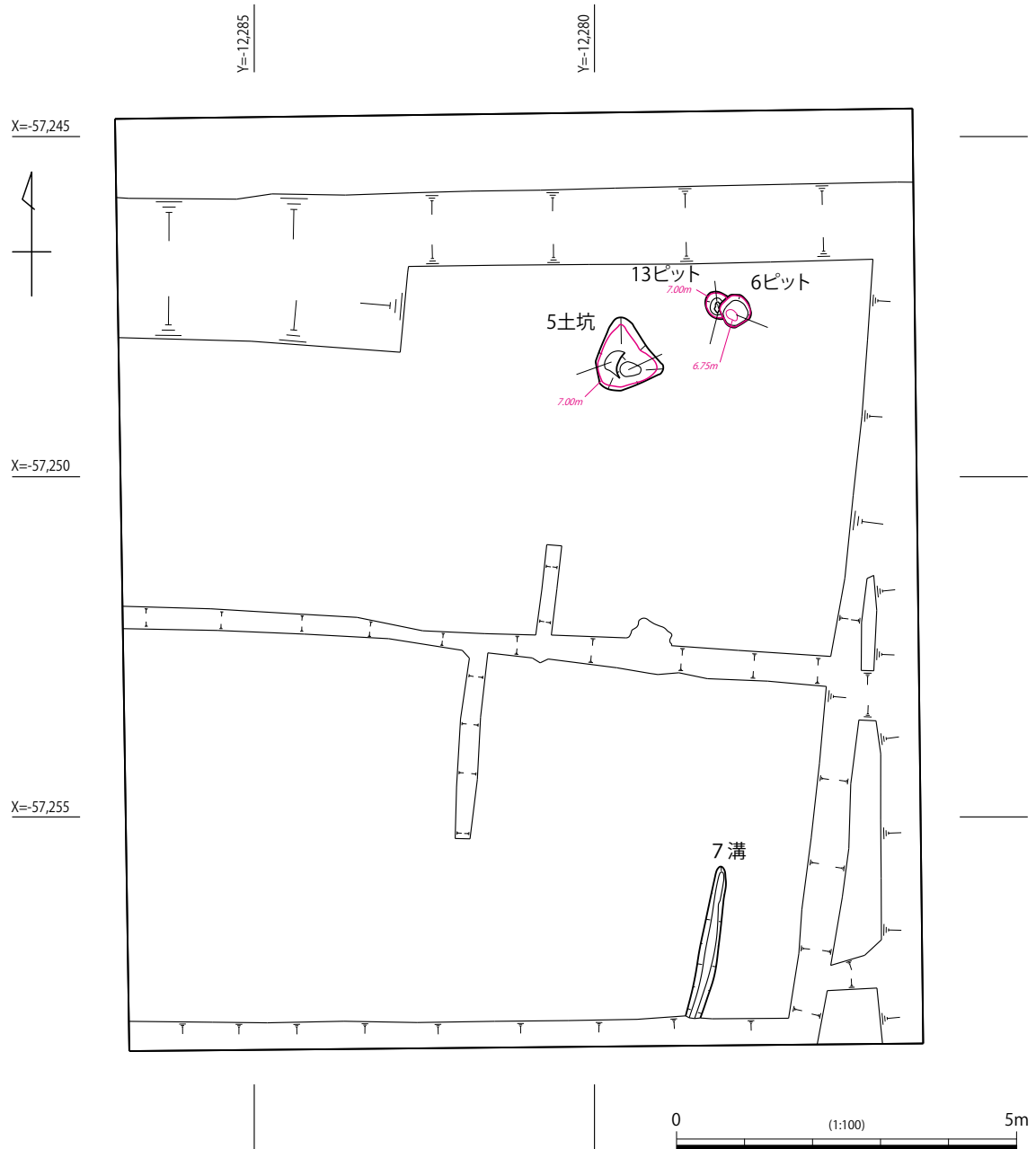


第IV-47図 4-1区 第3-2a層下面 平面図



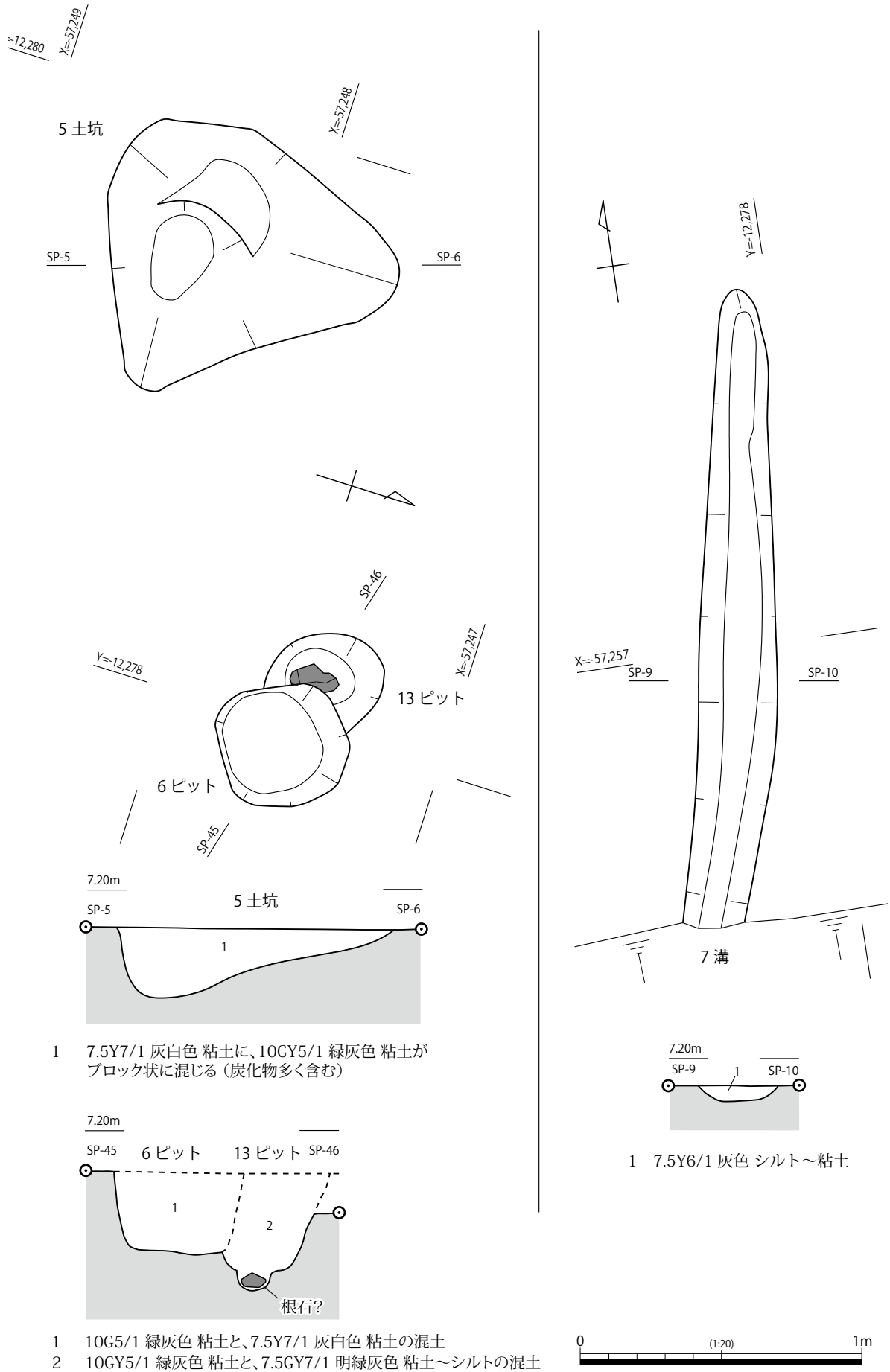
各層の注記は、次頁下段

第IV-48図 4-1区 中央土層 断面図

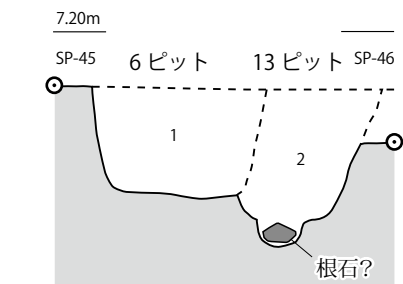


第IV -49 図 4-2 区 第3-2a 層下面 平面図

- | | | |
|----------|----|---|
| 第3-2a層 | 1 | 5G5/1 緑灰色 シルト～粘土 (ブロック土わずかに含む。直下層との間に暗色のシルト帯を部分的に挟在する) |
| 10・12溝埋土 | 2 | 1・7の混土 |
| | 3 | 5BG5/1 青灰色 粘土に、7.5GY7/1 明緑灰色 粘土が混じる (炭化物をわずかに含む) |
| 11溝埋土 | 4 | 7.5GY4/1 暗緑灰色 粘土～シルト (炭化物を含む。溝底の止水性堆積か) |
| | 5 | 5BG4/1 暗青灰色 粘土と、7/1 明青灰色 シルト～粘土の混土 (層底面に踏み込みあり。溝底の攪乱層か) |
| 第3-2a'層 | 6 | 10BG5/1 青灰色 粘土に、10GY7/1 明緑灰色 粘土がわずかに混じる (部分的に炭化物が層状に含まれる) |
| 第4a層 | 7 | 5GY7/1 明オリーブ灰色 細砂～シルト (ラミナあり。上方細粒化) |
| 第5a層 | 8 | 5BG7/1 明青灰色 シルト～粘土 (上方細粒化) |
| 53溝埋土 | 9 | 10G6/1 緑灰色 細砂～粘土 (部分的にラミナあり。第5a'層形成過程の中の流路か?) |
| 第5b層 | 10 | 5BG6/1 青灰色 細砂～シルト (上方細粒化) |
| | 11 | 5G7/1 明緑灰色 粗砂～細砂 (ラミナ顕著。上方細粒化) |

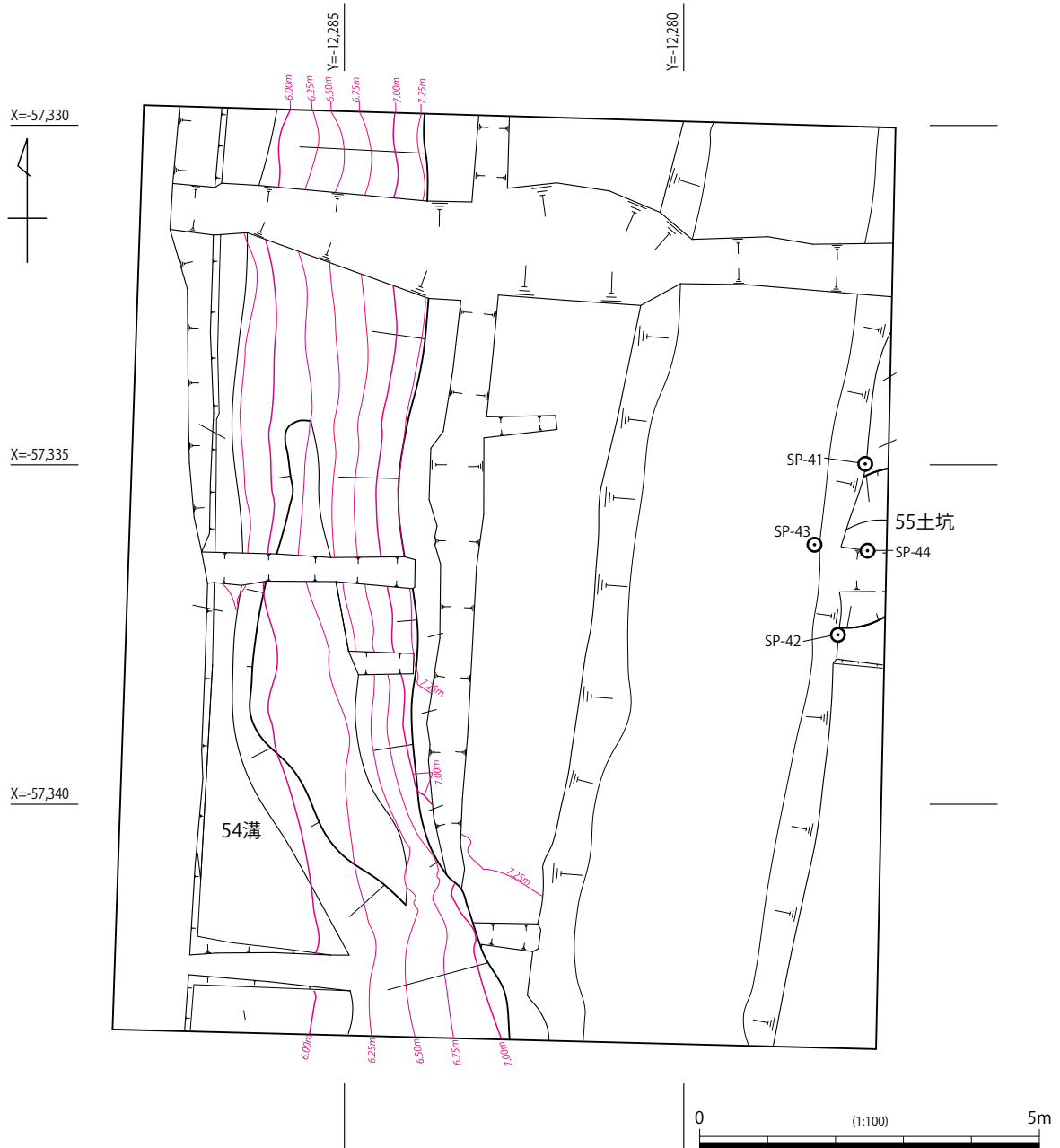


1 7.5Y7/1 灰白色粘土に、10GY5/1 緑灰色粘土がブロック状に混じる（炭化物多く含む）

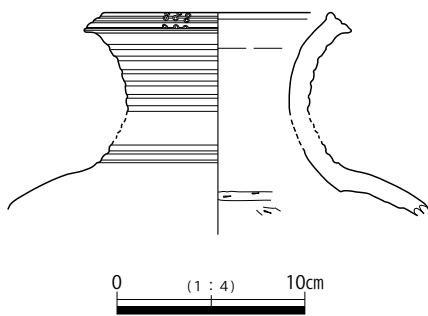


- 1 10G5/1 緑灰色粘土と、7.5Y7/1 灰白色粘土の混土
- 2 10GY5/1 緑灰色粘土と、7.5GY7/1 明緑灰色粘土～シルトの混土

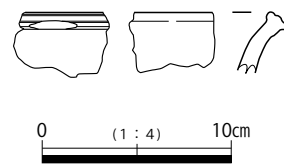
第IV-50図 4-2区 5土坑、6ピット、7溝、13ピット 平面図



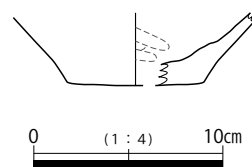
第IV -51 図 4-4 区 第3-2a 層下面 平面図



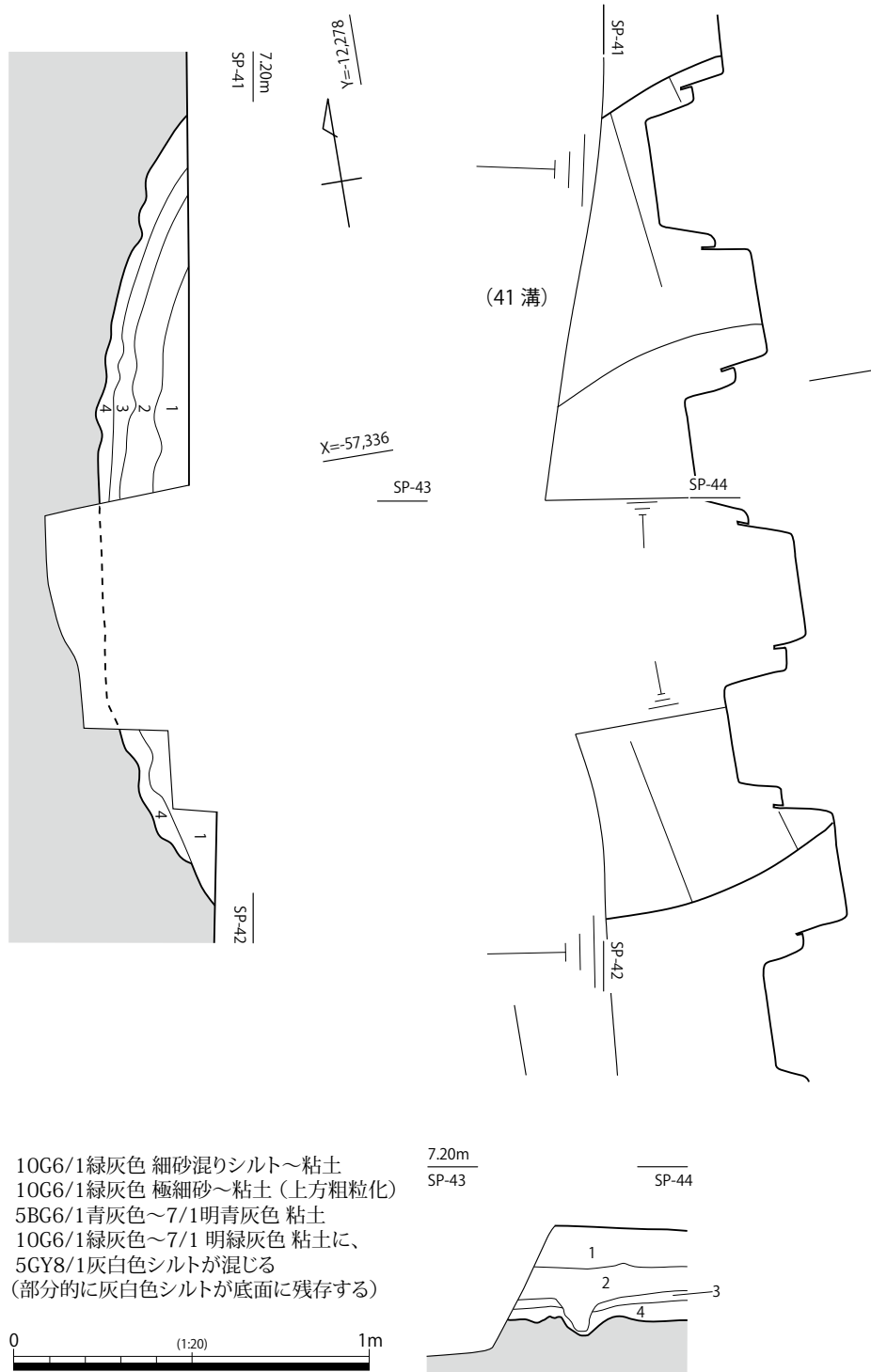
第IV -52 図 4-1 区 11 溝出土遺物



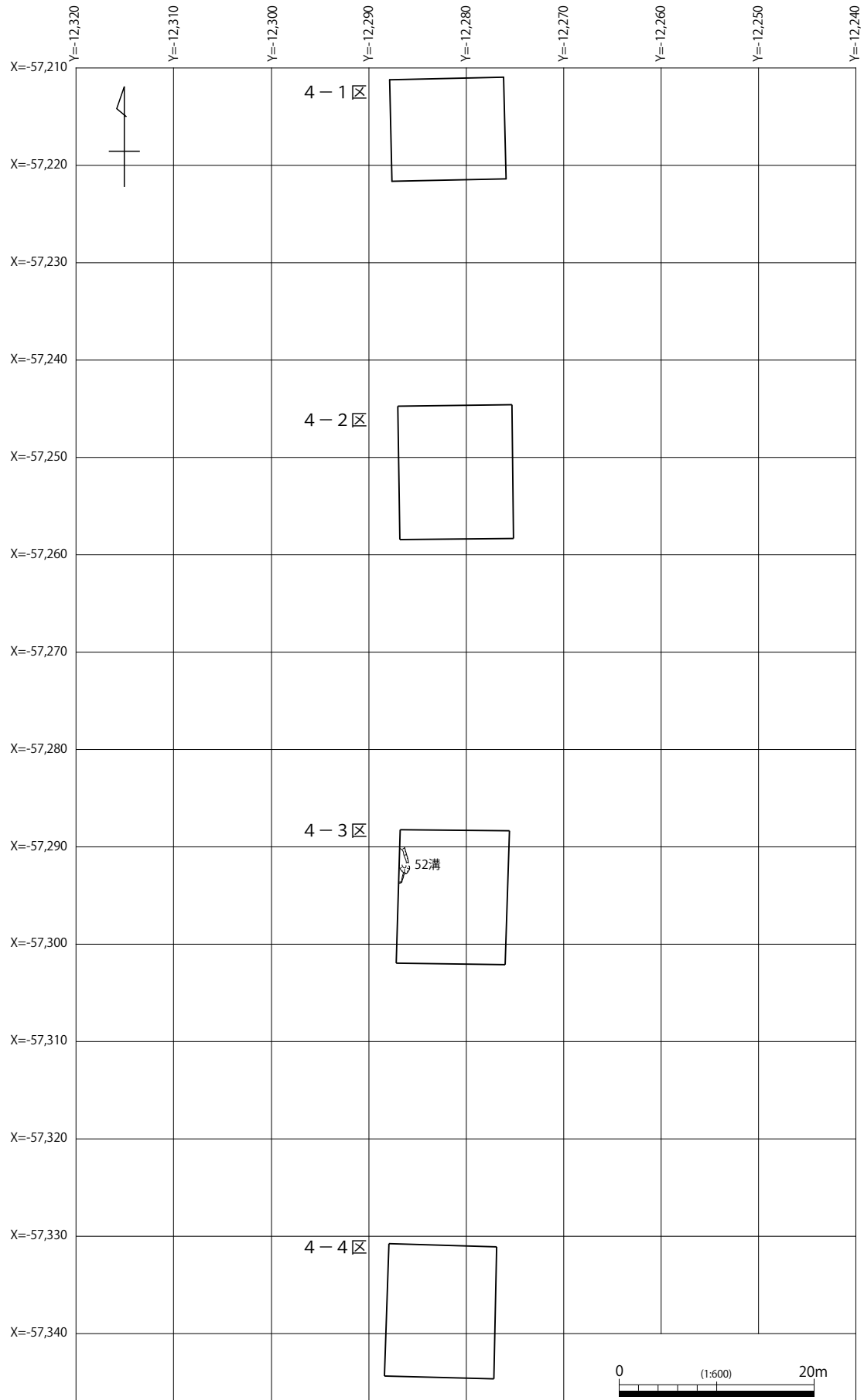
第IV -53 図 4-1 区 12 溝出土遺物



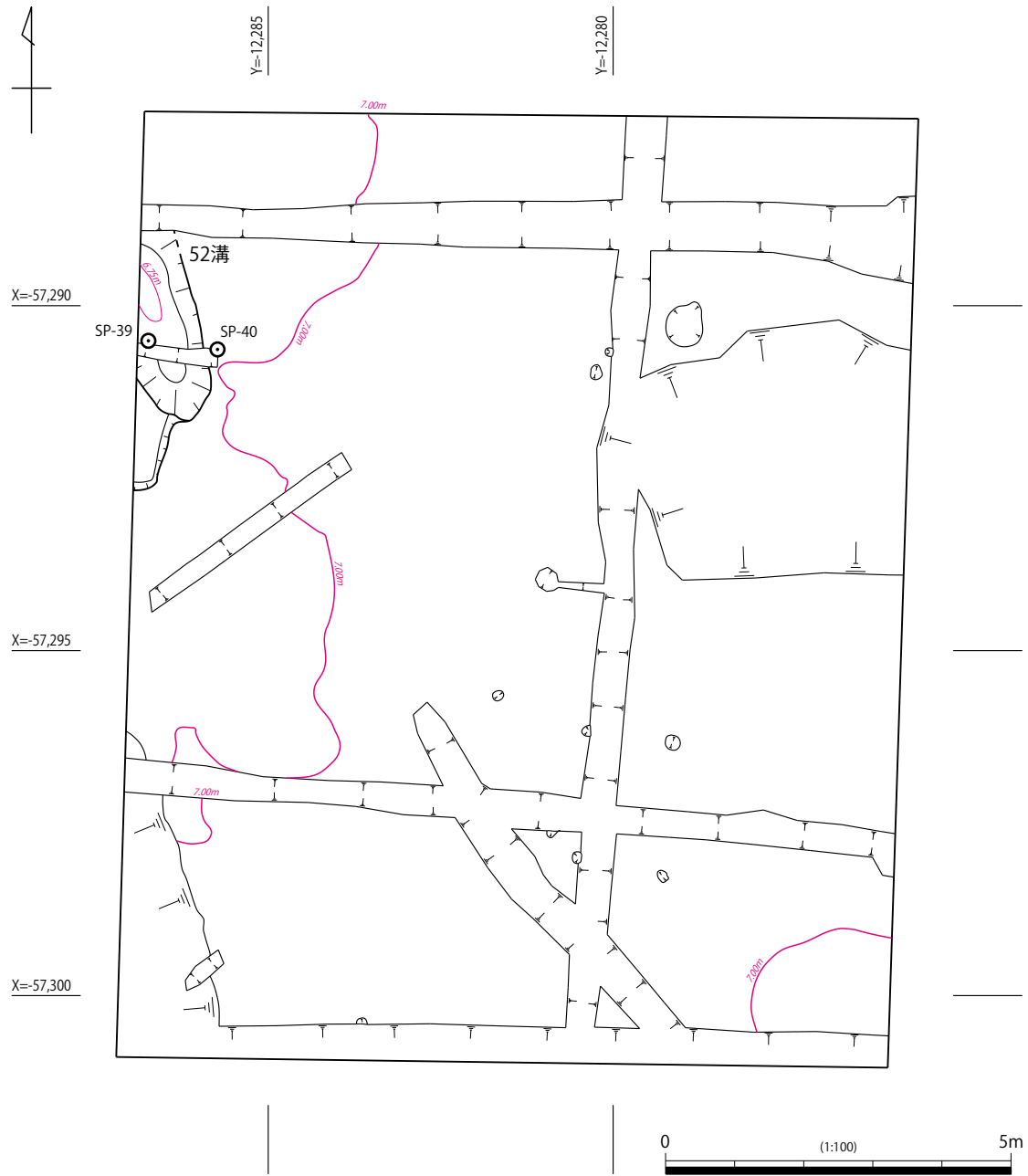
第IV -54 図 4-1 区 第3-2a 層出土遺物



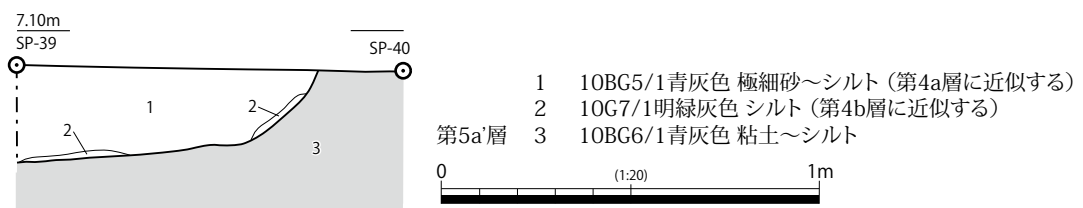
第IV -55 図 4-4 区 55 土坑 平・断面図



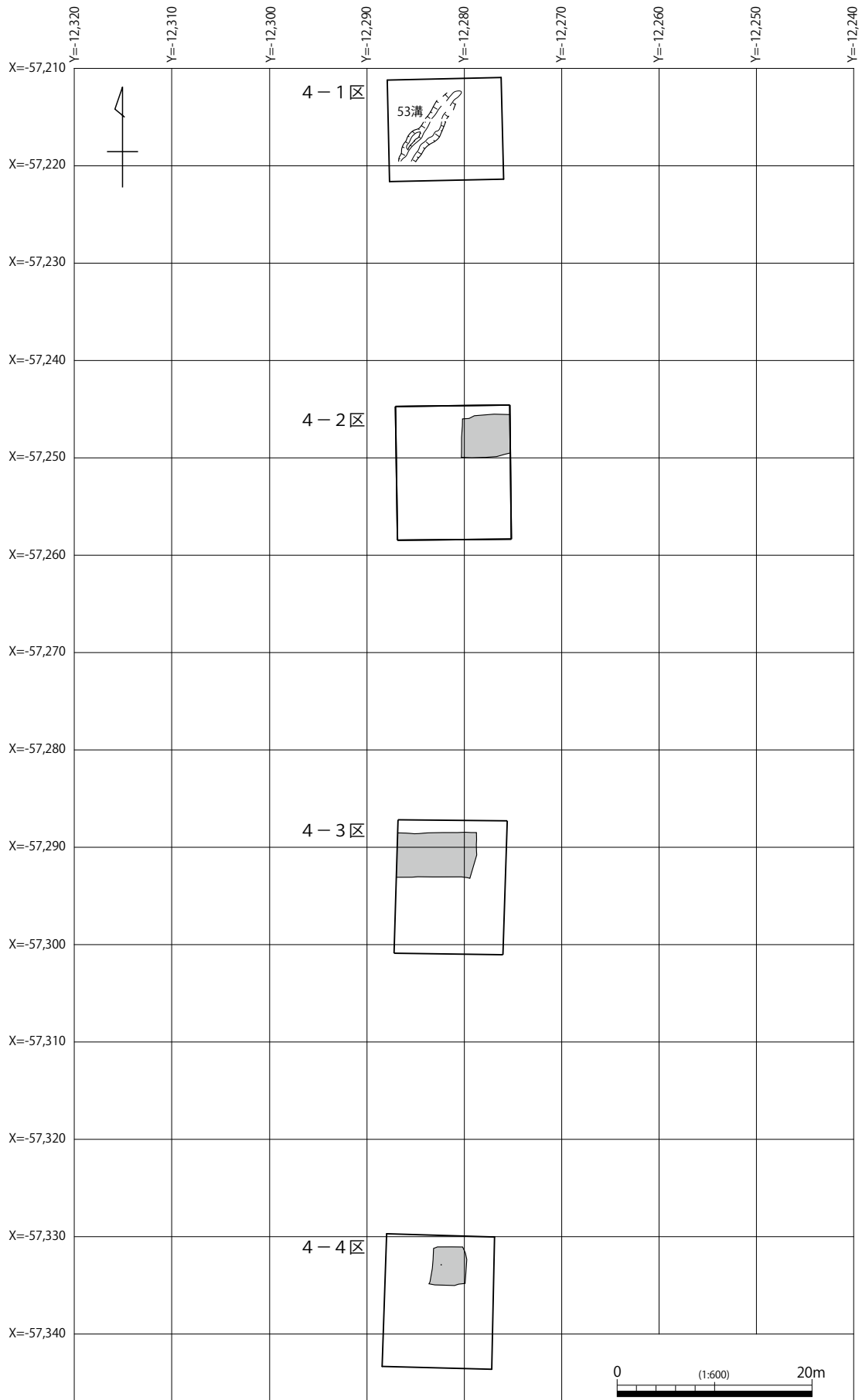
第IV -56 図 第4a層下面 平面図



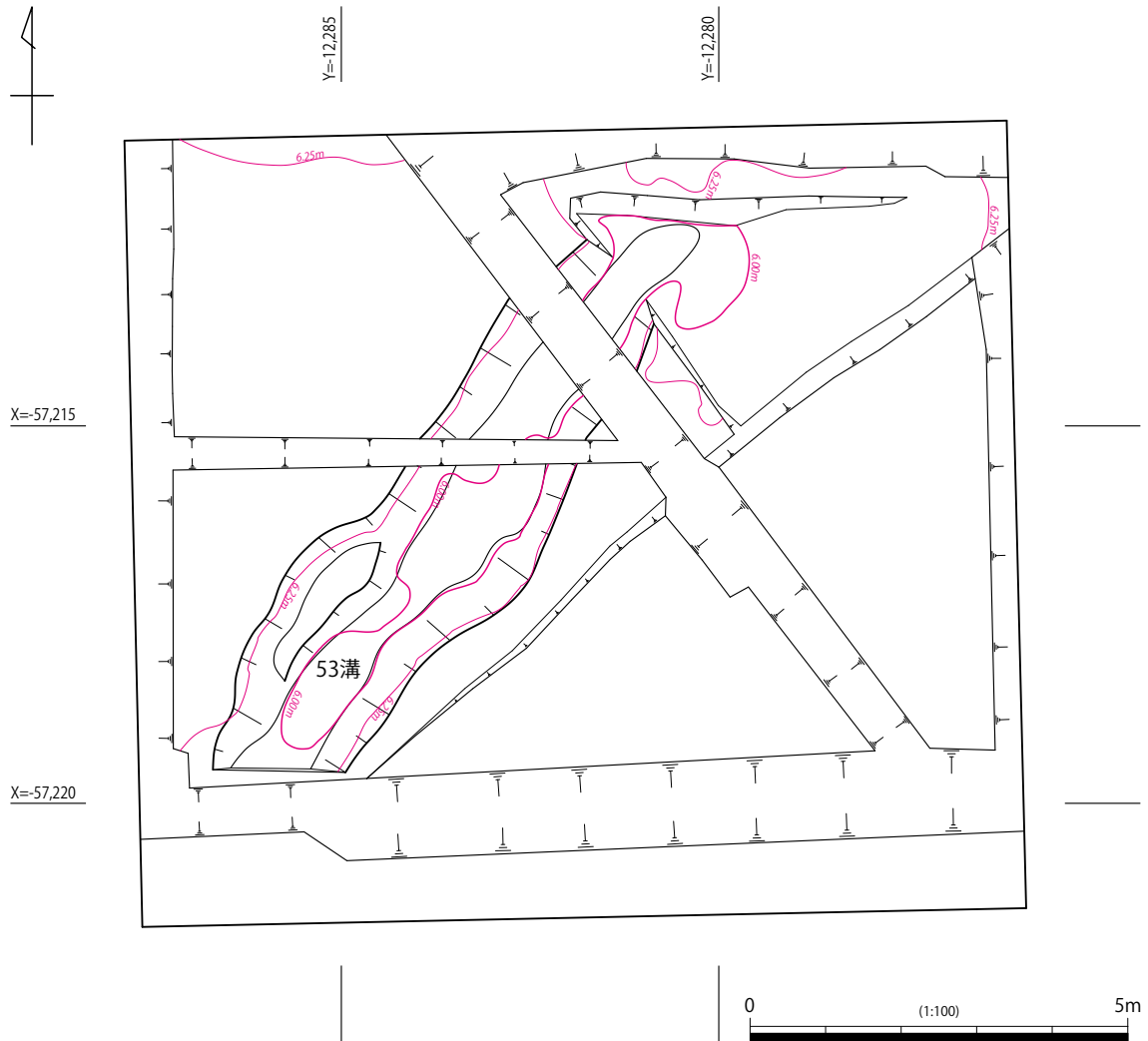
第IV-57図 4-3区 第4a層下面 平面図



第IV-58図 4-3区 52溝 断面図



第IV -59 図 第 5a' 層下面 平面図 (アミカケはトレンチの位置)



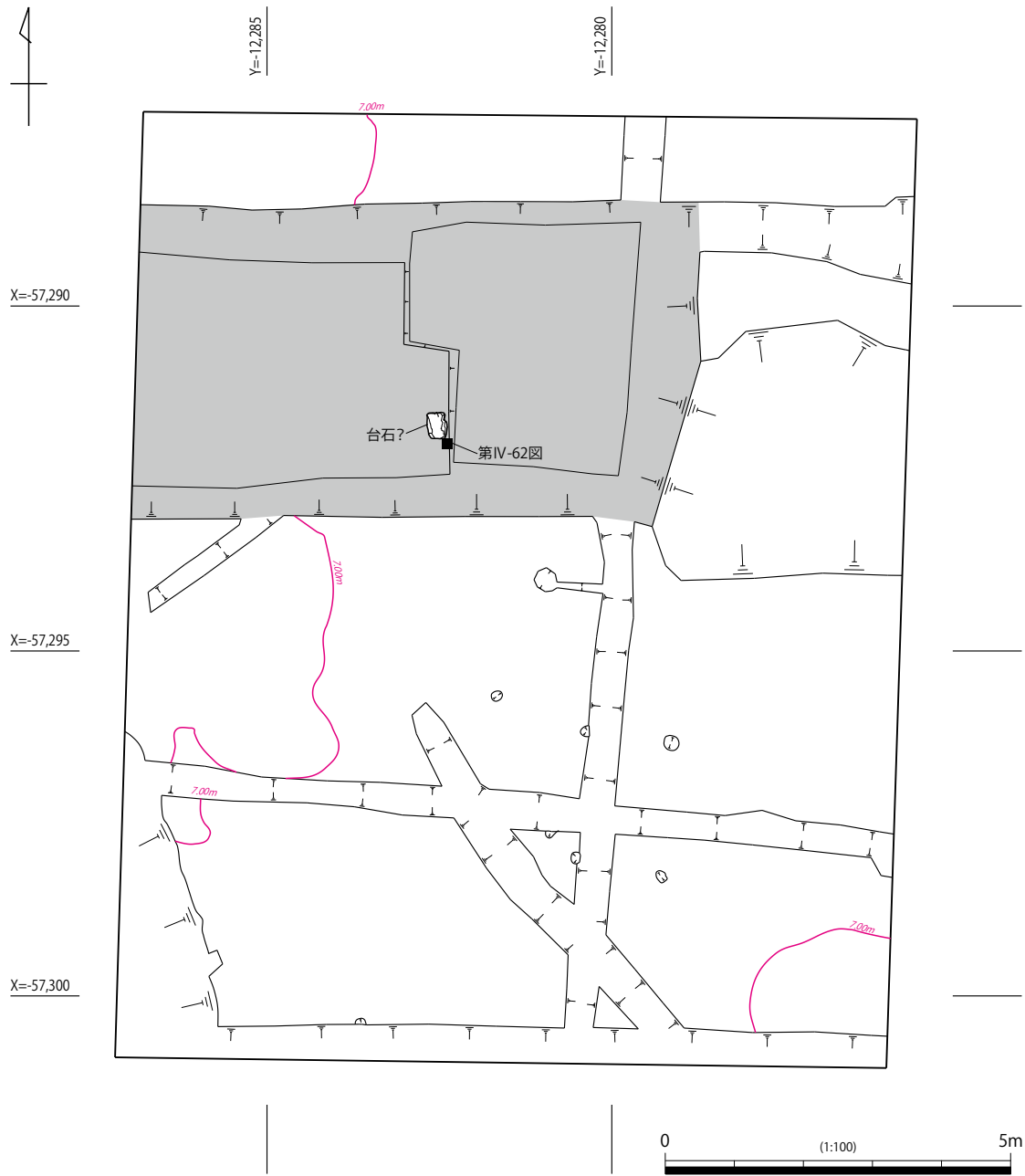
第IV -60 図 4-1 区 第5a' 層下面 平面図

4-1 区では、調査区の北西半を標高 6.2 m 程度まで掘削したところで、53 溝を検出した〔第IV -60 図〕。53 溝は南西から北東に延び、幅約 2.0 ～ 2.2 m、深さ約 0.4m を測る。埋土にはラミナが認められ、自然流路と考えられる。遺物は出土しなかった。

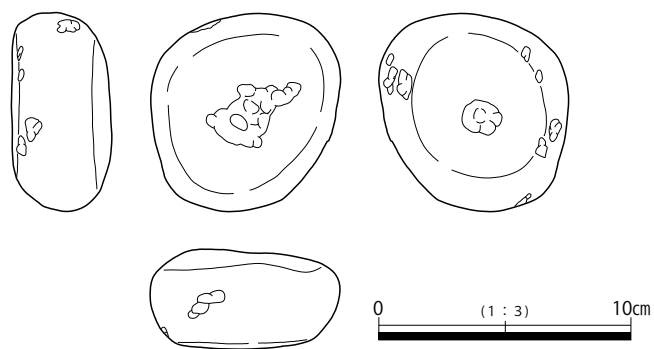
4-2 区では、調査区北東側において、標高 5.5 m 程度まで部分的な掘削を行ったが、遺構・遺物ともに検出できなかった。

4-3 区では、調査区北西側において、標高 6.1 ～ 6.3 m 程度までの部分的な掘削を行った〔第IV -61 図〕。第 5a' 層の下部から凹石が出土した〔第IV -62 図〕。また、その側には長軸 40cm 程度の凝灰岩があった。平坦な面を上にして出土しており、台石などの可能性が考えられたが、敲打や磨った痕跡は認められなかった〔図版 18-2・3〕。

4-4 区では、調査区北側を部分的に掘り下げて調査したが、遺構・遺物ともに検出できなかった。



第IV-61図 4-3区 第5a'層下面 平面図



第IV-62図 4-3区 第5a'層出土の石器

第V章 総括

当初、広範囲が調査区として設定されていた4区は、第I章で記述したように、その後の工法変更により、橋脚が建設される4地点を個別に調査することとなった。そのため調査の成果は、限定的なものとなったが、縄文時代から中世の遺構や遺物を確認したことで、本高弓ノ木遺跡における環境変化と土地利用の変遷を考える上での重要な知見を得ることができた。

弥生時代以前 第3-1-2a層下部から下層で弥生時代以前の遺構や遺物を確認したが、土地利用の詳細を把握することはできなかった。

この度の調査で、最も下層で遺構や遺物が確認できたのは第5a'層下面である。凹石とみられる石器が出土したが、土器類は出土していない。本高弓ノ木遺跡5区の第5a層、第5a'層に対応するならば、4区の第5a'層は縄文時代後期～晩期前半に帰属する可能性が高い。

第4a層下面では52溝を検出した。これも遺物を伴わないが、本高弓ノ木遺跡5区の第4a層に対応するならば、縄文時代晩期後半～弥生時代前期に帰属する遺構だろう。

第3-2a層下面では、4-1区で溝、4-2区で土坑やピット、4-4区で溝や土坑を検出した。4-1区で検出した11溝や12溝、4-4区で検出した54溝からは弥生時代中期後葉の土器が出土している。概ね本高弓ノ木遺跡5区の第3-2a層下面に対比できると考える。

また、第3-1-2a層下面で検出した遺構群は、上部と下部の遺構群に分けて理解した。第3-1-2a層下部の遺構群は、4-3区、4-4区に確認できる。このうち40溝から多くの土器などが出土している。上部にも同位置に溝があり、取り上げ時に上部に帰属する溝に包含されていたとみられる古墳時代前期の土器片が混入している。これらを除けば、弥生時代後期前葉の土器が最も新しい型式を示しており、本高弓ノ木遺跡5区では第3-1-3a層に対比できる。

古墳時代前期 第3-1-2a層の上部に古墳時代前期の遺構が分布している。4-1区や4-2区で擬似畦畔、4-3区や4-4区で溝を検出した。特に、4-3区や4-4区にある8・9・34溝は、3区で調査された「溝9」、「溝10」、5区で調査された2溝などと連続する可能性がある重要な遺構である。5区で調査された2溝は、複数の木製構造物が縦走する4落ち込みから発する水路とみられる長大な溝で、3区、4区、5区で検出された当該期の溝が一連の遺構だとすれば、その総延長は350m以上におよぶ。

本高弓ノ木遺跡を見下ろす北東の丘陵頂部には、古墳時代前期中頃に築造された本高14号墳がある。この古墳は、山陰地方では最古級ともなる前方後円墳であり、この古墳を造営した集団が、本高一带の開発を組織的に推し進めていた可能性が想起できよう。

なお、周辺の地形は南から北方へ傾斜するとともに、西から東へ緩く傾斜している。現代でも、釣山の裾には周辺の水田に伴う水路があり、水田の用排水は東西方向の里道にそって西から東へと流れている。古墳時代前期に設けられた長大な溝に導かれた水も、本高弓ノ木遺跡5区から4区、そして3区へ向かって流れていたものと推測される。

ただし、こうした古墳時代の土地利用は、前期に機能していた一連の溝が埋没したところに途絶えており、その後は広範囲が湿地のような状態になったと想定される。第3-1-2a'層は、この間に形成された堆積である。

古代以降 ところが、飛鳥時代になると、再び本高弓ノ木遺跡で土地の利用がはじまる。3-1-1a層

第V章 総括

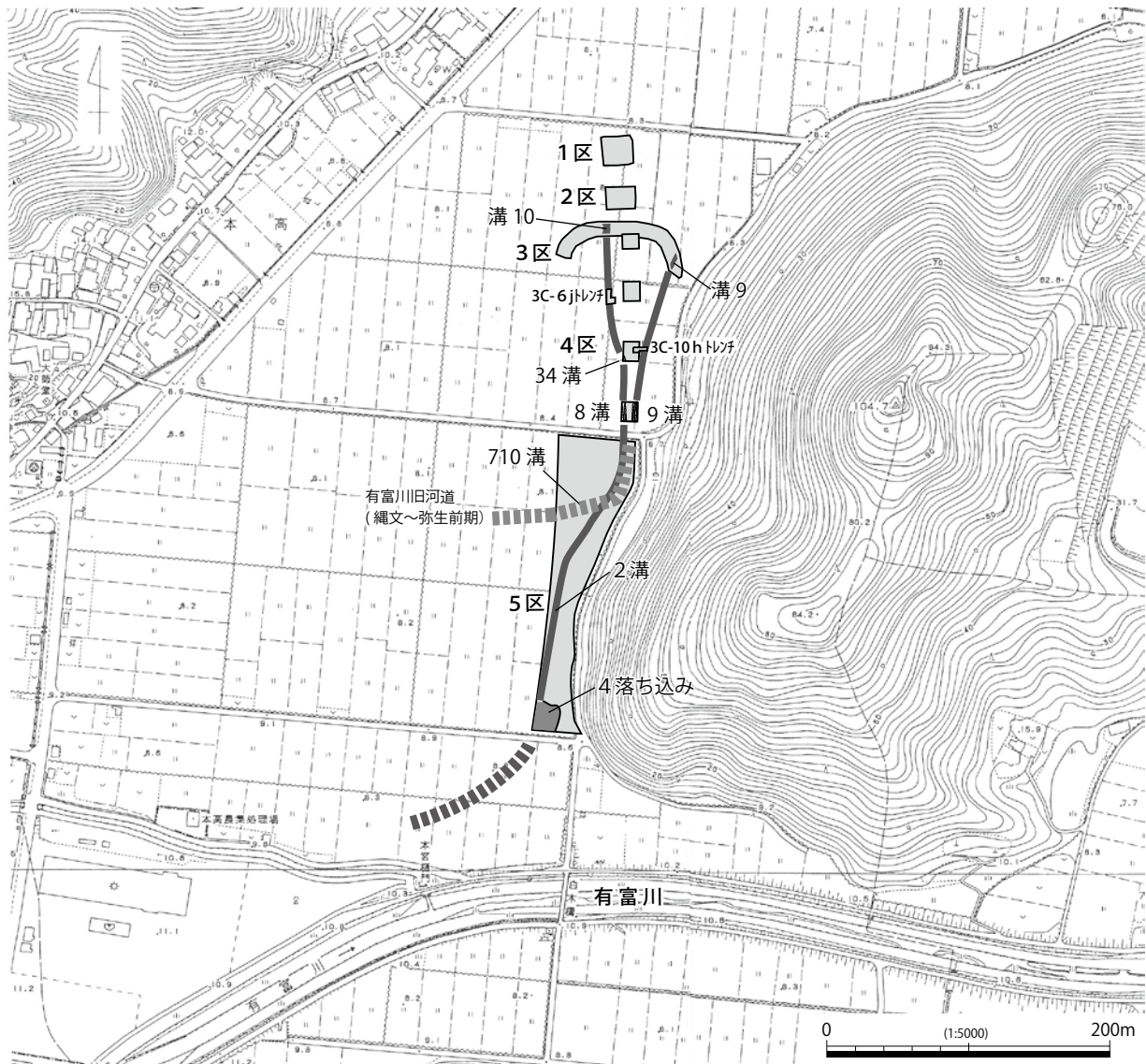
下面では、4-1区、4-3区、4-4区で、擬似畦畔やウシの蹄跡などを検出した。また、第3-1-1a層の上部には、中世に耕作された第2a層が堆積しており、その下面で耕作の痕跡を確認した。

なお、第3-1-1a層下面の疑似畦畔や、第2a層下面の耕作痕跡は、ほぼ南北方向を指向している。この向きは、現在耕作されている水田の区画方向とも一致しており、古代以降の地割に大きな変化がなかったことがうかがわれる。

参考文献

鳥取県埋蔵文化財センター（北浩明、岩垣命）編 2011『本高弓ノ木遺跡（1～3区）』鳥取県埋蔵文化財報告書 38

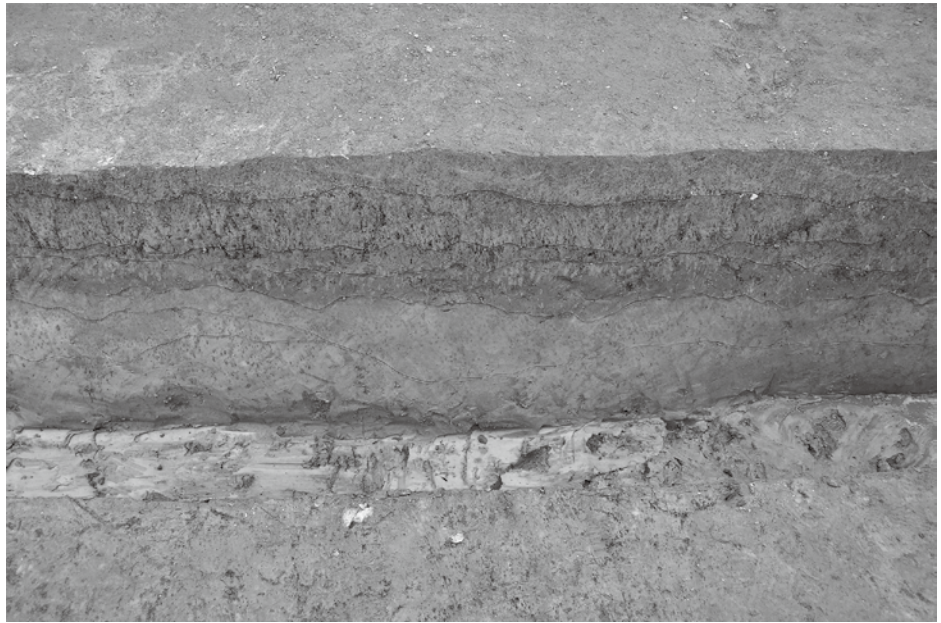
鳥取県教育委員会（濱田竜彦、中尾智行、下江健太、奥原このみ、高尾浩司、山梨千晶ほか）編 2013『本高弓ノ木遺跡（5区）I』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ



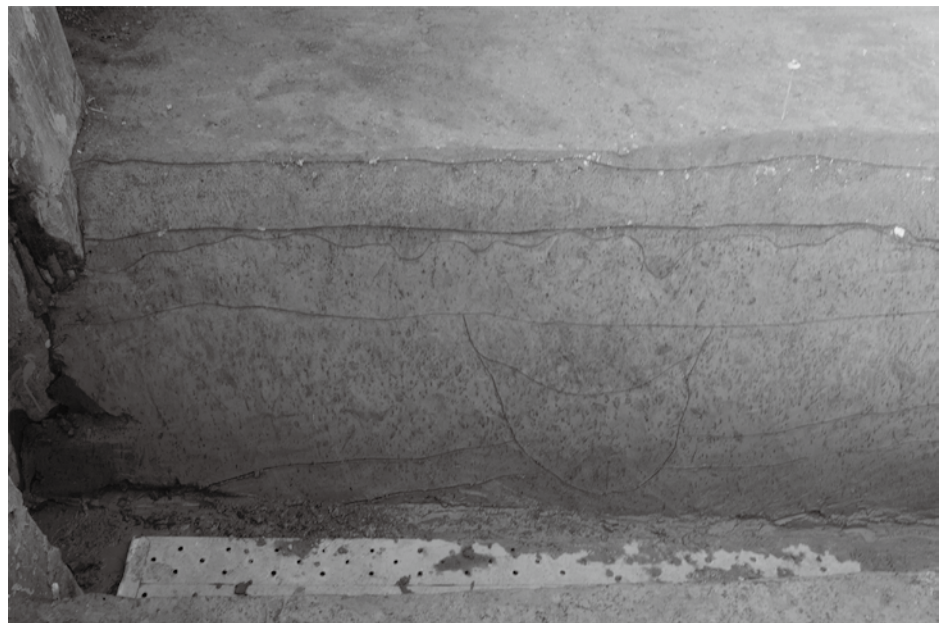
第V図 本高弓ノ木遺跡における古墳時代前期の溝（想定図）

圖 版
PLATE

1 4-1区 南壁土層断面
(北から)



2 4-3区 北壁土層断面
(南から)



3 4-4区 断ち割り断面
5a'層以下 (南から)



図版 2



1 4-2区 第2a層下面
検出状況（南東から）



2 4-3区 第2a層下面
暗渠土層断面
（北西から）

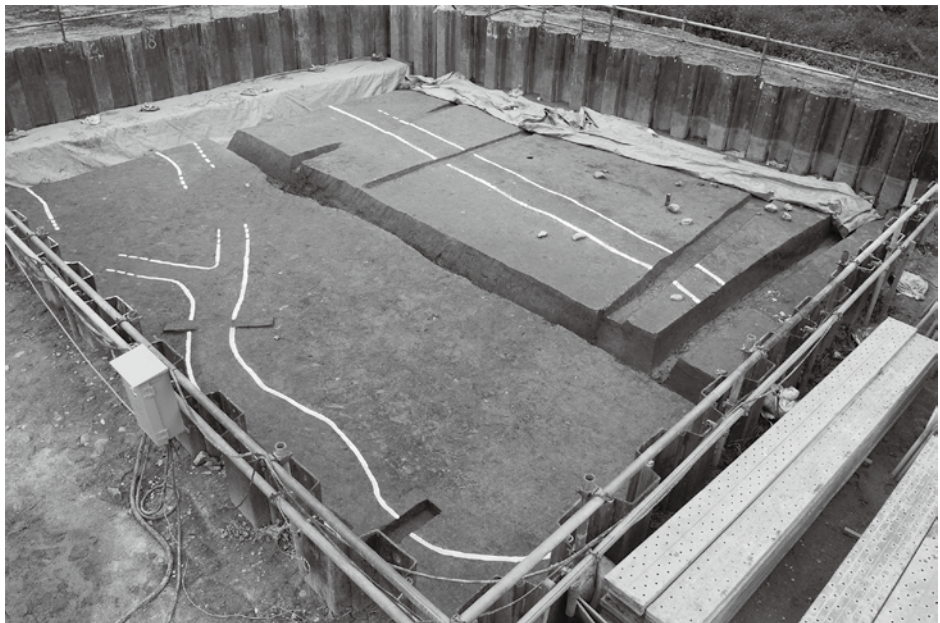


3 4-2区 1土坑
完掘状況（東から）

1 4-1区 第3-1-1a層下面
擬似畦畔検出状況
(北西から)



2 4-4区 第3-1-1a層下部
下面 擬似畦畔検出状況
(南西から)



3 4-4区 第3-1-1a層下部
下面 擬似畦畔土層断面
(南から)



図版 4



1 4-1区第3-1-2a層下面
足跡痕検出状況
(北西から)



2 4-1区第3-1-2a層下面
足跡痕検出状況2
(北東から)



3 4-1区第3-1-2a層下面
足跡痕検出状況(近接)

1 4-1区 第3-1-2a層
遺物出土状況
(南西から)



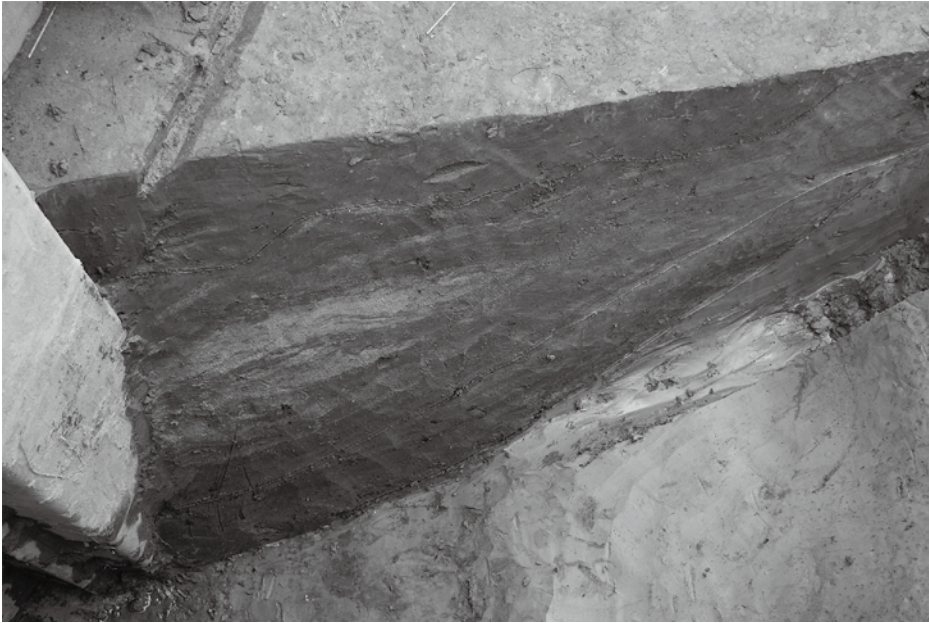
2 4-1区 第3-1-2a層下面
杭1～4土層断面
(南西から)



3 4-3区 34溝 完掘状況
(南から)



図版 6



1 4-3区34溝土層断面
(南から)



2 4-4区北壁土層断面
(南東から)



3 4-4区8溝・40溝土層断面
(南西から)

1 4-4区 9溝・41溝 土層
断面
(南西から)



2 4-4区 8溝中層 木製品
出土状況
(西から)



3 4-4区 8溝 木製品出土
状況 1



図版 8



1 4-4区 8溝 木製品出土
状況2



2 4-4区 8溝 木製品出土
状況3
(西から俯瞰)

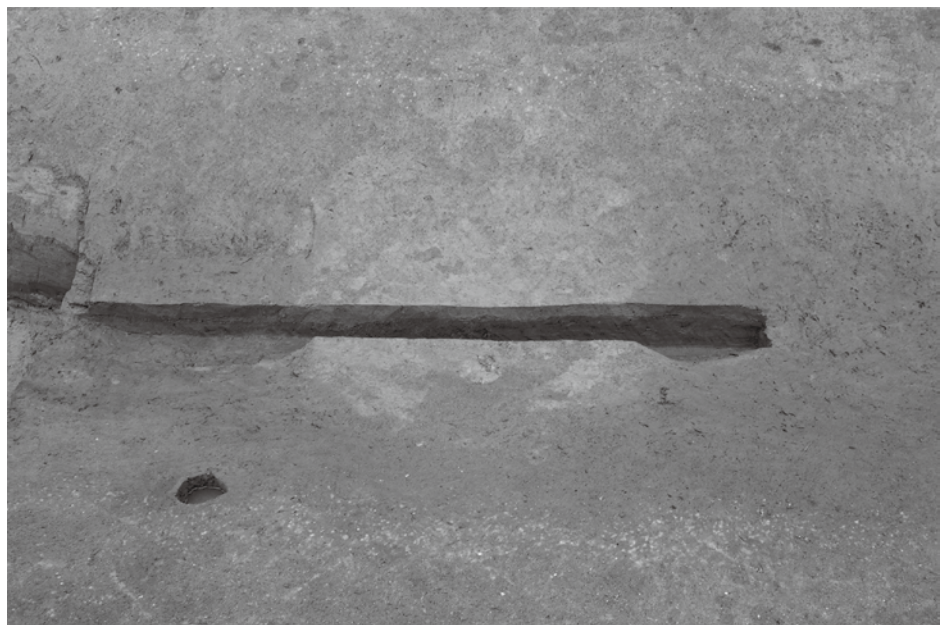


3 4-4区 8溝 木製品出土
状況4
(南から)

1 4-4区 9溝中層 完掘状況
況
(南から)



2 4-4区 9溝 上層
上面 35 盛土状遺構
検出状況
(西から)



3 4-4区 9溝 上層
上面 35 盛土状遺構
土層断面
(北西から)



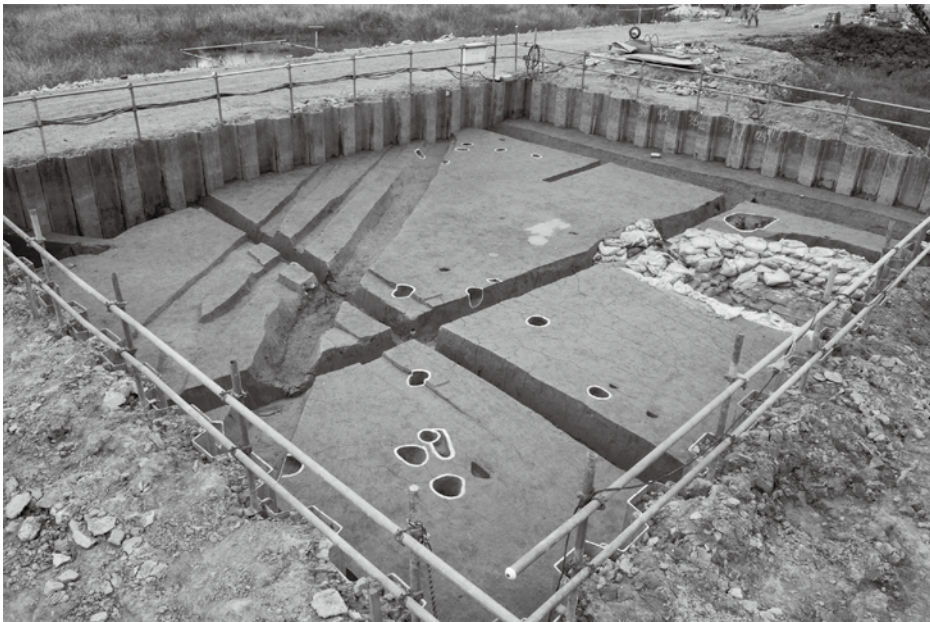
図版 10



1 4-4区9溝 東肩の木製
構造物土層断面
(西から)

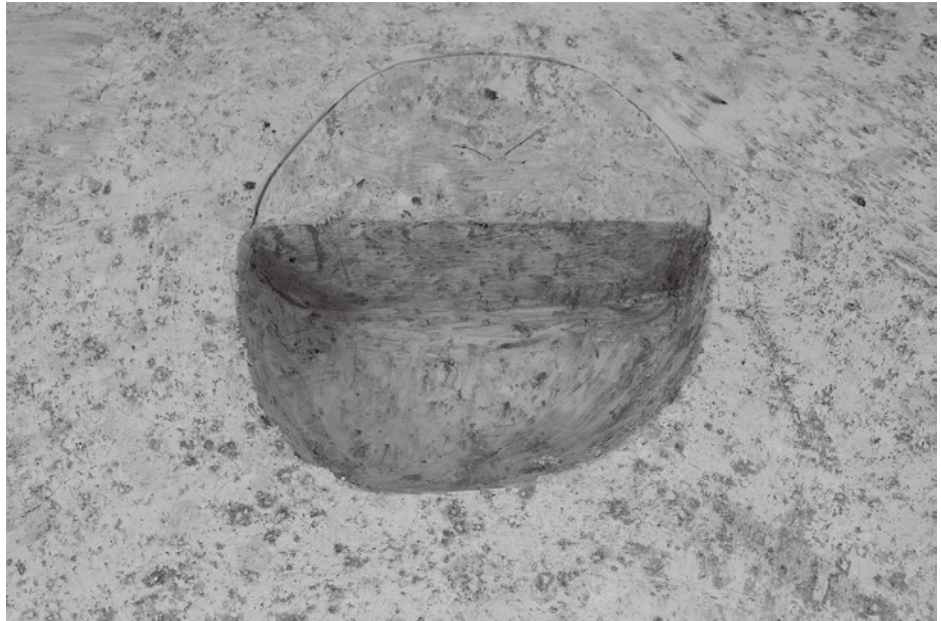


2 4-4区9溝 東肩の木製
構造物
(南西から)



3 4-3区第3-1層下面 遺
構完掘状況
(南東から)

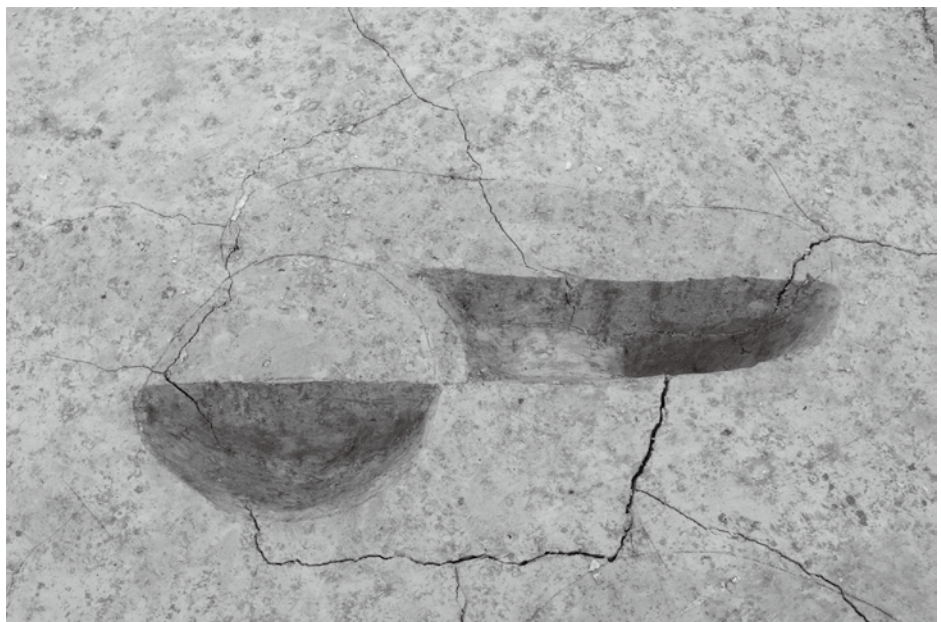
1 4-3区 43ピット
土層断面（北から）



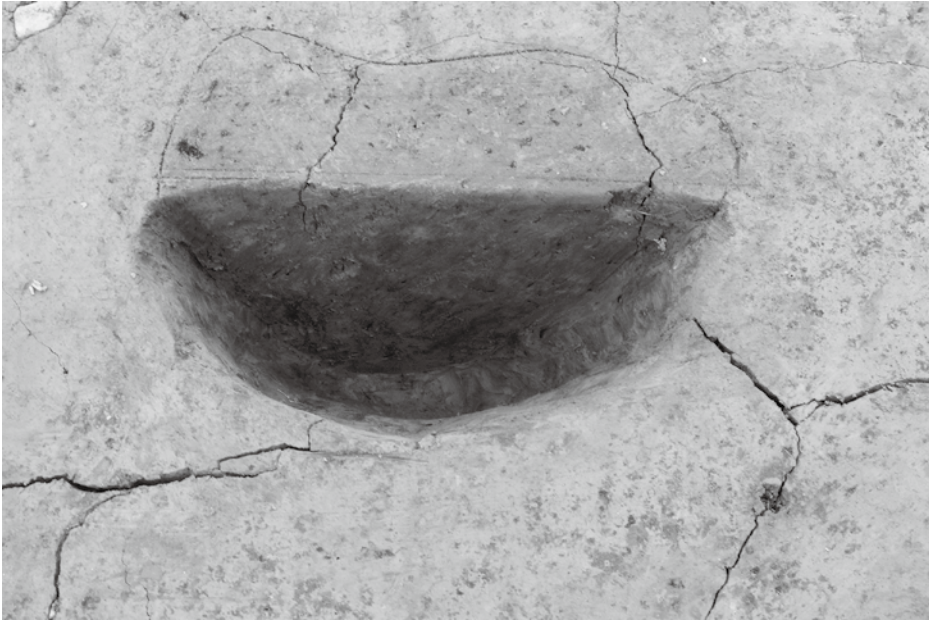
2 4-3区 24ピット
土層断面（南から）



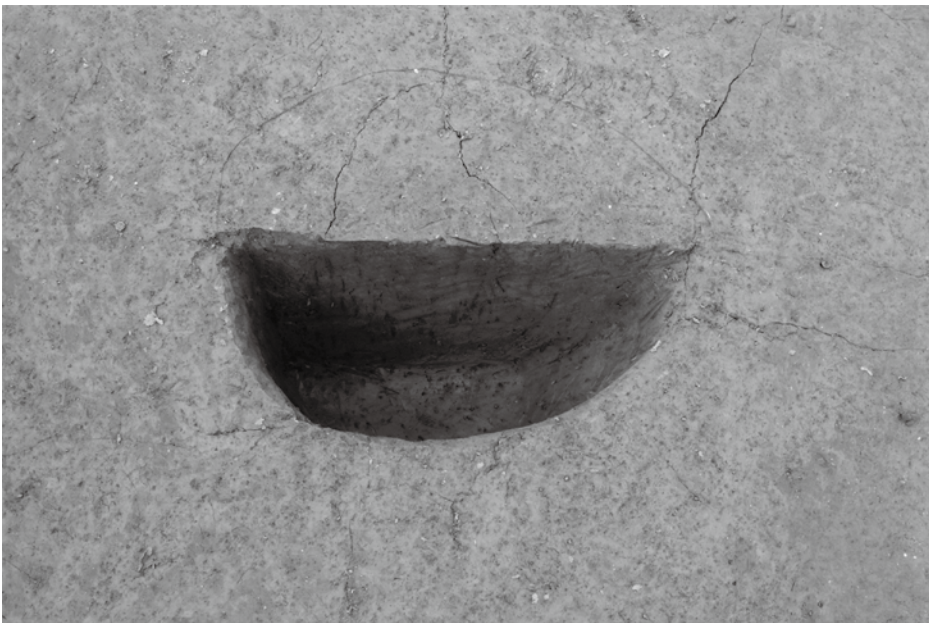
3 4-3区 16・17ピット
土層断面（南から）



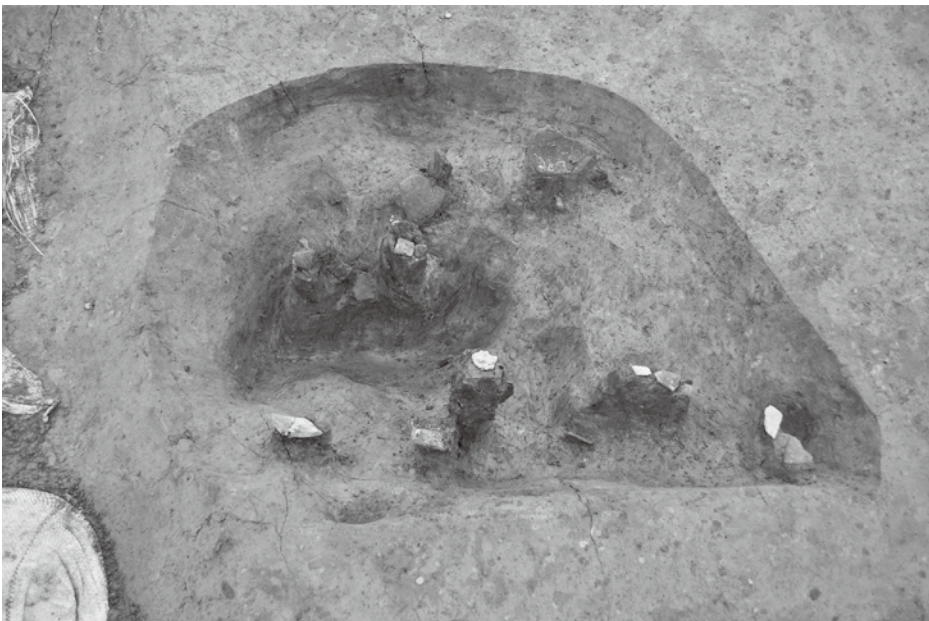
図版 12



1 4-3区 20ピット
土層断面（南から）



2 4-2区 6ピット
土層断面（北東から）



3 4-3区 26土坑
遺物出土状況（東から）



1 4-4区8溝・41溝完掘状況(南西から)

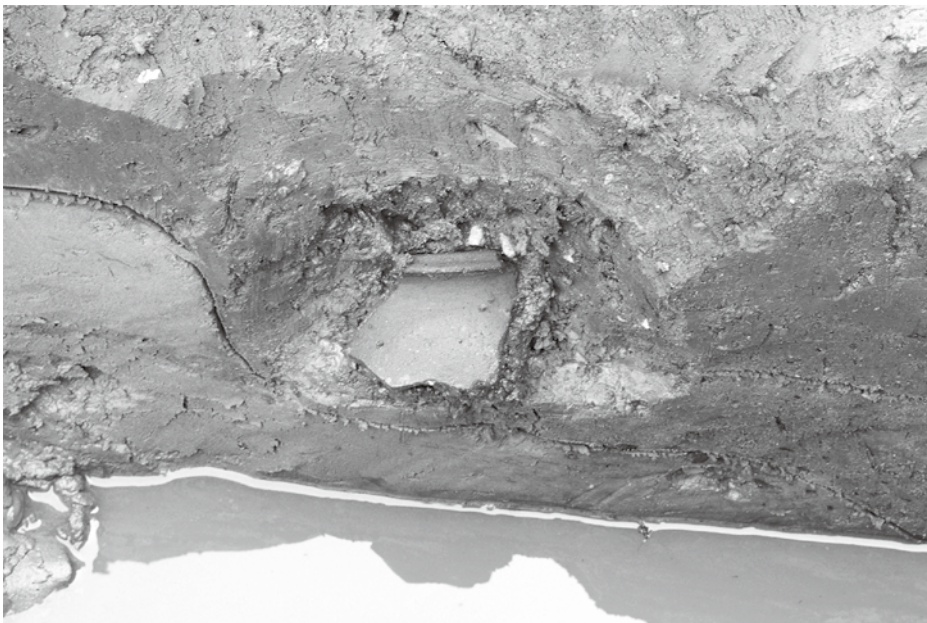


2 4-4区8溝(底面)・40溝(肩部)完掘状況(北東から)

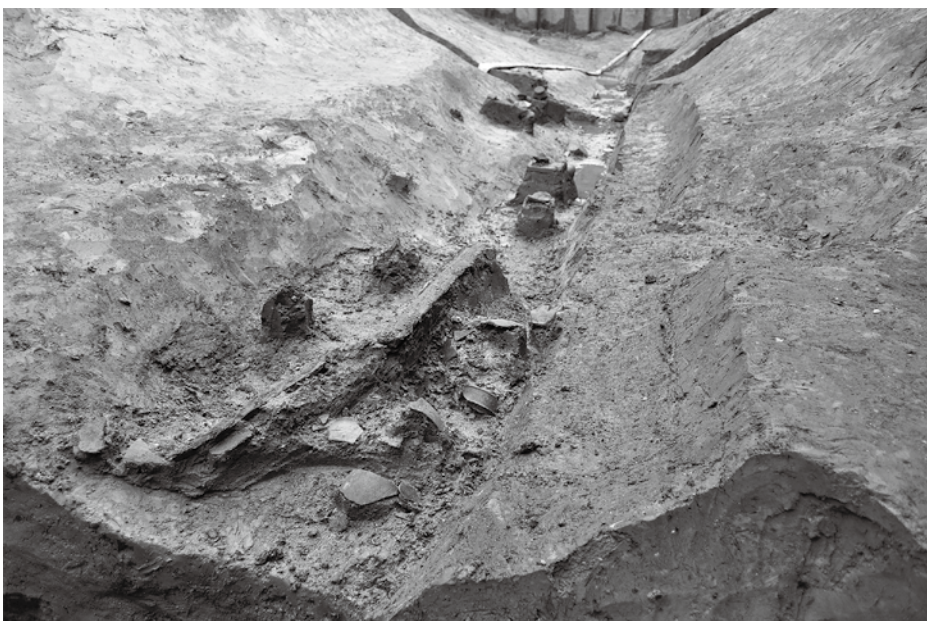
図版 14



1 4-4区 8溝底面南側
遺物出土状況
および40溝東壁
イネ科植物の分布
(南から)



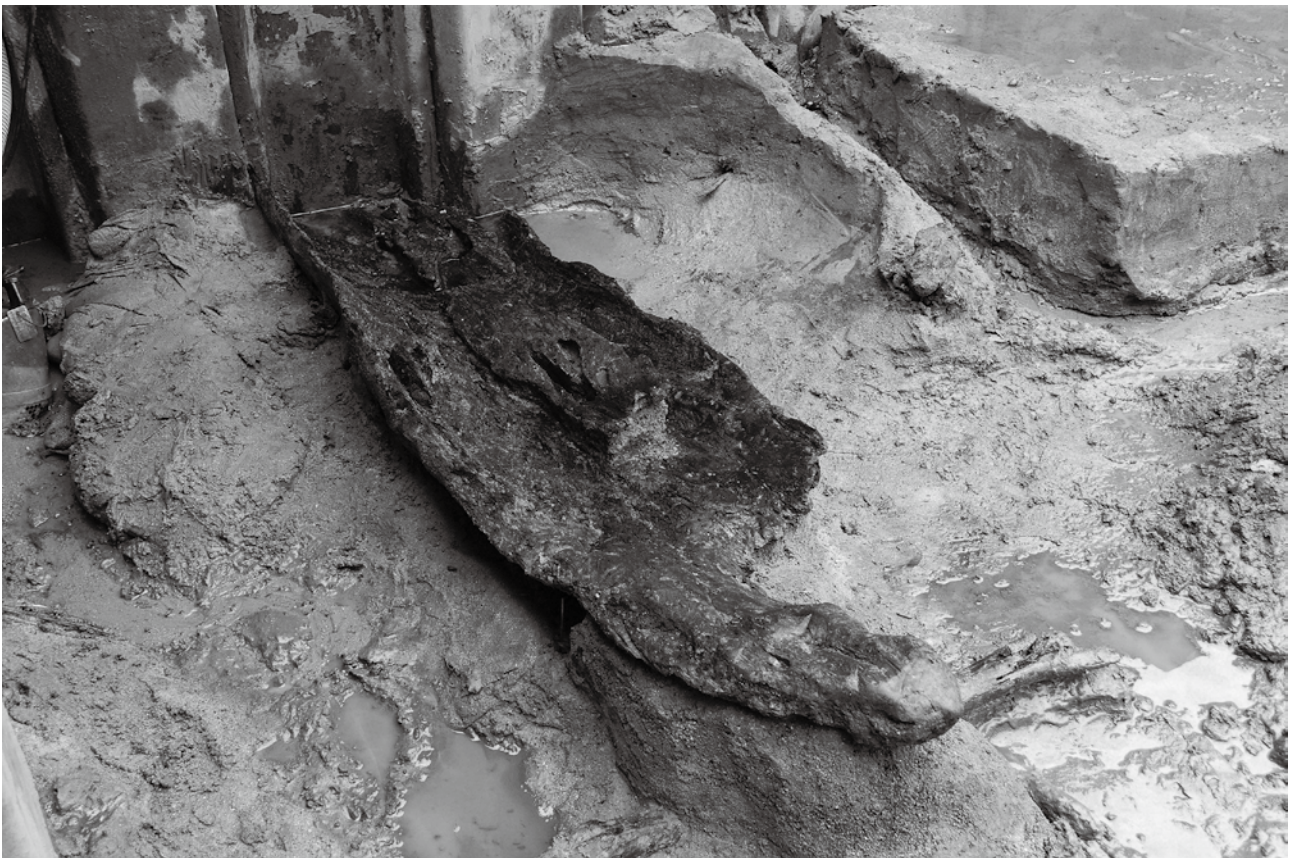
2 4-4区 54溝
遺物出土状況 (北から)



3 4-4区 40溝底面
遺物出土状況 (北西から)



1 4-4区40溝 完掘状況 (南から)

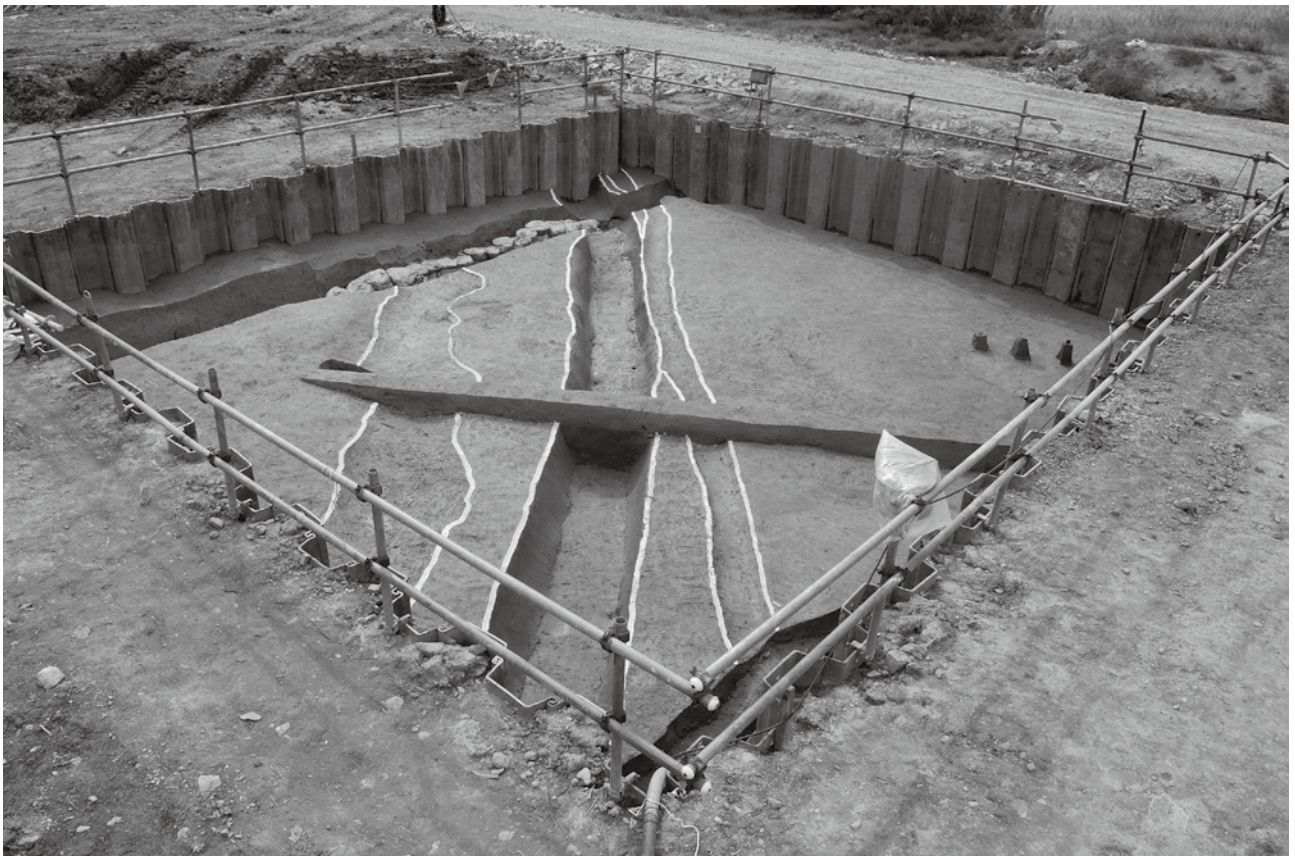


2 4-4区40溝 木材出土状況 (南東から)

図版 16



1 4-4区40溝木材出土状況(西から俯瞰)



2 4-1区10~12溝完掘状況(北東から)

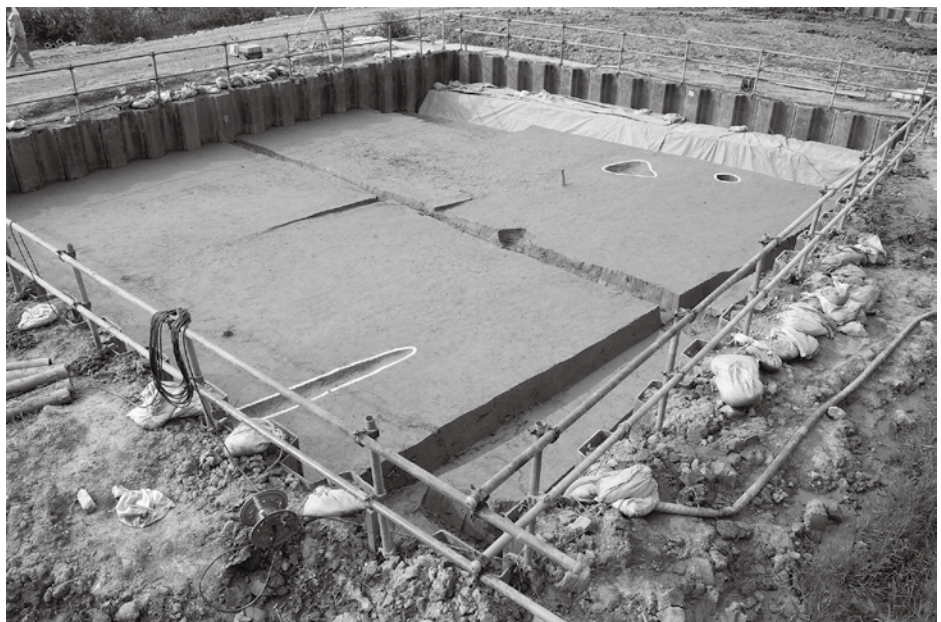
1 4-1区 中央ベルト
土層断面（北西から）



2 4-2区 13ピット
完掘状況（東から）



3 4-2区 第3-2a層下面
遺構完掘状況（南東から）



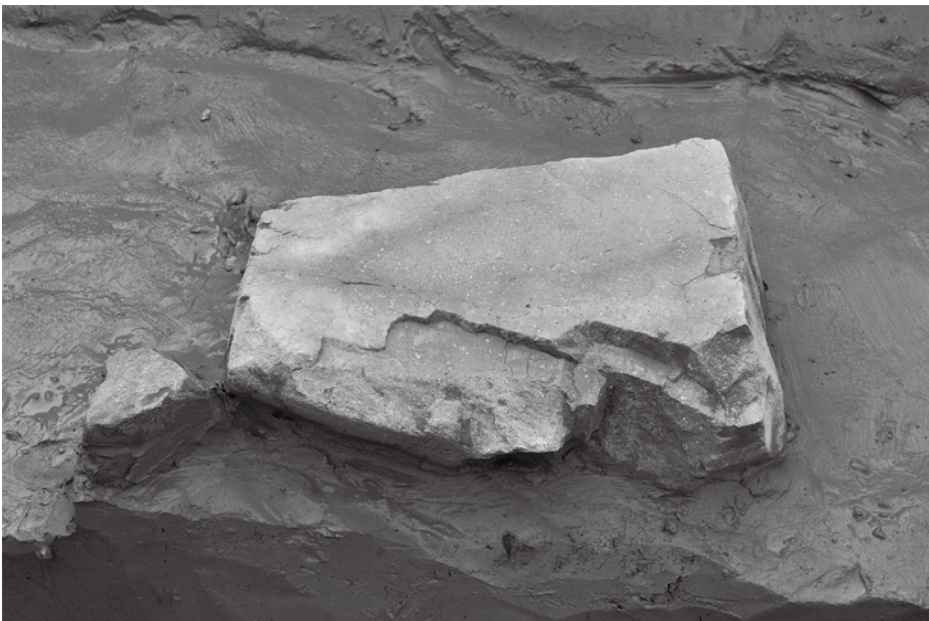
図版 18



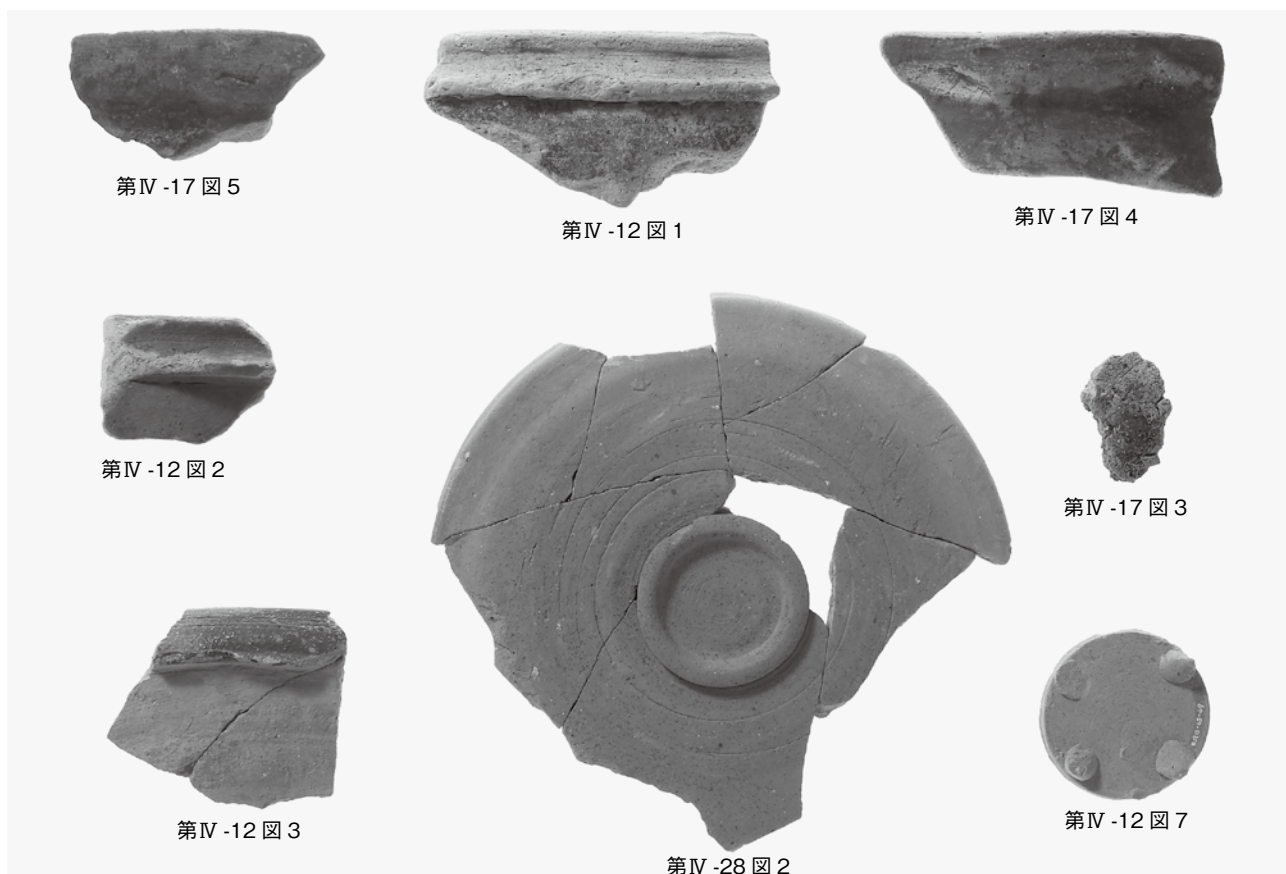
1 4-4区 55土坑
土層断面（西から）



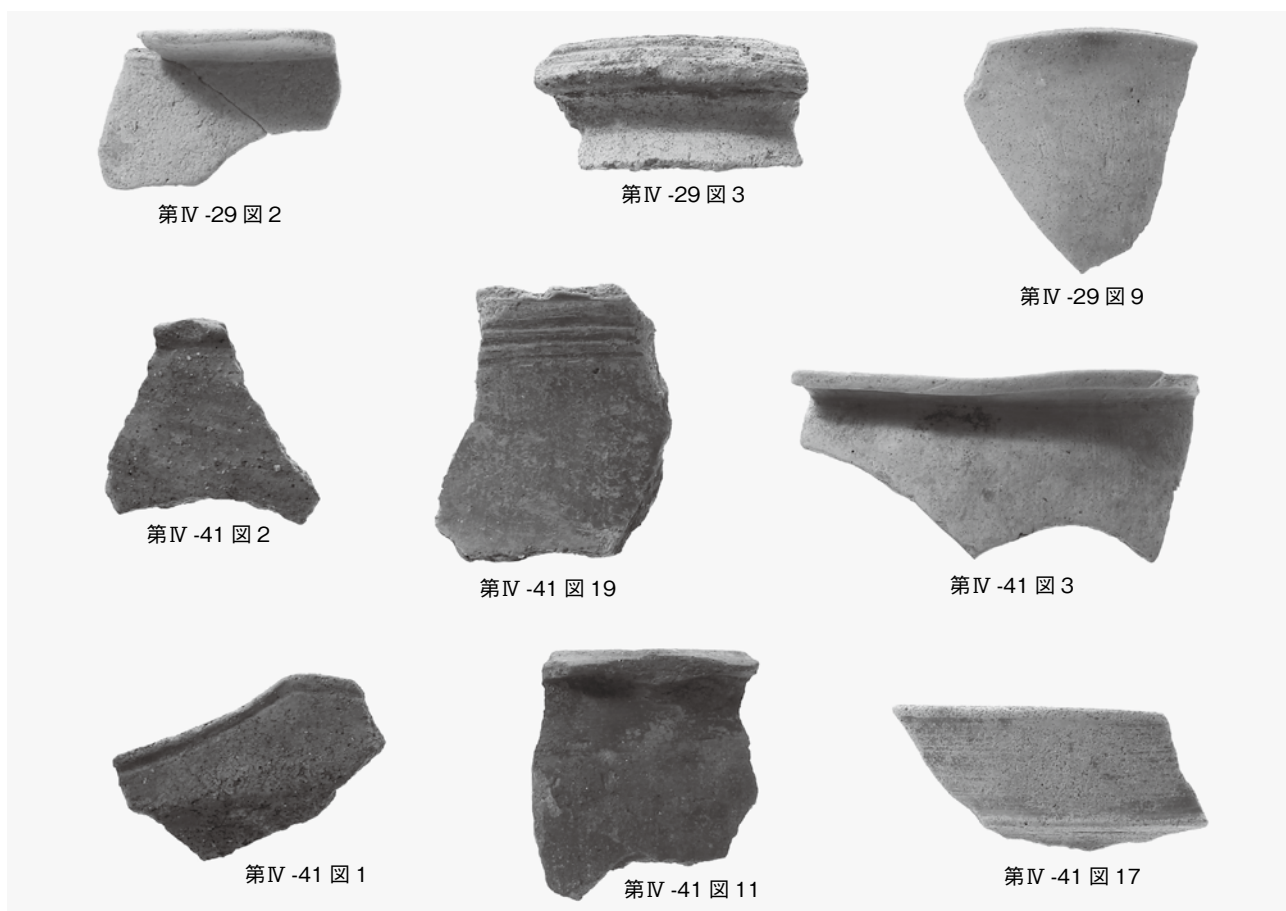
2 4-4区 断ち割り内
遺物出土状況（南東から）



3 4-4区 断ち割り内
遺物出土状況（東から）

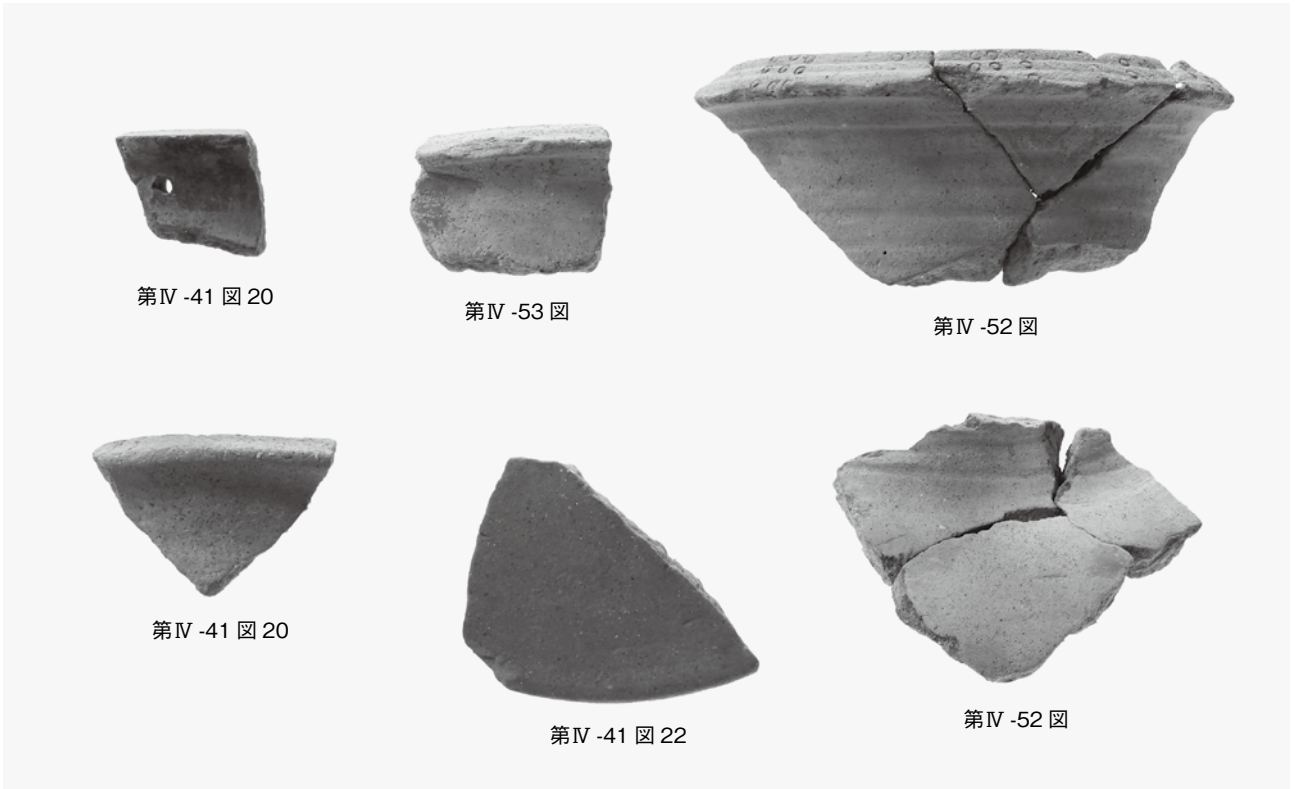


1 第2a層、第3-1-1a層、第3-1-2a層 出土遺物 (土器)



2 8溝、40溝 出土遺物 (土器)

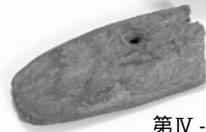
図版 20



1 40 溝、11 溝、12 溝 出土遺物 (土器)



2 8 溝 出土遺物 (土器)



3 40 溝、第 5a 層
出土遺物 (石器)



4 8 溝 出土遺物 (木製品)

報告書抄録

ふりがな	もとだかゆみのきいせき（よんく）							
書名	本高弓ノ木遺跡（4区）							
副書名	一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XII							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	中尾 智行、濱田 竜彦							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 TEL (0857) 51-7552							
発行年月日	西暦2014年（平成26年）3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとだかゆみのきいせきよんく 本高弓ノ木遺跡（4区）	鳥取市本高 97、109、110- 2、112-2、113- 2、218-1、218- 2、219-1～3、 220-1・2、221- 1・2、222-1～5、 224-1・2、225- 1～3	31201	3-0388	35°28'58"	134°11'52"	20210501 ） 20220305 20220426 ） 20230224	474㎡	国道9号線 （鳥取西道路） 道路改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
本高弓ノ木 遺跡（4区）	集落跡、 生産遺跡	縄文時代後晩期 弥生時代 古墳時 代～、古代、中世		溝 土坑 水田跡		土器（縄文土器、 弥生土器、土師器、 須恵器ほか） 木製品		
要約	本高弓ノ木遺跡（4区）でも、（5区）から連続するとみられる古墳時代前期の溝を検出した。その他、弥生時代中期～後期の溝や土坑、古代や中世の耕作痕などを検出した。							

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県鳥取市

本高弓ノ木遺跡（4区）

発行 平成26年3月10日
編集 公益財団法人 鳥取県教育文化財団
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570 鳥取県鳥取市1丁目271番地
電話 (0857) 26-7934
印刷 勝美印刷株式会社
